

2025 年 2 月

# 食料安全保障月報

## (第 44 号)



令和 7 年 2 月 28 日

**農林水産省**

# 食料安全保障月報について

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

## 2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

# 2025年2月食料安全保障月報（第44号）

## 目次

### 概要編

I	2025年2月の主な動き	1
II	2025年2月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2024/25年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2024/25年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「フィリピンの主要穀物の生産・輸入動向」	5

### （資料）

1-1～3	穀物等の主要輸出国の生産量（過去10年平均との増減比較）	10
1-4	穀物等の国際価格の動向	13
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	14
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	15
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	17
5	食品小売価格の動向	21
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）	22
7	FAO食料価格指数	24

### 今月のコラム

「タイの食事情（コメ料理）について」	25
--------------------	----

### 品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
<米国>	2024/25年度の生産量は前年度から9.3%増加の見込み	
<カナダ>	2025/26年度の作付面積は前年度から2.5%増加の見込み(AAFC)	
<豪州>	2024/25年度の小麦の収穫は完了し生産量は31.9百万トンの見込み(ABARES)	
<EU27>	2024/25年度の輸出量は前年度から減少し25.7百万トンの見込み(EC)	
<ロシア>	2024/25年度の輸出量は前月から下方修正され45.5百万トンの見込み	
<ウクライナ>	2024/25年度の輸出量は前月から下方修正され15.5百万トンの見込み	
<中国>	2024/25年度の輸入量は前月から下方修正され8.0百万トンの見込み	

2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 2024/25年度の生産量は史上最高の前年度から3.1%減少する見込み	
	＜ブラジル＞ 2024/25年度の生産量は前年度から3.3%増加する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2024/25年度の生産量は、前年度並みの見込み	
	＜ウクライナ＞2024/25年度の生産量は、前年度より18.5%減少する見込み	
	＜中国＞ 2024/25年度の生産量は、前年度から2.1%増加する見込み	
3	コメ	15
	＜タイ＞ 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.5%増加する見込み	
	＜米国＞ 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ1.9%増加する見込み	
	＜中国＞ 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.5%増加する見込み	
	＜インド＞ 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ5.2%増加する見込み	
	＜ベトナム＞ 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.8%増加する見込み	
II	油糧種子	
	大豆	21
	＜米国＞ 2024/25年度の生産量は前年度から4.9%増加する見込み	
	＜ブラジル＞ 2024/25年度の生産量は前年度から10.5%増加する見込み	
	＜カナダ＞ 2024/25年度の生産量は前年度から8.4%増加する見込み (AAFC)	
	＜中国＞ 2024/25年度の生産量は、史上最高の前年度から0.9%減少する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2024/25年度の生産量は、前年度から1.6%増加する見込み	
	(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2024/25年度) …	27
	(参考2) 単位換算表 …	27
	(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎) …	28

## 特別分析トピック

「我が国と世界のでん粉をめぐる動向」

### 【利用上の注意】

表紙写真：ブラジル マットグロッソ州カンポス・デ・ジューリオ市の大豆畑。収穫作業は2025年1月23日に行われた。当圃場の大豆は4.38トン/ヘクタールと高単収を記録。(マットグロッソ州2025年1月23日) 撮影者：Rafael Rohenkohl氏

(概要編)

## I 2025年2月の主な動き

### 主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の2024/25年度の作況について、北半球での収穫がほぼ終了した一方、南半球では大豆等の作物が生育期を迎えている。

2024/25年度の状況について、品目別にみると、2月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、EU、ロシア、英国で単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、豪州、米国、インドで単収・収穫面積ともに増加、カザフスタン、中国、カナダで単収が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022年3月に史上最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する4者合意（黒海穀物イニシアティブ）については2023年7月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU向け輸出の動向も含め注視が必要。

とうもろこしについては、中国、南アフリカで単収・収穫面積ともに前年度より増加、ブラジルで収穫面積が増加するものの、米国で収穫面積が減少、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少、EU、ロシアで単収が減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。

大豆については、ブラジル、米国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、主に砂糖、植物油、食肉の価格の低下等により、12月の127.0から、2025年1月（最新値）は124.9に下落（参考：2024年1月117.6、2023年1月131.4、2022年1月135.7、2021年1月113.5、2020年1月102.5）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値の約5割の水準で推移。

### 早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021年7月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2025年2月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



## ウクライナの生産・輸出動向

USDAの2月需給報告によれば、2024/25年度の小麦の生産量は、収穫面積は増加するものの単収が減少することから、前年度より0.4%減少し2,290万トンとなる見込み。また、とうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに減少することから、前年度より18%減少し2,650万トンとなる見込み。2024/25年度の小麦の輸出量は、生産量及び期首在庫の減少を受け、前年度より17%減少し1,550万トンとなる見込み。とうもろこしの輸出量も前年度より25%減少し2,200万トンとなる見込み。

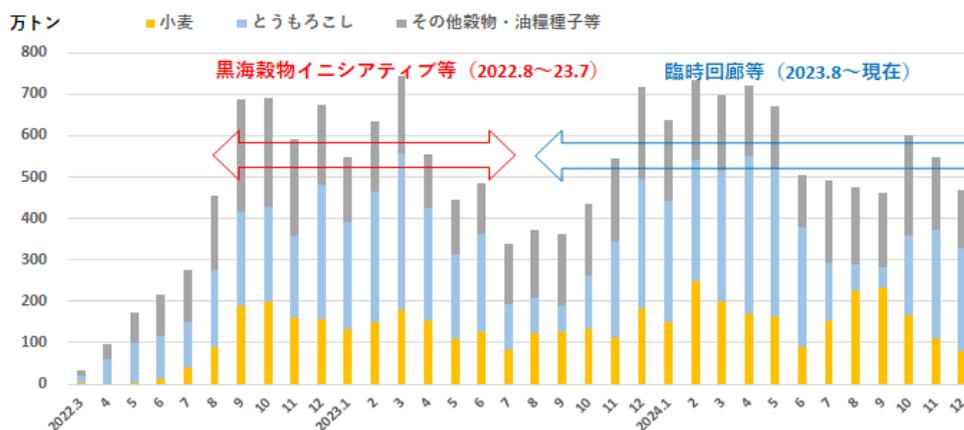
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024/25年度の小麦及びとうもろこしの収穫作業は終了した。また、2025/26年度の冬小麦の作付作業も終了している。ウクライナ気象センターによれば、12月に引き続き1月も例年より温暖な天候となった。冬小麦は浅い休眠状態にあり、日中の気温が8度以上の日にはわずかな生長がみられた。しかし、降水量不足の状態が長期間続いており、土壌水分量は非常に少ない状態。これは冬小麦だけでなく、春に作付けされるとうもろこし等の作付けにも影響を及ぼす懸念がある。

## 臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等3港（オデーサ港、チョルノモルシク港、ピブジェヌイ港）からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績（2022年8月～23年7月）は、穀物・油糧種子等6,846万トン（うち、小麦1,728万トン、とうもろこし2,949万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊や、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が大半を占めている。

### （参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022年3月～2024年12月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

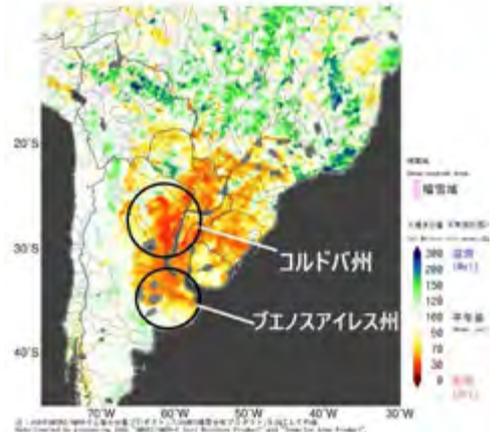
注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

### 1 アルゼンチン：1月の高温乾燥により大豆及びとうもろこしの作柄が悪化

USDAによれば、2024/25年度のアルゼンチン大豆生産量は4,900万トンと、前月予測から6%下方修正されたものの、前年度から2%増加する見込み。前月からの下方修正の要因は、アルゼンチン大豆の約75%を占める早植え大豆が開花期を迎える1月に高温乾燥が続く、作柄が悪化したことによる。

2024/25年度のとうもろこし生産量は5,000万トンと、前月予測から2%下方修正され、前年度と同水準となる見込み。昨年、遅植えとうもろこしに病害虫のヨコバイが大量発生し、作柄が悪化した一方、早植えとうもろこしは被害を免れたことから、今年度は多くの農家が例年より多くの早植えとうもろこしを作付けしたところ、早植えとうもろこしが受粉期を迎える1月に高温乾燥となり、大豆同様に作柄が悪化した。

図：アルゼンチン土壤水分量(平年対差)  
(2025. 1. 1~1. 15)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMA1)

### 2 ブラジル：大豆の生産量は前月から変更なしも、とうもろこしは下方修正

USDAによれば、2024/25年度ブラジル大豆生産量は1億6,900万トンと、前月予測から変更なく、前年度から10%増加し、過去5年平均を18%上回り史上最高の見込み。ブラジルの大豆生産の約44%を占める中西部の大部分で生育期を通じて天候に恵まれ、作柄は良好となった。現在、収穫作業が始まっており、2月7日時点の収穫進捗率は15.1%と、平年(18.4%)をわずかに下回っている。

2024/25年度のとうもろこし生産量は1億2,600万トンと、前月予測から1%下方修正されたものの、前年度から3%増加し、過去5年平均を12%上回る見込み。同国のとうもろこしの約76%を占める冬とうもろこしは、大豆収穫後の1月以降に作付けされる。例年、大豆の作付作業は雨季が始まる9月上旬から開始されるが、今期は雨季の開始が遅れ、大豆の作付作業が遅れが生じた。このため収穫時期も例年より遅れ、冬とうもろこしの作付作業にも遅れが生じている。雨季は通常4月下旬までに終了し、その後は厳しい乾季となる。冬とうもろこしが受粉期を迎える時期に乾季となった場合、作柄が悪化する懸念がある。

### 3 アルゼンチン：輸出税の引き下げ等により小麦輸出が好調

USDAによれば、アルゼンチンの2024/25年度(2024年12月~2025年11月)の小麦輸出は好調なスタートを切り、今年度の小麦の輸出量は前年度比40%増の1,150万トンとなる見込み。輸出を牽引する主な要因は、2022/23年度の干ばつによる減産から生産量は継続的に回復し、2024/25年度生産量は前年度比約12%増の1,770万トンとなったことや、政府の政策がより有利になることを期待し、農家が十分な小麦在庫を保有していたことによる。2025年1月27日、アルゼンチン政府は2025年6月30日までの期限付きで主要品目の輸出税を引き下げた。小麦の輸出税は12.0%から9.5%に引き下げられ、小麦輸出をさらに下支えしている。

南半球の小麦生産国であるアルゼンチンは、北半球の多くの小麦輸出国が供給量を減少させる時期に世界市場に小麦を供給する。アルゼンチン小麦の伝統的な輸出先国はブラジルだが、アルゼンチンの港湾データによれば、アルゼンチンはここ数か月、アフリカ大陸全域で市場シェアを拡大している。また、南アジアや東南アジアにも輸出を増加させている。

## II 2025年2月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、1月末、200ドル/トン台前半で推移。2月に入り、米国の対メキシコ関税措置の延期により報復関税に伴う米国産の需要低下懸念が和らいだことや黒海地域の冬小麦の作柄に対する懸念等を受けて210ドル/トン台半ばまで上昇。その後、米国や黒海地域の冬小麦の作柄に対する懸念が和らいだこと等を受けて210ドル/トン台前半まで下落したものの、再び米国及びロシアの寒波の影響懸念から上昇し、2月中旬現在、220ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、1月末、180ドル/トン台後半で推移。2月に入り、米国の対メキシコ関税の延期により報復関税に伴う米国産の需要低下懸念が和らいだこと等を受けて190ドル/トン台半ばまで上昇。その後、アルゼンチンの降雨等を受けて190ドル/トン台前半まで下落したものの、アルゼンチンの高温乾燥等を受けて上昇し、2月中旬現在、190ドル/トン台半ばで推移。

コメは、1月末、480ドル/トン台前半で推移。2月に入り、タイのバーツ安やアジアからの需要低迷、アフリカにおけるインド産米等との競合を受けて下落し、2月中旬現在、440ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、1月末、380ドル/トン台前半で推移。2月に入り、米国の対中関税の導入に対し中国が大豆への報復関税を実施せず米国産の需要低下懸念が和らいだこと等を受けて390ドル/トン台半ばまで上昇した。その後、アルゼンチンの降雨、ブラジルの豊作見通し等を受けて370ドル/トン台後半まで下落したものの、アルゼンチンの高温乾燥等を受けて上昇し、2月中旬現在、380ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、コメはタイ国家貿易委員会価格

## III 2024/25年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より0.04%減の28.19億トン。消費量は、前年度より1.3%増の28.56億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り26.5%となる見込み(資料2参照)。

生産量は、前年度より、小麦、コメで増加も、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少となり、28.19億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.56億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、コメで増加も、小麦、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少し、4.93億トンの見込み。

期末在庫量は、7.56億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

(注：数値は2月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

## IV 2024/25年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.78億トン。消費量は前年度を上回り6.66億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る21.0%となる見込み。

(注：数値は2月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」等による)

## V 今月の注目情報：フィリピンの主要穀物の生産・輸入動向

人口増加と経済成長が続いているフィリピンでは、小麦のほぼ全量を輸入に依存しており、その輸入量も近年増加傾向にある。同様に小麦の大半を輸入に依存する日本との競合の可能性についてまとめた。また、フィリピンはコメの輸入国でもあり、生産量が減少する中で、人口増加により需要が増加しているフィリピンにおける2024/25年度のコメの輸入見通しをまとめた。

注：文中の「2024/25年度」等は市場年度で、フィリピンの小麦及びコメは2024年7月から2025年6月。

### 1 小麦の輸入動向

#### (1) 消費動向

USDAによれば、2024/25年度の小麦の消費量は、710万トンと前年度に比べ2.2%増、過去10年平均（614万トン）と比べ15.7%増となる見込み（図1）。

国連食糧農業機関（FAO）の Food Balance Sheet によれば、フィリピンの一人当たりの小麦年間消費量は、25 kg/人（2002年）から44 kg/人（2022年）と増加している。

フィリピン製粉企業協会（PAFMIL）によれば、フィリピンでは、コメが主食であり、その状況に変わりはないが、若い世代におけるパン及び麺類（特にインスタント麺）の消費が増加傾向とのこと。

#### (2) 輸入動向

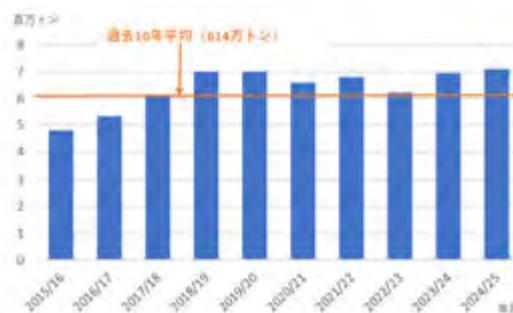
USDAによれば、製粉用、飼料用小麦ともに輸入量は増加傾向にあり、2024/25年度の小麦の輸入量は、720万トンと前年度（692万トン）と比べ4.1%増、過去10年平均（620万トン）と比べても16.1%増と、2018/19年度（757万トン）に次ぐ輸入量となる見込み（図2）。

フィリピンは、世界第7位の小麦輸入国であり（図3）、世界の小麦輸入量に占めるフィリピンの割合は3.5%となっている。

#### (3) 国別輸入動向

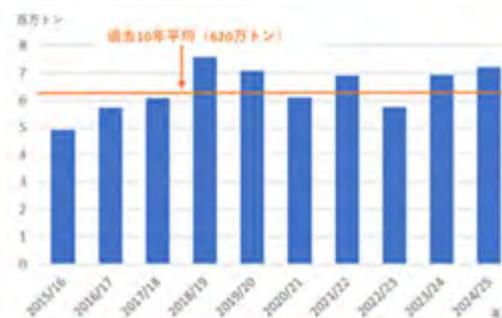
USDAによれば、2023/24年度のフィリピンの国別小麦輸入量は、1位米国、2位豪州、3位ブラジルの順となっており、米国が270.1万トンと、前年度（197.0万トン）と比べ37.1%増、豪州が259.2万トンと前年度（306.7万トン）と比

図1 フィリピンの小麦消費量の推移



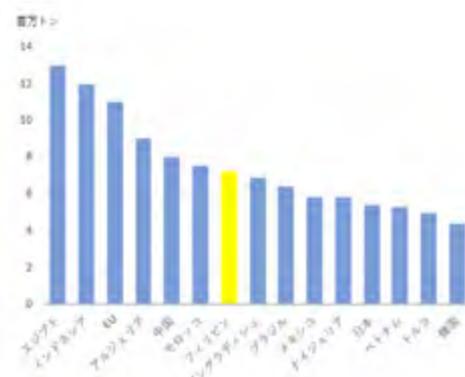
出典：USDA「PS&D」（2025.2）をもとに農林水産省で作成

図2 フィリピンの小麦輸入量の推移



出典：USDA「PS&D」（2025.2）をもとに農林水産省で作成

図3 小麦の国別輸入量上位  
(2024/25年度、上位15カ国)



出典：USDA「PS&D」（2025.2）をもとに農林水産省で作成

べ15.5%減、ブラジルが110.5万トンと前年度の5トンから大きく増加している。これは、主要輸入先である豪州が干ばつにより減産となり、豪州からの輸出が減少した一方で、ブラジルが東南アジアへ向けに飼料用小麦の輸出国として台頭してきたことによる（図4）。

#### （4）製粉用小麦の輸入量の推移

フィリピン統計局によれば、2024年1月～12月の製粉用小麦の輸入量は、334.5万トンと、前年（298.8万トン）に比べ11.9%増となった。同期間の輸入先国別には、米国が276.7万トンと82.7%を占め、次いでカナダ39.7万トンで11.9%、豪州が12.7万トンで3.8%と続いている（表1）。

製粉用小麦の輸入量は、2015年から2024年の10年間で255.9万トンから334.5万トンと30.7%増加した。2020年に329.9万トンとピークに達したが、2024年はそのピークを上回った。

業界情報によれば、フィリピンで輸入されている製粉用小麦の銘柄・等級は、米国産ダーク・ノーザン・スプリング（DNS）、米国産ソフト・ホワイト（SW）、カナダ産ウェスタン・レッド・スプリング（CW）のいずれも2等が主であるとのこと。

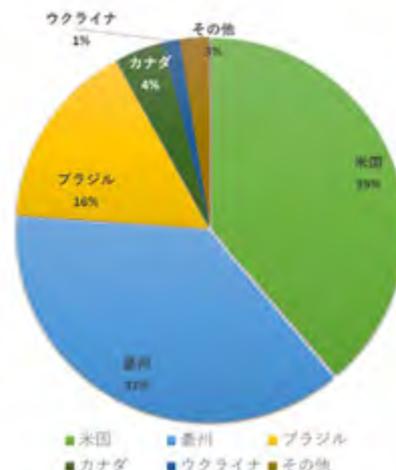
#### （5）飼料用小麦の輸入量の推移

フィリピン統計局によれば、2024年1月～12月の飼料用小麦の輸入量は、342.0万トンと、前年（256.4万トン）に比べ33.4%増となった。

同期間の輸入先国別には、豪州が230.5万トンと67.4%を占め、次いでブラジル101.7万トンで29.7%、ウクライナが7.9万トンで2.3%と続いている（表2）。

飼料用小麦の輸入量は、2015年から2024年の10年間で197.6万トンから342.0万トンと73.1%増加した。2018年に394.5万トン、2019年に394.7万トンと400万トン近くまで輸入量が伸びたが、2020年以降は300万トン前後で推移している。

図4 フィリピンの主要小麦輸入先国シェア (2023/2024)



出典：USDA「GAIN Global Agricultural Information Network (2024.10.3)」をもとに農林水産省で作成

表1 フィリピンの製粉用小麦輸入先国

(輸入量:万トン、シェア:%)

2021年 (2021年1月～12月)		2022年 (2022年1月～12月)		2023年 (2023年1月～12月)		2024年 (2024年1月～12月)	
国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア
米国	299.5 91.9	米国	237.1 77.9	米国	210.4 70.4	米国	276.7 82.7
カナダ	7.8 2.4	豪州	34.4 11.3	カナダ	46.6 15.6	カナダ	39.7 11.9
豪州	3.7 1.1	カナダ	31.3 10.3	豪州	32.9 11.0	豪州	12.7 3.8
その他	15.1 4.6	その他	1.7 0.6	その他	8.9 3.0	その他	5.3 1.6
計	326.0 100.0	計	304.5 100.0	計	298.8 100.0	計	334.5 100.0

出典：フィリピン統計局 Open Stat Data base

表2 フィリピンの飼料用小麦輸入先国

(輸入量:万トン、シェア:%)

2021年 (2021年1月～12月)		2022年 (2022年1月～12月)		2023年 (2023年1月～12月)		2024年 (2024年1月～12月)	
国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア
豪州	187.8 67.8	豪州	289.9 91.3	豪州	248.7 97.0	豪州	230.5 67.4
インド	29.2 10.5	インド	27.1 8.5	ブラジル	7.2 2.8	ブラジル	101.7 29.7
ウクライナ	27.0 9.8	ウクライナ	0.4 0.1	ウクライナ	0.5 0.2	ウクライナ	7.9 2.3
フランス	11.9 4.3	-	-	インド	0.0 0.0	ルーマニア	1.6 0.5
その他	21.1 7.6	その他	0.0 0.0	その他	0.0 0.0	その他	0.3 0.1
計	277.0 100.0	計	317.4 100.0	計	256.4 100.0	計	342.0 100.0

出典：フィリピン統計局 Open Stat Data base

## 2 コメの輸入・生産動向

### (1) 消費動向

USDA によれば、2024/25 年度のコメの消費量は 1,720 万トンと前年度 (1,660 万トン) と比べ 3.6% 増、過去 10 年平均 (1,444 万トン) と比べ 19.1% 増となる見込み (図 5)。

フィリピンでは、「コメはいのち (Rice is Life)」と言われるように、コメは主食としての地位を保ち、人口増加等に伴い消費量が増加している。

国連食糧農業機関 (FAO) の Food Balance Sheet によれば、フィリピンの一人当たりのコメ年間消費量は、108 kg/人 (2002 年) から 194 kg/人 (2022 年) に増加している。

一方、コメ生産量は過去 10 年平均で、1,204 万トンと増加する消費量との差が広がっている。2024/25 年では 520 万トンの差となり (図 6)、この差を補うため輸入量が増加している。

### (2) 輸入動向

フィリピンは世界第 1 位のコメ輸入国である (図 7)。

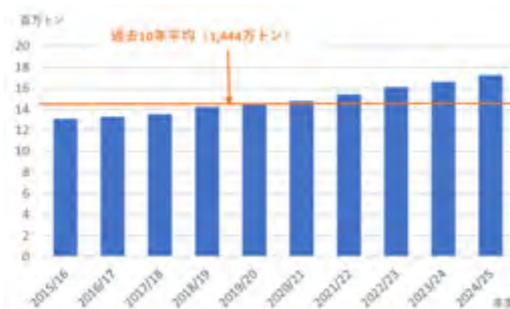
フィリピン統計局によれば、2024 年 1 月～12 月の輸入量は、477 万トンと、前年 (361.1 万トン) に比べ 32.1% 増。同期間の輸入先国別には、ベトナム 355.0 万トンと 74.4% を占め、タイ 64.2 万トンで 13.5%、パキスタン 30.9 万トンで 6.5% の順 (表 3)。

### (3) 生産動向

フィリピンは世界第 7 位のコメ生産国であり、世界のコメ生産量に占めるフィリピンの割合は 2.3% となっている。

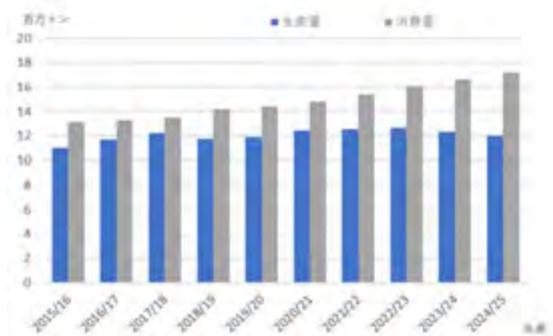
USDA によれば、2024/25 年度のコメの生産量は、2024 年 7 月に上陸した台風「ガエミ」と 9 月に上陸した台風「ヤギ」による稲作への被害が影響し、1,200 万トンと前年度 (1,233 万トン) と比べ 2.6% 減となる見込み (図 8)。

図 5 フィリピンのコメの消費量の推移



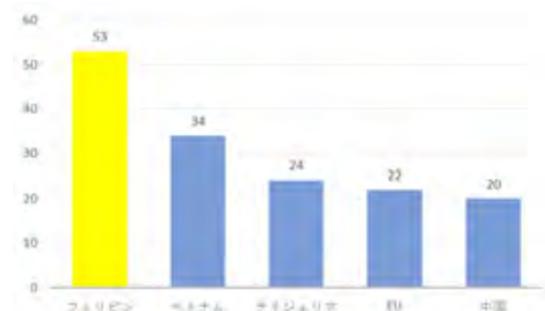
出典：USDA 「PS&D」 (2025.2) をもとに農林水産省で作成

図 6 フィリピンのコメ生産量と消費量の推移比較



出典：USDA 「PS&D」 (2025.2) をもとに農林水産省で作成

図 7 コメの国別輸入量 (2024/25 年度、上位 5 カ国)



出典：USDA 「PS&D」 (2025.2) をもとに農林水産省で作成

表 3 フィリピンのコメ輸入先国

(輸入量:万トン,シェア:%)

2021年 (2021年1月～12月)		2022年 (2022年1月～12月)		2023年 (2023年1月～12月)		2024年 (2024年1月～12月)	
国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア
ベトナム	237.4 84.7	ベトナム	318.8 82.3	ベトナム	296.9 82.2	ベトナム	355.0 74.4
ミャンマー	20.2 7.2	ミャンマー	23.4 6.1	タイ	34.2 9.5	タイ	64.2 13.5
タイ	14.2 5.1	パキスタン	20.9 5.4	ミャンマー	15.6 4.3	パキスタン	30.9 6.5
中国	3.1 1.1	タイ	19.7 5.1	パキスタン	10.0 2.8	ミャンマー	20.9 4.4
パキスタン	2.5 0.9	インド	2.3 0.6	インド	2.7 0.8	インド	3.3 0.7
インド	1.5 0.5	中国	1.2 0.3	中国	1.1 0.3	中国	2.1 0.4
その他	1.4 0.5	その他	0.8 0.2	その他	0.6 0.2	その他	0.6 0.1
計	280.4 100.0	計	387.3 100.0	計	361.1 100.0	計	477.0 100.0

出典：フィリピン統計局 Open Stat Data base

7月の台風「ガエミ」は、ルソン島、ビサヤ諸島、ミンダナオ島のフィリピン全土に影響を及ぼし、コメの作付地 67,432 ヘクタールが壊滅し、18,629 トンの損失をもたらした。

9月の台風「ヤギ」は、ビコール地方を直撃し、ルソン島とビサヤ諸島の他地域にも影響を与えた。34,935 ヘクタールの稲作に被害を与え、48,646 トンの損失となった。フィリピンの台風シーズンのピークは7月から10月で、台風の70%近くがこの時期に発生する。そのため台風被害により、毎年第3四半期には生産量が減少する傾向にある。フィリピンのコメ生産は、雨季作（3月作付け9月収穫）と、乾季作（9月作付け1月収穫）の二期作で一年を通し栽培が可能である。

### 3 今後の見通し

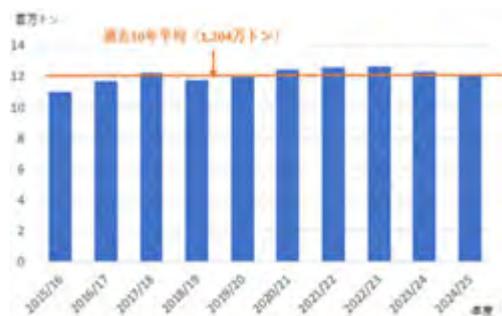
#### (1) 2024/25年度の小麦の輸入見通しと日本との競合可能性

USDAによれば、2024/25年度の輸入増の主な要因は、製粉用小麦についてはパン及びパスタの需要増に伴う製粉用小麦の需要の増加、飼料用小麦については国内のとうもろこし主要産地において害虫被害により飼料用とうもろこしの生産量が減少することによる代替需要が見込まれることが挙げられる。

フィリピンにおける2024年の飼料用小麦の輸入関税率については、大統領指令（EO）第62号により、0～7%と、とうもろこしの輸入関税率（5～15%）に比べ低い。フィリピンでは、近年とうもろこしと小麦の市場価格が共に下落しているが、業界関係者によると2024/25年度も、飼料用小麦の関税率がとうもろこしの関税率に比べ、低く設定されていることから、事業者は飼料用小麦の輸入を優先するとのことである。

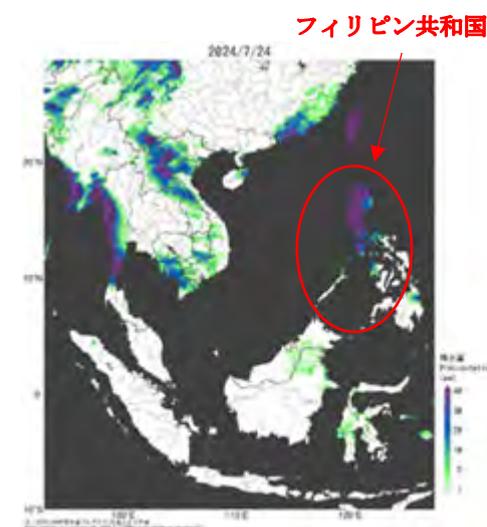
小麦輸入国である日本とフィリピンの今後の競合可能性については、業界情報によれば、フィリピンで輸入されている製粉用小麦の銘柄・等級は、米国産ダーク・ノーザン・スプリング（DNS）、米国産ソフト・ホワイト（SW）、カナダ産ウェスタン・レッド・スプリング（CW）の

図8 フィリピンのコメ生産量の推移



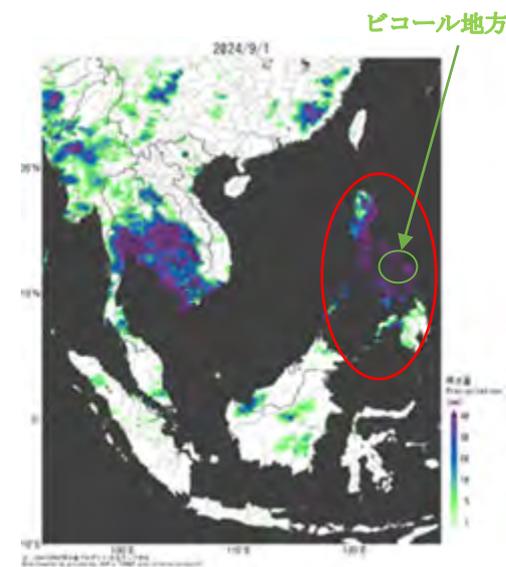
出典：USDA「PS&D」（2025.2）をもとに農林水産省で作成

図9 台風「ガエミ」上陸日の降水量 (2024.7.24)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

図10 台風「ヤギ」上陸日の降水量 (2024.9.1)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

2等が主であるとのこと。

これらは、日本が輸入している銘柄と重なるものの、等級に関しては、日本が輸入している小麦は1等を輸入している場合が多いのに対し、フィリピンは2等の輸入が主になっている。そのため、競合は生じていない。ただし、現在フィリピンは2等の輸入が主体であるが、今後、経済発展とともに消費者が1等を求めていくこともありうるため、この点も考慮しておく必要がある。

また、フィリピンの小麦輸入量は、全体（製粉用、飼料用）では日本の輸入量を上回るものの、製粉用小麦と飼料用小麦の割合はおおよそ半々であり、製粉用小麦の数量は日本より少ない。ただし、今後、若年層の人口増加が見込まれるフィリピンでは、消費量が増加傾向にあるため、引き続き注視が必要である。

## (2) 2024/25年度のコメの輸入見通し

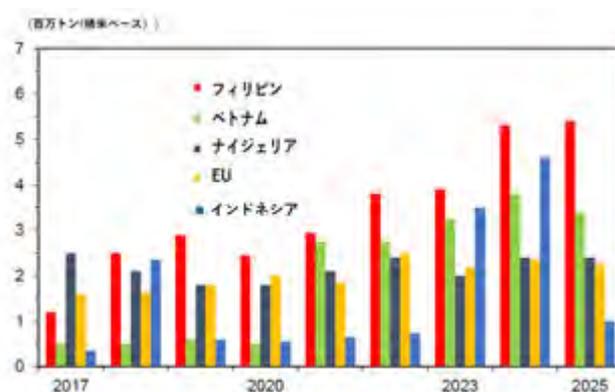
USDAによれば、2024/25年度の世界のコメ輸入では、1位フィリピン、2位ベトナムとなる見込みであり、フィリピンの輸入量は過去最高と予測されている（図12）。

フィリピン農務省は、コメの生産性向上支援のため、2019年から2024年までコメ競争力強化基金（RCEP）事業を実施し、稲作農家向けに種子、肥料、燃料の補助金を支給している。フィリピン農務省としては、コメに関し、単収の向上を図り、食料安全保障のためにも自給力向上を図っていく方針にある。

しかしながら、先に見たように、フィリピンのコメ消費量は年々増加傾向にある一方、生産量は、作付面積増の限界や度重なる台風被害の影響もあり、短期間での消費量を満たすほどのコメの生産量の増加は短期間では難しいと考えられる。

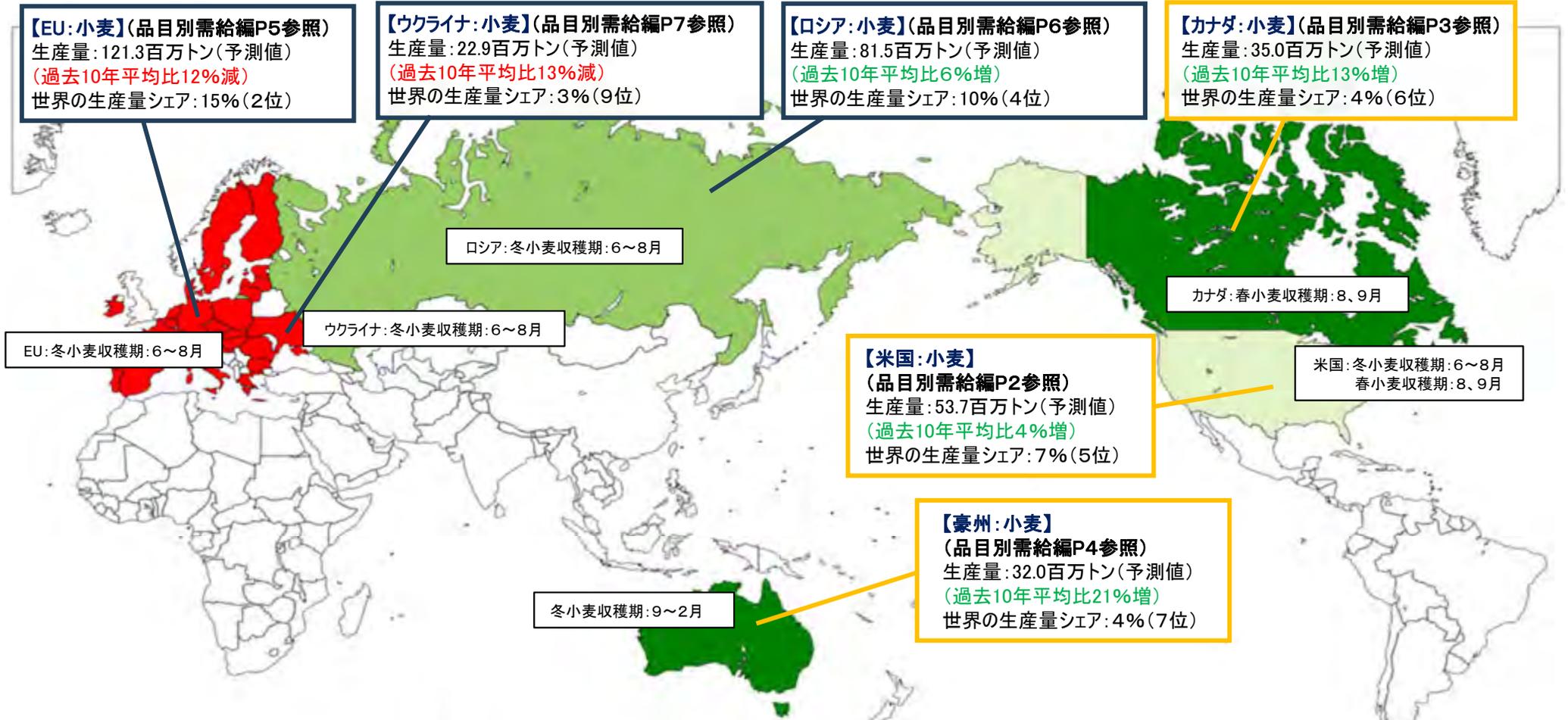
そのため、フィリピン農務省は、今後のコメ輸入継続の必要性を鑑み、2024年1月下旬に、ベトナム政府とコメ貿易協力に関する覚書を締結した。この覚書に基づき、フィリピンはベトナムから年間150万～200万トンの精米を競争力のある手頃な価格で輸入することができる。更に、フィリピン政府は2024年6月20日に、コメの関税を35%から15%に引き下げる旨公表した。このことから、2024/25年度もフィリピンは、世界第1位のコメ輸入国の地位を継続することが予測される。フィリピンのコメの輸入動向を、他のアジア諸国のコメ市場の動向と共に今後も注視していきたい。

図11 世界の主要コメ輸入国における輸入量の推移



資料 USDA 「Rice Outlook」(2025. 2. 13)より

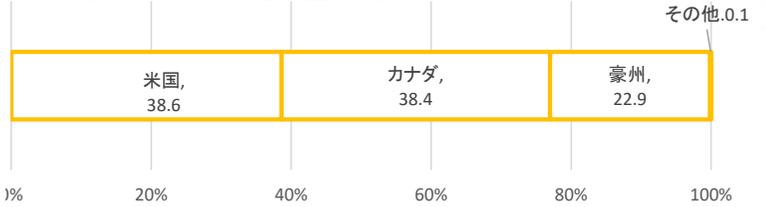
# 資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(2月版)



2024/25年度の世界の小麦輸出量(209.0百万トン) (単位:%)



2023年の日本の小麦輸入量(5.0百万トン) (単位:%)



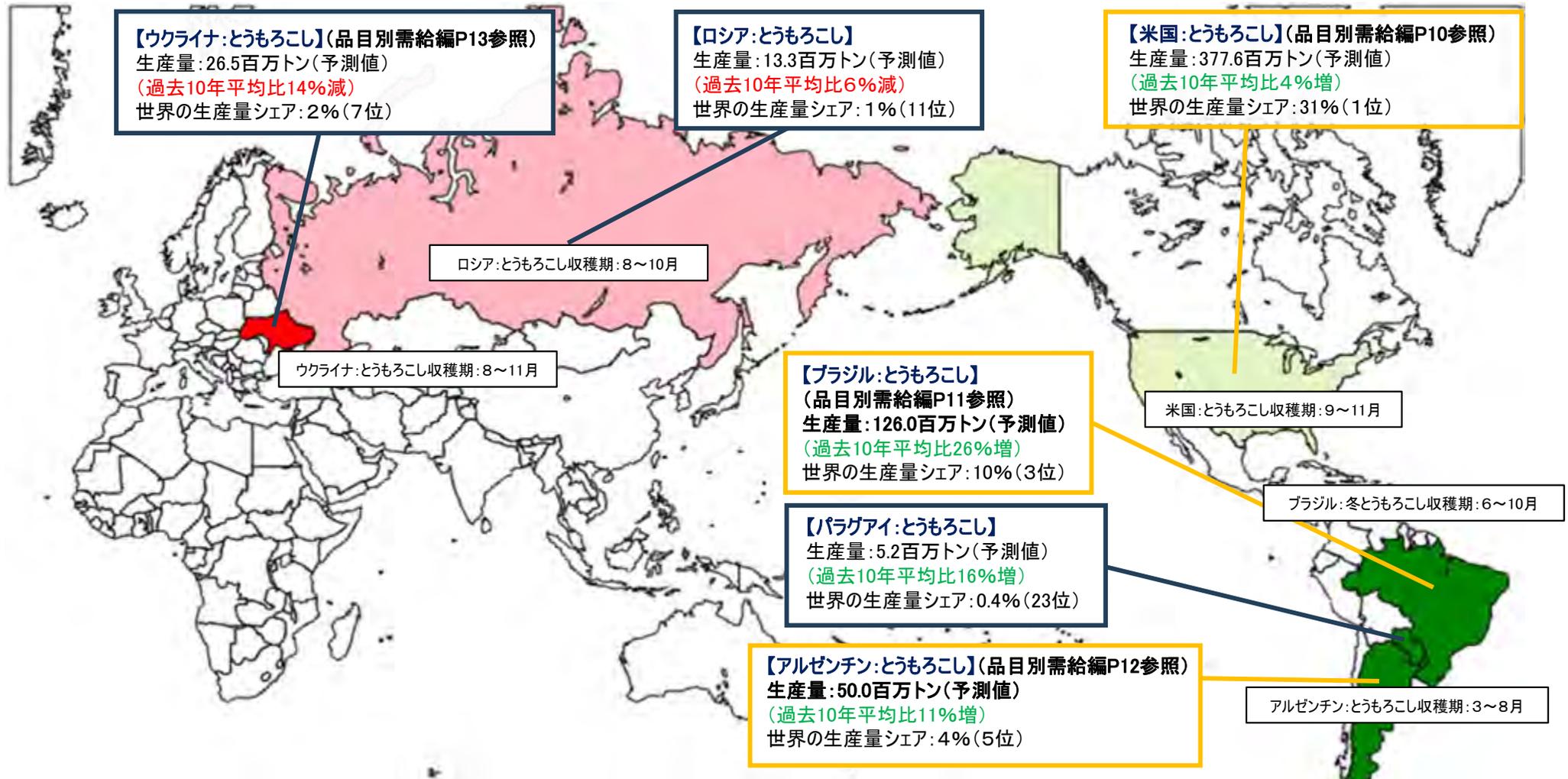
**生産量増減**



- 2023年度の日本の小麦輸入量は510万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(631万トン、うち食用は494万トン)の80.9%を占める。
- 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は238kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,203kcal)の10.8%を占める。

出典:USDA「PS&D」(2025.2)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

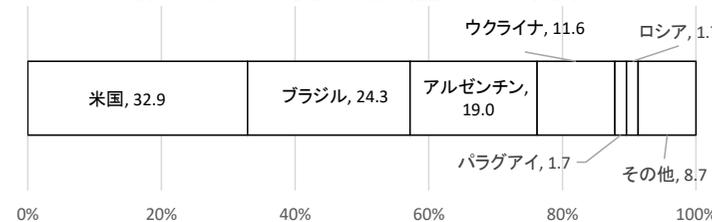
# 資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(2月版)



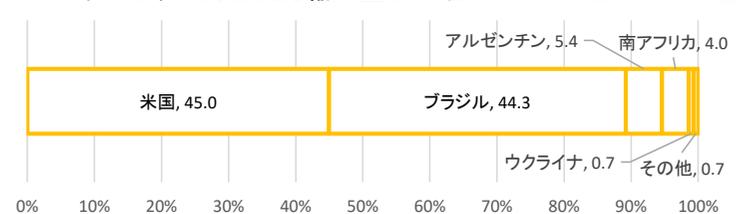
## 生産量増減



2024/25年度の世界のとうもろこし輸出量(189.2百万トン) (単位:%)



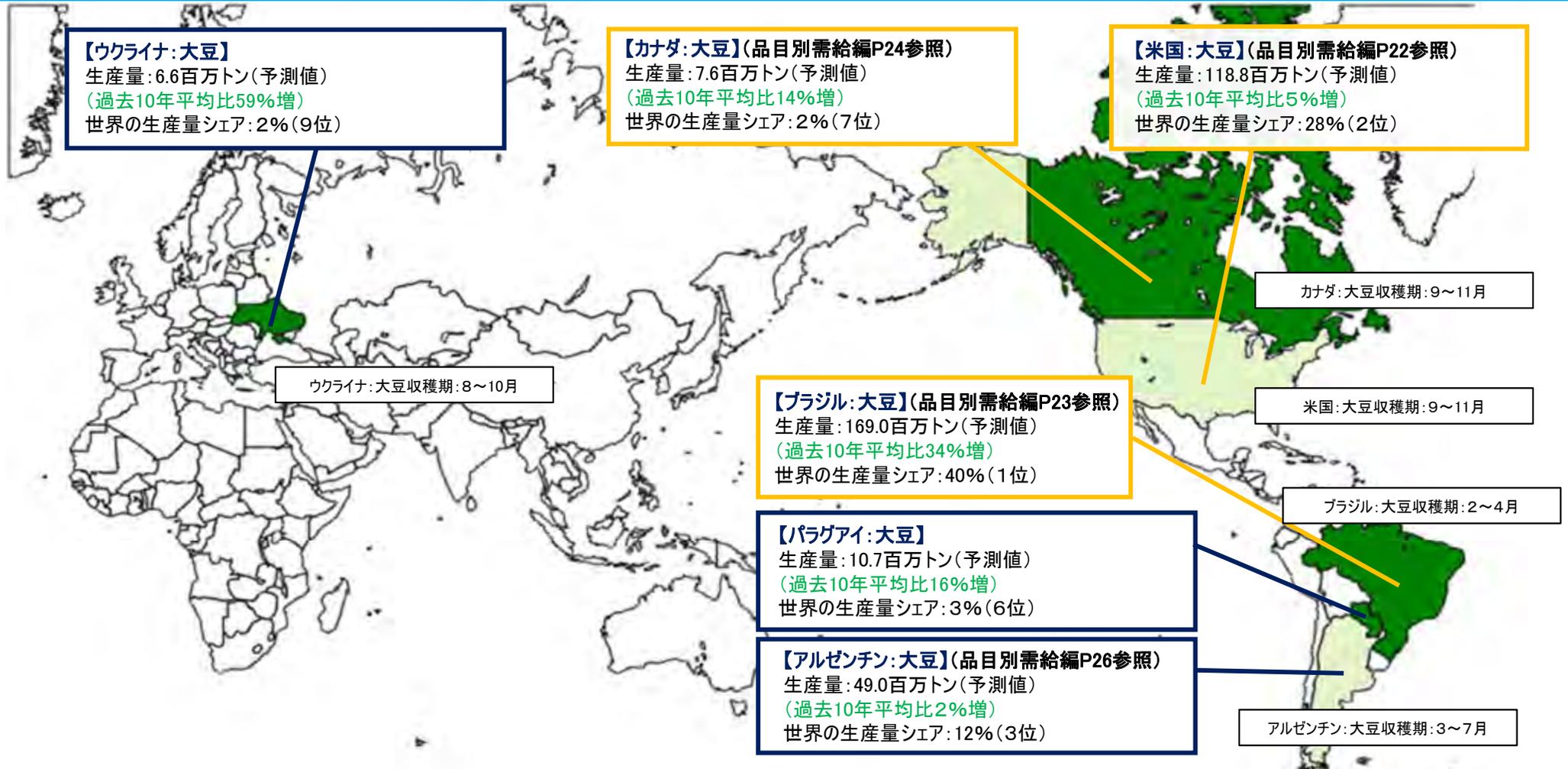
2023年の日本のとうもろこし輸入量(14.9百万トン) (単位:%)



○ 2023年度の日本のとうもろこし輸入量は1,499万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,486万トン、うち飼料用は1,159万トン)のほぼ全量を占める。

出典:USDA「PS&D」(2025.2)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

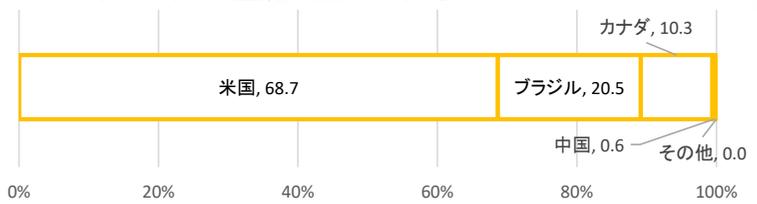
# 資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(2月版)



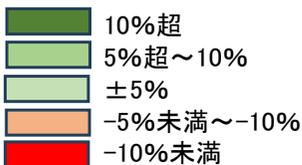
2024/25年度の世界の大豆輸出力(182.0百万トン) (単位:%)



2023年の日本の大豆輸入量(3.16百万トン) (単位:%)



**生産量増減**



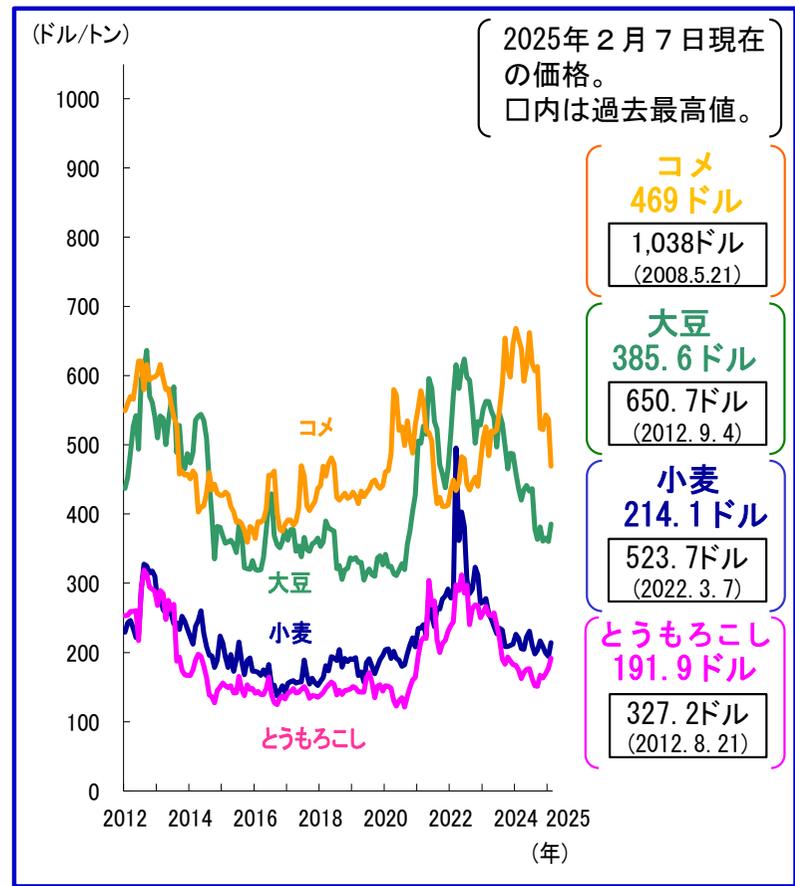
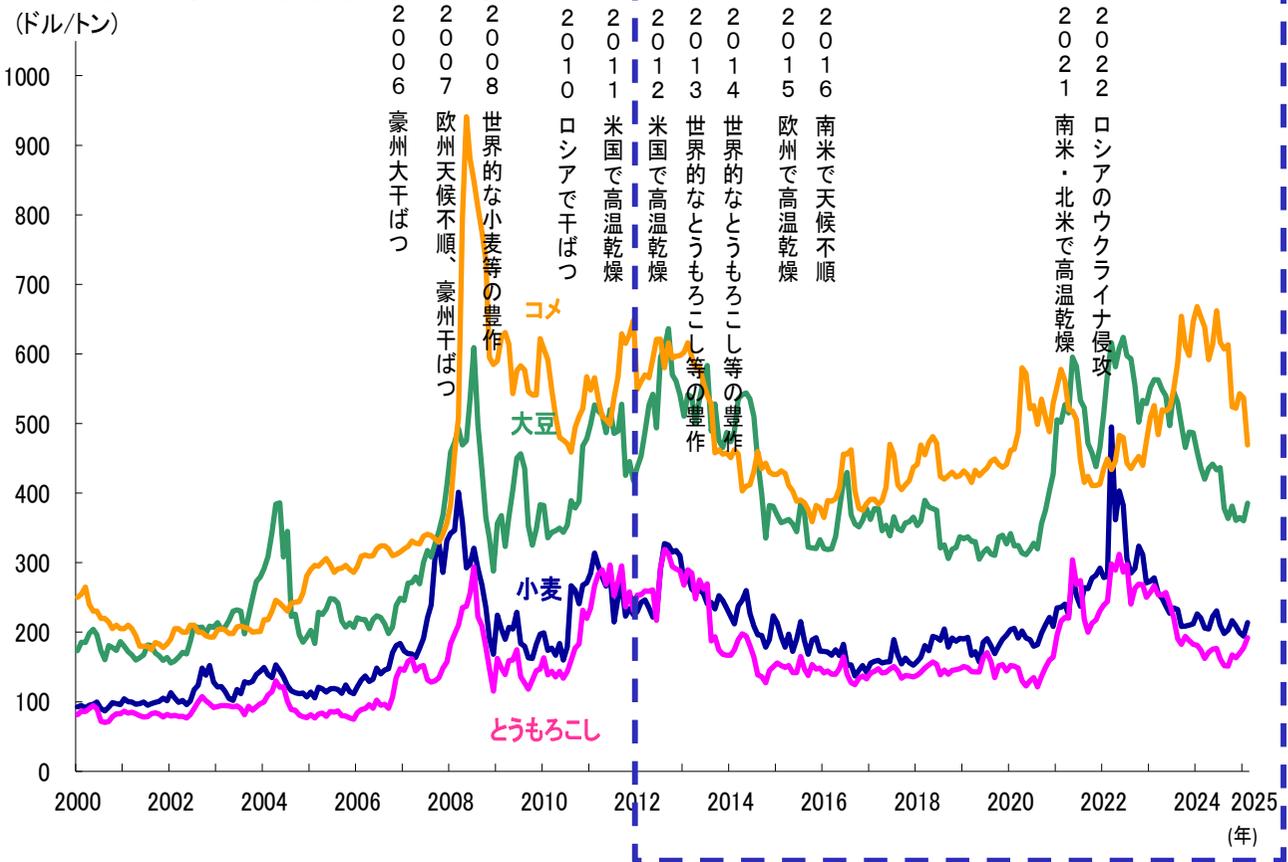
○ 2023年度の日本の大豆輸入量は307万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(356万トン、うち大豆油などの加工用は255万トン、食用は87万トン)の86.2%を占める。  
○ 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は55kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,203kcal)の2.5%を占める。

出典:USDA「PS&D」(2025.2)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

# 資料 1-4 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで低下。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、インドの一部輸出規制解除等を受け低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

## □ 穀物等の国際価格の動向

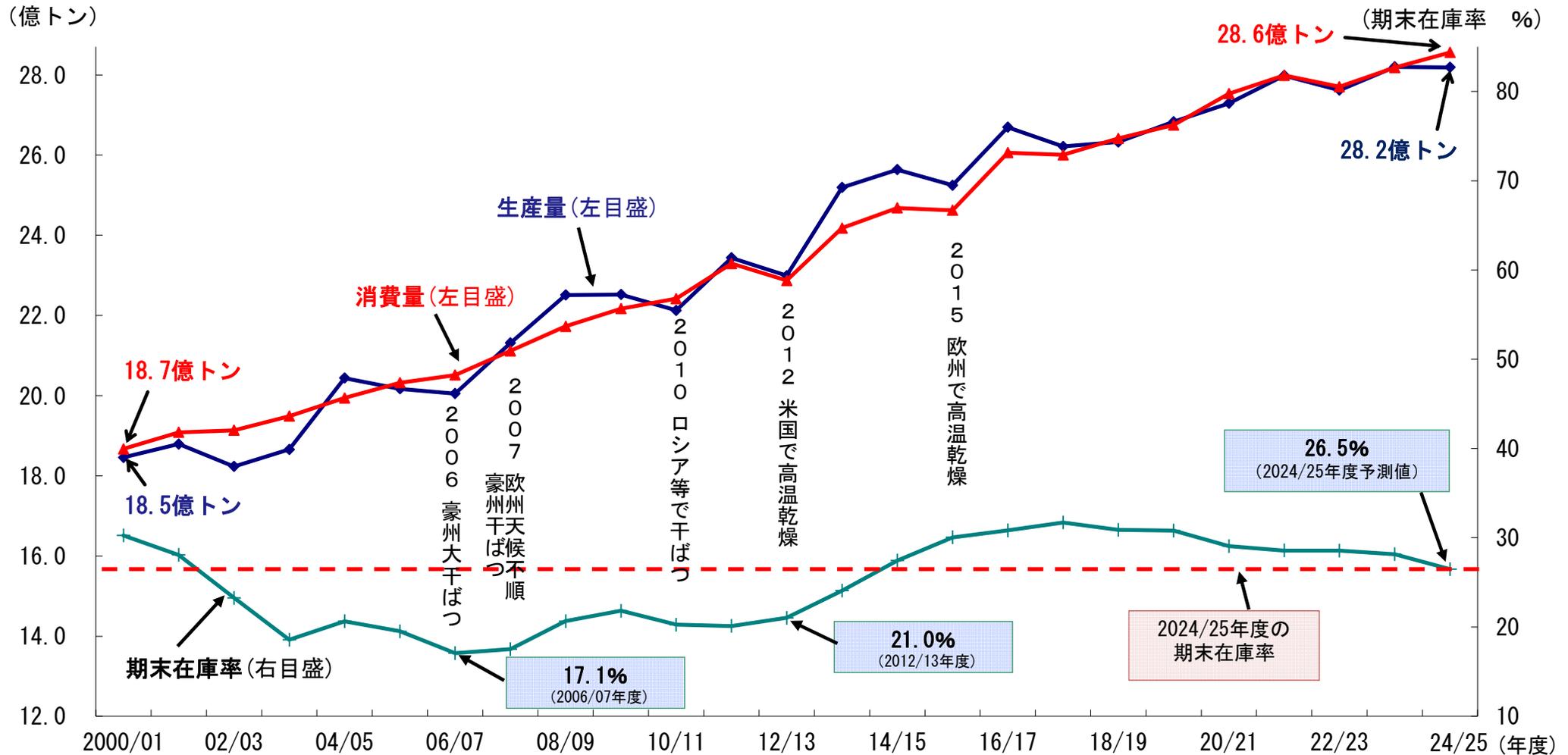


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。  
 注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、26.5%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

### □ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

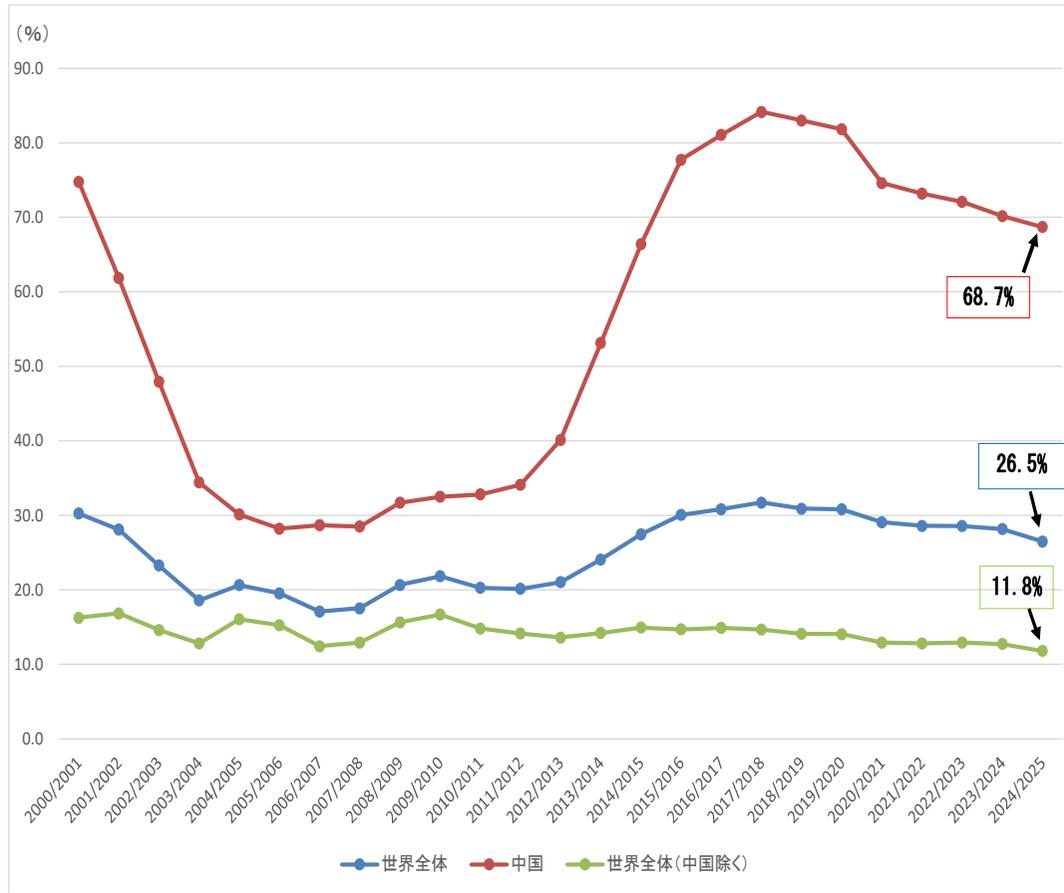


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(February 2025)、「PS&D」

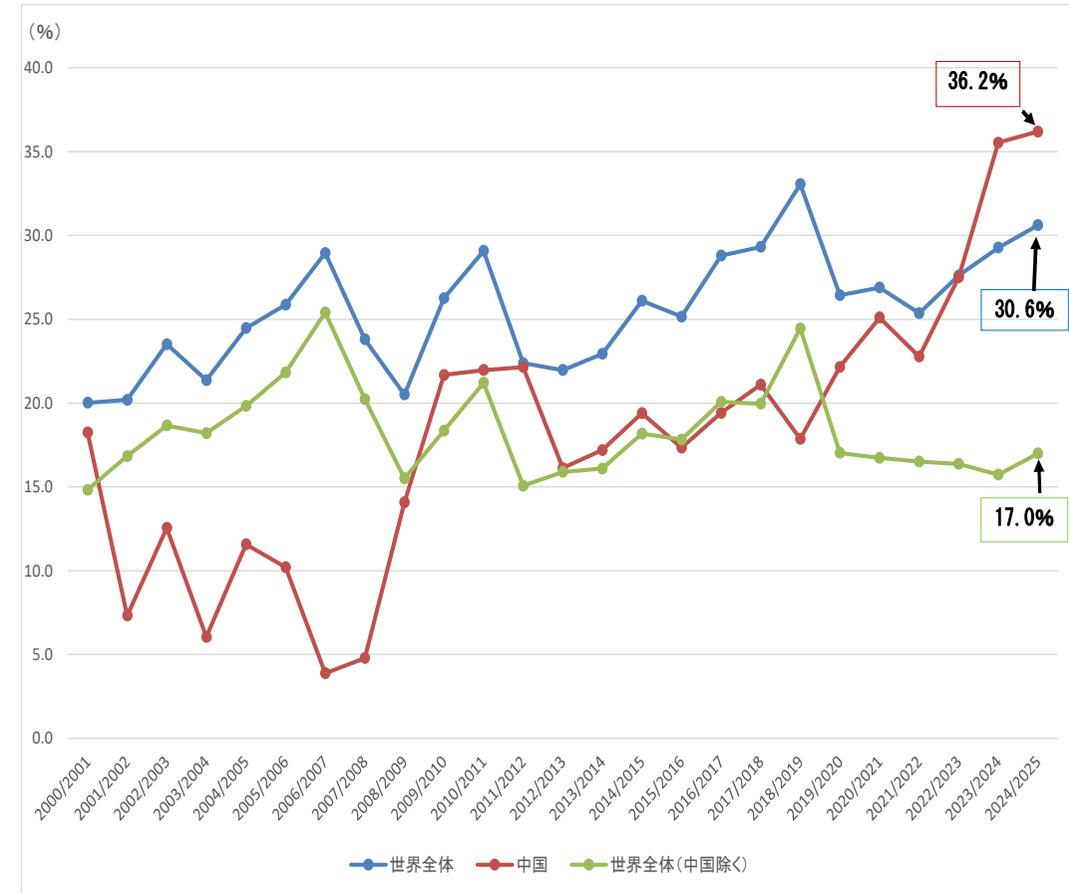
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

# 資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(February 11, 2025)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

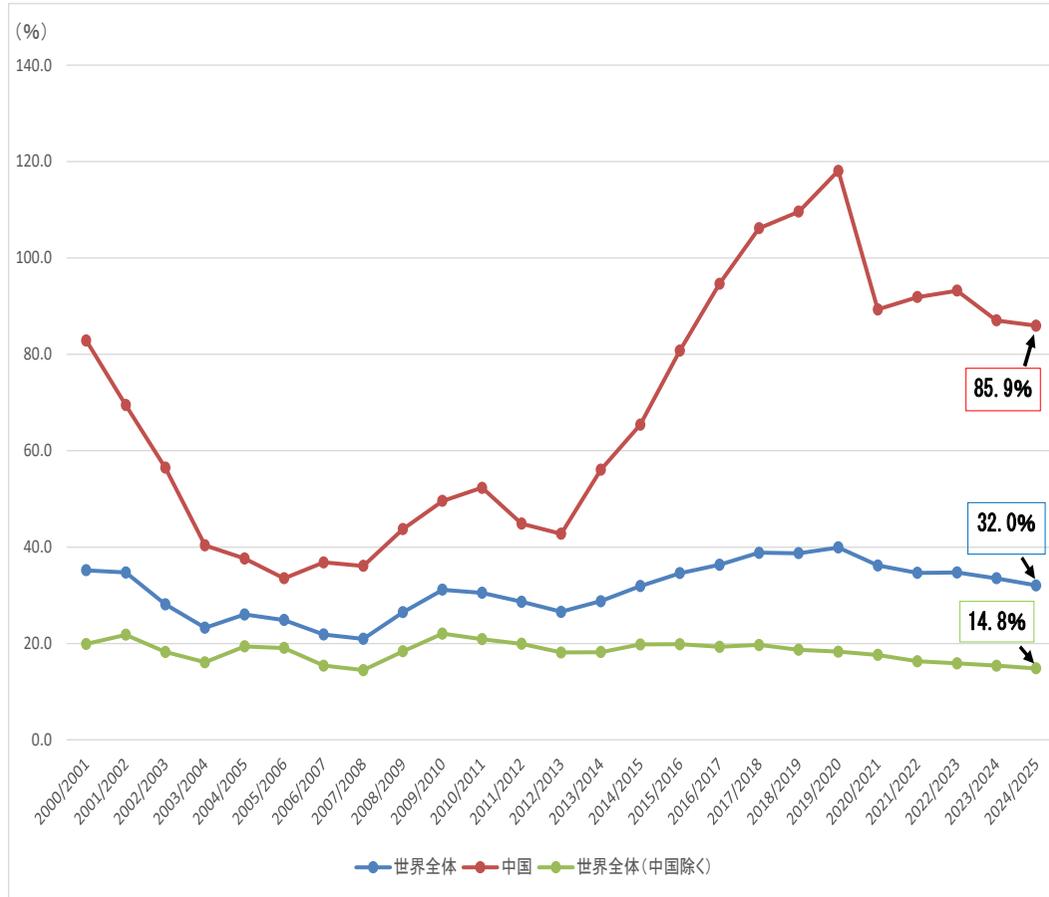
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

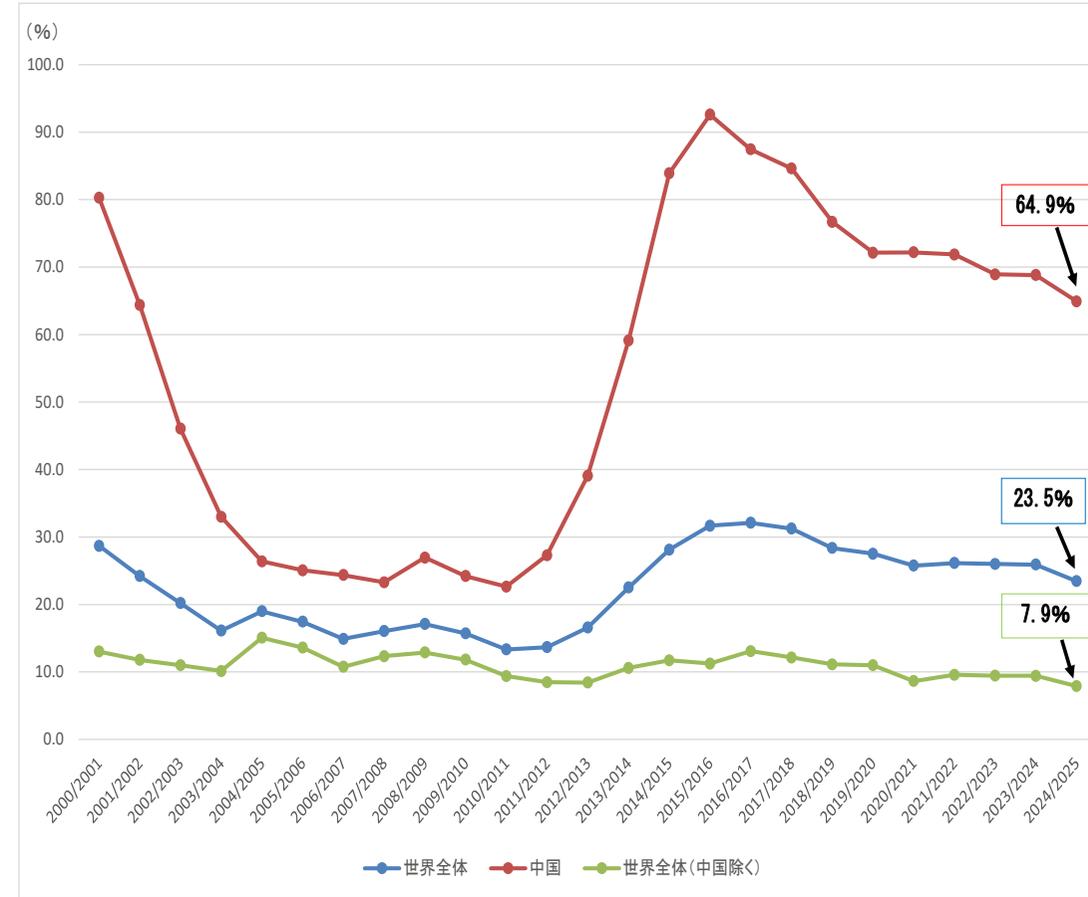
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

# 資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

## ○ 小麦の期末在庫率の推移



## ○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(February 11, 2025)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

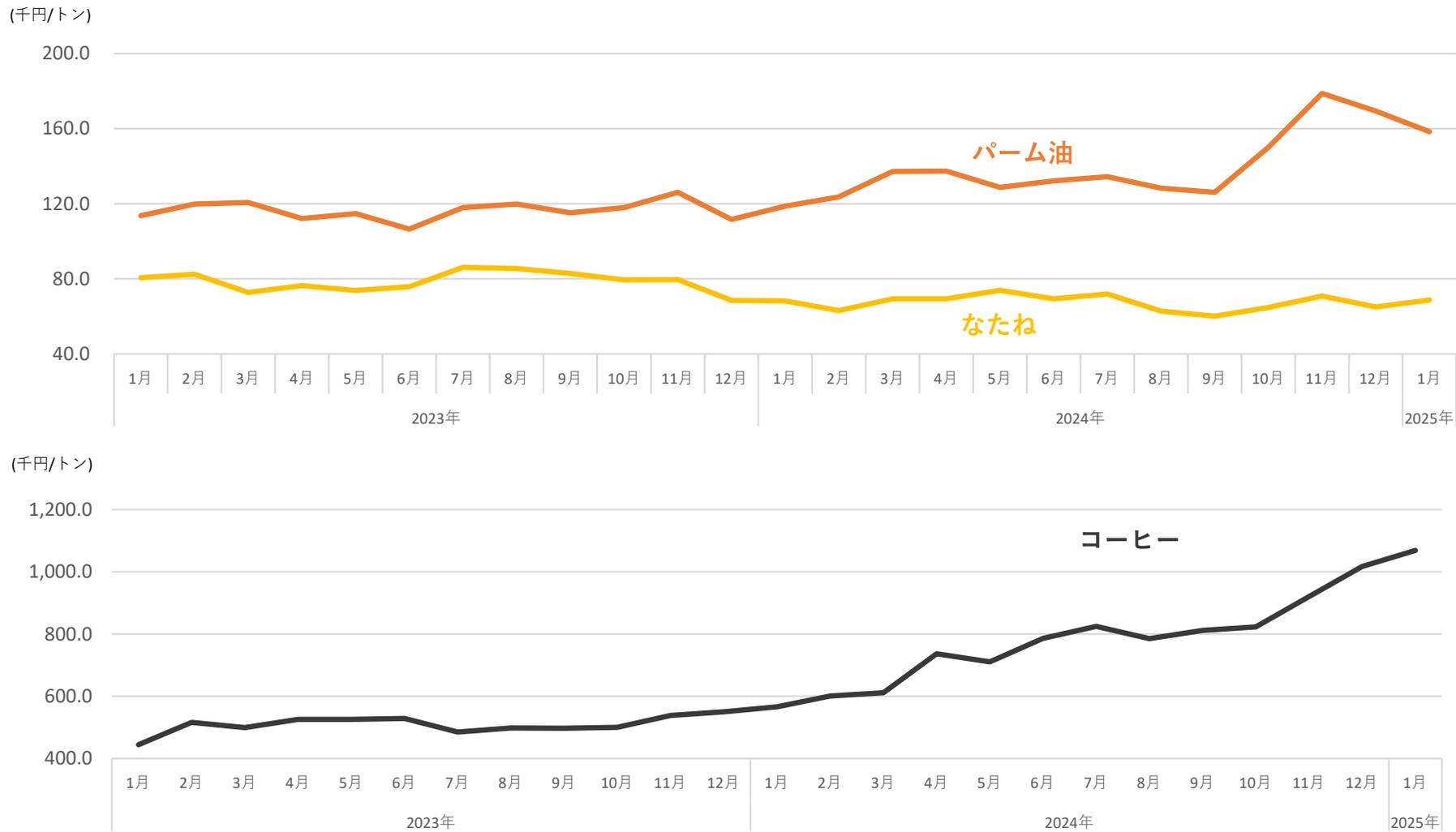
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

# 資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月以降上昇している。
- なたねについては、安定している。
- コーヒーについては、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、2024年以降上昇している。



2025年2月21日現在  
□内は2023年1月以降の最高値。

パーム油  
158.4千円/トン  
178.8千円/トン  
(2024.11)

なたね  
68.7千円/トン  
86.2千円/トン  
(2023.7)

コーヒー  
1068.8千円/トン  
1068.8千円/トン  
(2025.1)

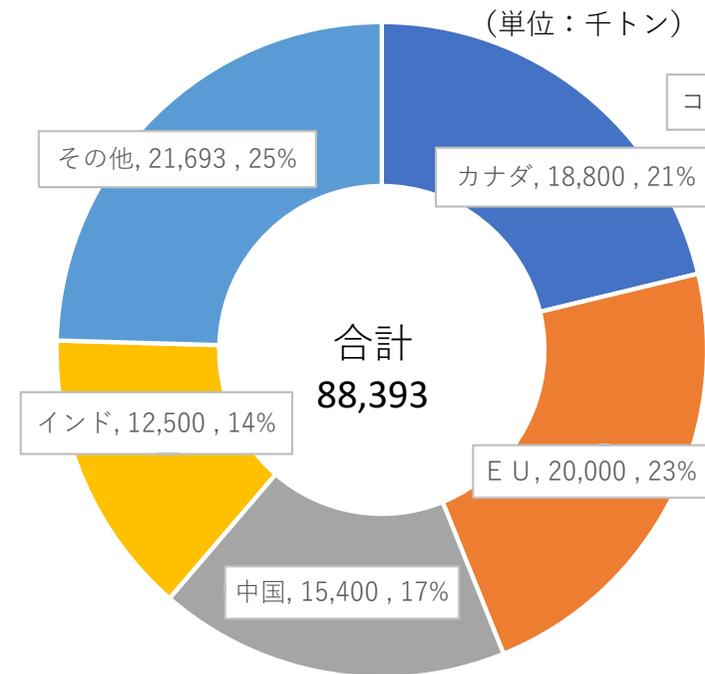
※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

# 資料4-2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

## ○主要生産国の生産状況

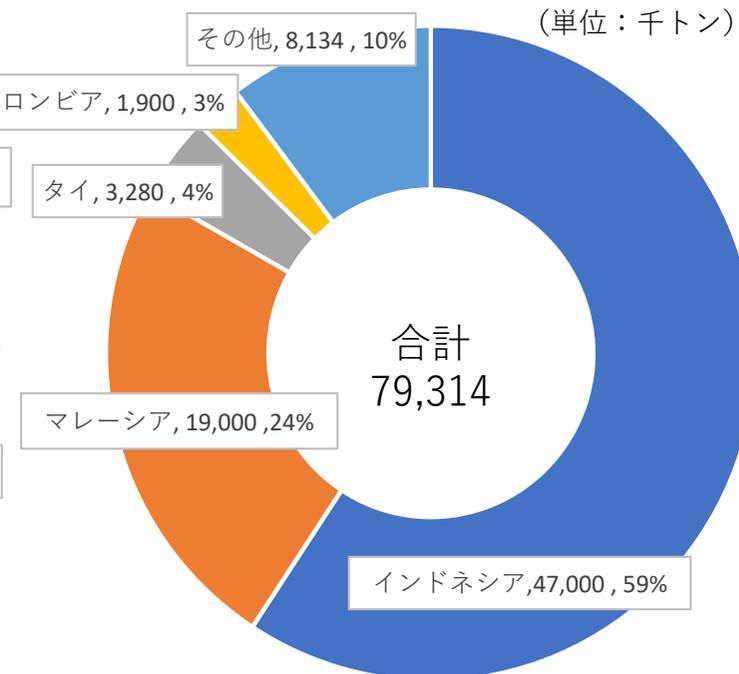
なたね生産量（2023/24）

（単位：千トン）



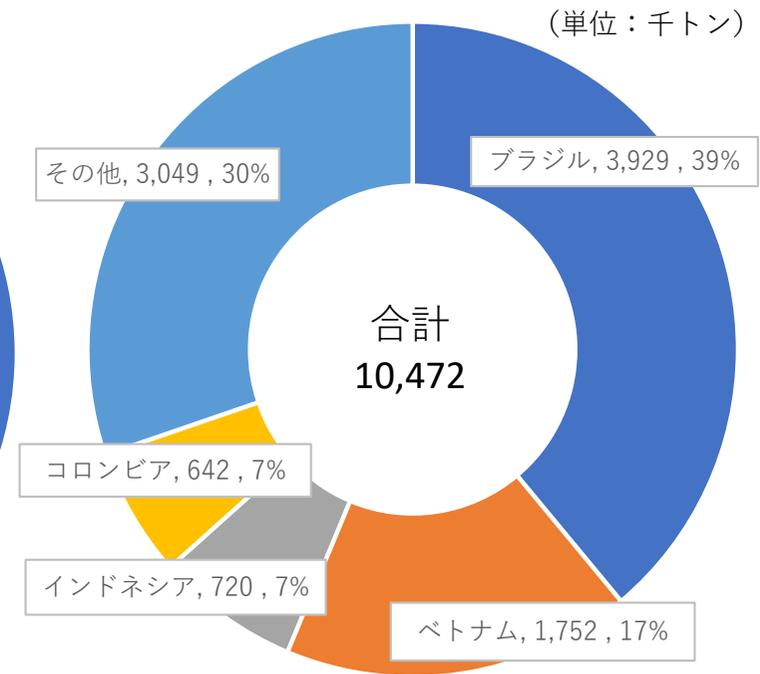
パーム油生産量（2023/24）

（単位：千トン）



コーヒー生産量（2022/23）

（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）  
2024年6月時点

※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）  
2024年6月時点

※国際コーヒー機関（ICO）統計資料  
2024年6月時点

## ○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2023年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,039	51.4%
オーストラリア	983	48.6%
その他	0	0.0%
<b>合計</b>	<b>2,022</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	574	85.6%
インドネシア	96	14.4%
その他	0	0.1%
<b>合計</b>	<b>671</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	124	35.0%
ベトナム	99	27.9%
コロンビア	34	9.6%
その他	98	27.6%
<b>合計</b>	<b>356</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

# 資料4-3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

## ①なたね

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年																				
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月									
なたね	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7																				
前月比	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7																				
前年同月比	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7																				

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

## ②パーム油

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年																					
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月										
パーム油	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4																					
前月比	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5																					
前年同月比	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4																					

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出



# 資料5 食品小売価格の動向

○ 令和7年1月の国内の加工食品の消費者物価指数は114.5～153.9(前年同月比で-3.5%～5.1%)の範囲内。

消費者物価指数(総務省)  
(令和6年8月～令和7年1月)

【参考】  
食品価格動向調査(農林水産省)  
(令和6年8月～令和7年2月)

品目	R2	R3	R4	R5	R6					R7	上昇率 (前年 同月比)	品目	R2	R3	R4	R5	R6					R7		上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月			平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月		
食パン	100.0	99.2	110.3	118.7	122.6	122.3	121.6	121.5	121.9	124.6	2.1%	食パン	100.0	98.6	107.8	114.5	118.6	118.9	118.2	117.4	118.2	122.5	124.0	1.2%	5.6%
即席めん	100.0	100.1	107.6	119.7	124.3	120.2	118.4	122.0	120.1	118.0	-3.5%	即席めん	100.0	99.2	105.6	117.5	120.4	119.1	115.5	118.5	117.3	115.5	116.7	1.0%	-3.6%
豆腐	100.0	101.3	105.3	114.6	117.9	118.8	119.3	119.7	119.1	119.4	2.1%	豆腐	100.0	100.6	103.7	113.0	115.9	116.7	118.5	119.3	118.0	118.5	118.0	-0.4%	3.0%
食用油 (キャノーラ油)	100.0	106.9	144.4	160.2	148.1	144.3	146.9	149.8	149.9	149.0	-2.5%	食用油 (キャノーラ油)	100.0	104.1	140.7	159.4	145.1	143.5	144.5	142.9	140.0	140.3	139.7	-0.4%	-7.7%
みそ	100.0	99.3	101.3	108.1	113.7	114.8	115.3	114.4	114.0	114.5	2.7%	みそ	100.0	99.2	100.1	105.9	109.8	110.2	110.0	110.6	108.8	109.8	110.0	0.2%	-0.4%
マヨネーズ	100.0	105.6	125.6	149.5	151.8	153.3	152.7	153.1	153.1	153.9	0.3%	マヨネーズ	100.0	102.2	117.7	139.8	140.6	141.3	140.6	138.6	140.6	140.6	139.9	-0.5%	-3.1%
チーズ	100.0	98.7	107.5	131.1	135.4	133.4	134.6	133.4	128.2	132.9	0.0%	チーズ	100.0	98.1	105.7	126.5	129.3	128.8	128.8	128.3	122.3	127.8	126.3	-1.2%	-1.9%
バター	100.0	99.9	99.2	108.6	120.1	120.0	120.1	120.1	119.5	120.0	0.9%	バター	100.0	99.8	99.1	108.0	119.7	118.8	119.4	119.7	119.2	120.1	119.4	-0.6%	0.8%
生鮮食品を 除く食料	100.0	100.2	104.1	112.6	117.1	117.8	119.2	119.9	120.1	121.0	5.1%														

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。  
注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。  
注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。  
資料: 総務省消費者物価指数

## 資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2025年3月号（2月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

### 『月報 畜産の情報』

#### ◆牛肉

（米国）24年11月の牛肉輸出量は前年同月比10.5%増、韓国向けがけん引

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003622.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003622.html)

（EU）高騰する枝肉価格の影響から、牛肉生産量は増加

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003623.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003623.html)

（豪州）24年の牛肉輸出量は過去最高記録を更新、25年も堅調な輸出量を見込む

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003624.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003624.html)

（NZ）24/25年度も米国向け牛肉輸出が堅調

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003625.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003625.html)

#### ◆豚肉

（カナダ）24年の豚肉生産量は前年比1.0%減、輸出量は増加

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003626.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003626.html)

（チリ）24年1～11月の豚肉輸出量、中国向けが大幅減も全体ではわずかな減少

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003627.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003627.html)

## 資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

### ◆牛乳・乳製品

（米国）24年12月のチーズ卸売価格、国内外の需要増から前年同月比18.8%高

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003628.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003628.html)

（EU）好調な乳製品需要を要因に生産者乳価は高水準を維持

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003629.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003629.html)

（NZ）生乳生産量6カ月連続で前年同月を上回る

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003630.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003630.html)

（中国）24年の生乳生産量は7年ぶりに前年を下回る

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003631.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003631.html)

### ◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）生産減・消費増などから期末在庫はかなりの程度減少

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003633.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003633.html)

（世界：大豆）米国の単収減から大豆生産量は下方修正も、期末在庫は高水準を維持

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003634.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003634.html)

（米国）米国は総供給量の減少により期末在庫はかなり大きく減少

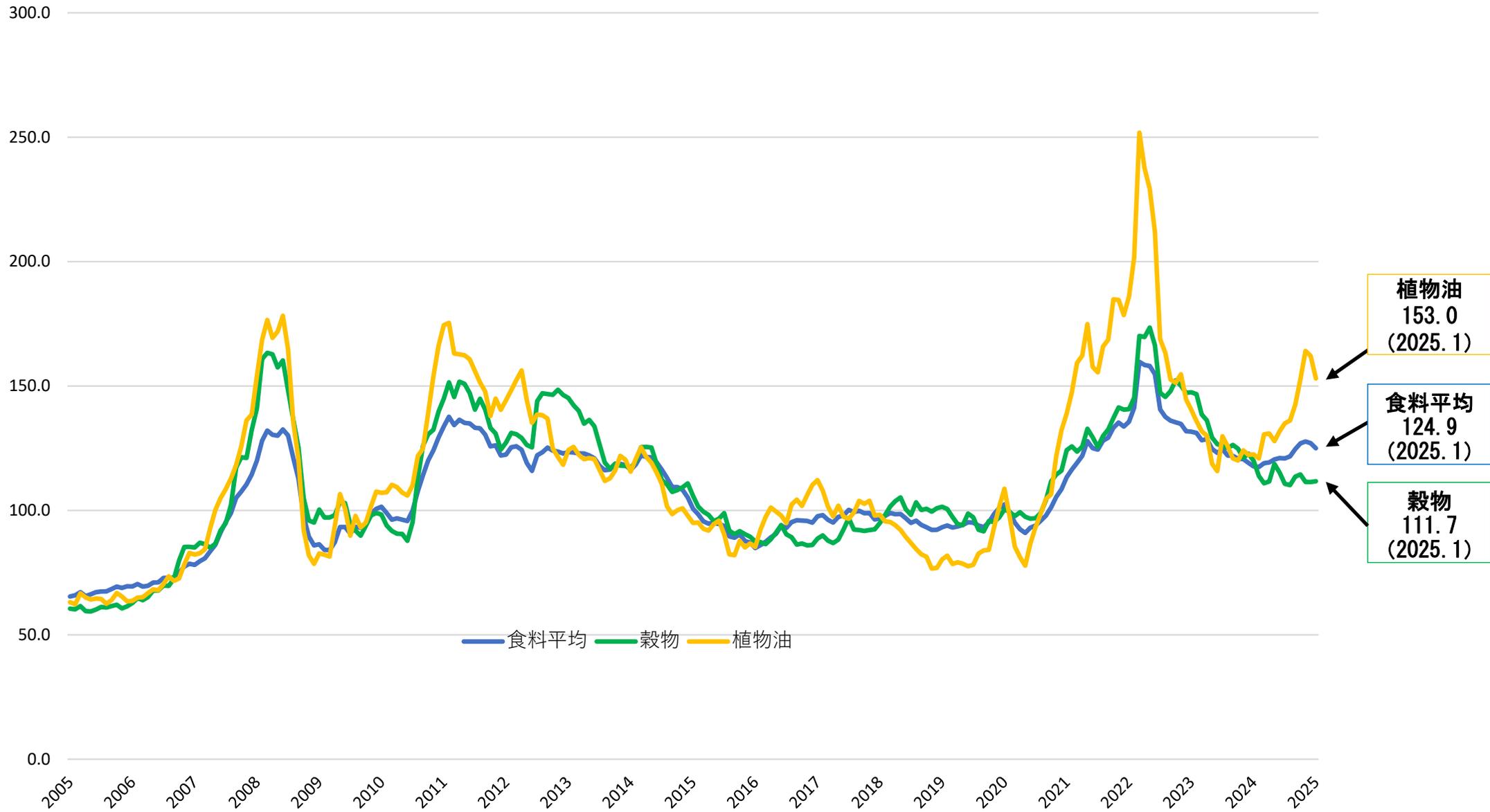
[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003635.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003635.html)

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003636.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003636.html)

# 資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2025.1)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

## タイの食事情（コメ料理）について

### 1 はじめに

タイ料理は世界でもよく知られる料理のひとつであり、パッタイ、トムヤムクン、ガパオライスなど、日本人にもよく知られています。今回はタイのコメ輸出の動向やタイへの日本産米輸出の可能性を紹介しましたが、今回は引き続きタイの人々の主食であるコメに焦点を当て、タイの様々なコメ料理を紹介します。

### 2 タイの食事情

（タイ料理の名称）

タイ語で「コメ」は「カオ」と呼ばれます。コメを使った料理として、例えば、タイ料理で有名なカオマンガイ（鶏肉を茹で、そのスープで炊いたご飯と一緒に提供される料理）は、タイ語で「カオ（ご飯）」「マン（油）」「ガイ（鶏肉）」を意味します。また、チャーハンは、タイ語でカオパッドと呼ばれ、「カオ（ご飯）」「パッド（炒める）」を意味します。

なお、コメから話は逸れますが、トムヤムクンは、タイ語で「トム（煮る）」「ヤム（混ぜる）」「クン（エビ）」を意味し、エビを煮て混ぜたスープということが分かります。このように、タイ料理の名称は、実際に提供される料理を連想できることが多いです。

（コメを使った幅広い料理）

タイにおいて、コメはお粥や麺、デザートなど、幅広い料理で使われており、日本以上に多様性を感じます。例えば、タイの屋台で麺類を注文する際、多くの場合、最初に麺の種類を選ぶことから始まります。種類としては、小麦由来の中華麺のほか、米粉由来の極細麺、中細麺、幅広麺、皮麺など、コメ由来の多様な麺が選べ、コメの消費拡大にも寄与していることが分かるとともに、米粉のマーケットが非常に大きいことがうかがえます。

デザートでは、ココナッツミルクをかけたもち米とマンゴーがセットになったカオニャオ・マムアン（「カオニャオ（もち米）」「マムアン（マンゴー）」を意味します。）は、多くの日本人が好きになる味です。

もち米については、竹製の籠に入れられて提供され、料理と一緒に食べることも多く、見た目も美しく、おいしく食べることができます。

タイのこうした多様なコメの食べ方は、コメの消費拡大を進める日本にとって学ぶことも多いのかもしれませんが。

### 3 終わりに

毎年5月、タイで農耕祭が開催され官公庁はお休みになります。この日は1年間のコメの豊作を願い、王宮周辺で様々な儀式が開催されます。タイの人々にとって、いかにコメが歴史的に重要であるかを感じることができます。

文責：金永 忠之（在タイ日本国大使館 一等書記官）

(写真：コメを使った料理)



写真1 クイッティアオ

クイッティアオと呼ばれる麺料理であり、麺やスープの種類を選択して注文する。

写真は、センレックと呼ばれる中細麺であり、最も一般的な麺。スープは豚骨や豚の血がベースのスープ。臭みなどはなく飲みやすい。



写真2 クイチャップ

三角形の生地を茹でるとくるくる丸まったマカロニのような形の米粉麺でクイチャップと呼ばれる。

(タイは、歴史的に中国の食文化の影響も強く受けており、タイと中国の要素が組み合わさったような料理も多い。)



写真3 カオニャオ・マムアン

カオニャオ・マムアン（マンゴーライス）は、伝統的なデザート。もち米にココナッツミルクを混ぜ、マンゴーと一緒に食べる。コース料理の最後に出てくることが多いが、出てくる頃には、既に満腹になっていることも多く、これを満腹で食べるのはヘビー。

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います

(品目別需給編)

# 1 小麦

## (1) 国際的な小麦需給の概要 (詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2024/25 年度

**生産量** 前年度比 前月比

- ・ブラジル等で下方修正されたものの、カザフスタン、アルゼンチンで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

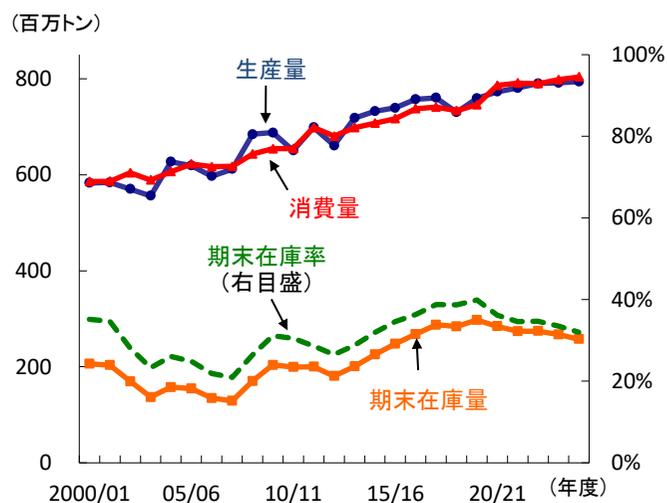
**消費量** 前年度比 前月比

- ・イラン、スーダン等で下方修正されたものの、EU、英国、メキシコ等で上方修正され、前月から上方修正された。

**輸出量** 前年度比 前月比

- ・EU、ロシア、ウクライナ等で下方修正され、前月から下方修正された。

**期末在庫量** 前年度比 前月比



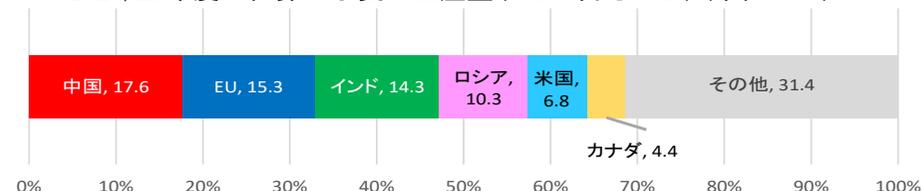
## ◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	789.9	791.2	793.8	0.6	0.3
消費量	789.6	798.0	803.7	1.8	0.7
うち飼料用	152.8	159.2	153.5	0.8	▲ 3.6
輸出量	221.8	221.2	209.0	▲ 3.0	▲ 5.5
輸入量	213.3	221.8	204.8	▲ 3.7	▲ 7.7
期末在庫量	274.3	267.5	257.6	▲ 1.3	▲ 3.7
期末在庫率	34.7%	33.5%	32.0%	▲ 0.2	▲ 1.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (11 February 2025)

### ○ 2024/25年度の世界の小麦の生産量(793.8百万トン)(単位: %)



### ○ 2024/25年度の世界の小麦の輸出量(209.0百万トン)(単位: %)



### ○ 2024/25年度の世界の小麦の輸入量(204.8百万トン)(単位: %)



## (2) 国別の小麦の需給動向

### < 米国 > 2024/25 年度の生産量は前年度から 9.3%増加の見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく 53.7 百万トンと、収穫面積及び単収が前年度より増加することから前年度と比べ 9.3%増、過去 5 年平均（48.2 百万トン）と比べても 11.4%増となる見込み。品種別には、ハード・レッド・ウインター（HRW）が 21.0 百万トン（前年度比 29.3%増）、ハード・レッド・スプリング（HRS）が 13.7 百万トン（同 8.0%増）、ホワイト小麦（WW）が 7.5 百万トン（同 17.7%増）、デュラム小麦（Durum）が 2.2 百万トン（同 34.9%増）と、前年度と比べ増加する一方で、ソフト・レッド・ウインター（SRW）は前作物のとうもろこし及び大豆の収穫が遅れ作付面積が減少したこと等を受け 9.3 百万トン（同 23.7%減）となる見込み。

同「Wheat Outlook」（2025.1.14）によれば、2025/26 年度の冬小麦の作付面積は 1,381 万ヘクタールと、カンザス州、オクラホマ州等で減少するものの、テキサス州、モンタナ州、ワシントン州等で増加することから、前年度（1,351 万ヘクタール）と比べ 2.2%増となる見込み。

「Wheat Outlook」（2025.2.13）によれば、2025/26 年度の冬小麦の作柄を 1 月 5 日現在と 2 月 2 日現在で比較した場合、「良～やや良」の割合は、冬期においても作柄報告のある州のうち、生産量が最も多いカンザス州の評価は 47%から 50%に改善したものの、他の主要生産州のうちオクラホマ州では 45%から 40%、コロラド州では 70%から 57%と 1 月より低下した。1 月後半の寒波により主要生産州の一部で冬枯れが引き起こされた可能性があるともみられる。また、2 月 4 日現在、2025/26 年度の冬小麦の 23%が干ばつ地域にあると推定されているものの、1 月 7 日（24%）と比べ 1 ポイント減少している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 23.1 百万トンと、増産による輸出余力の増加に加え、EU、ロシア及びウクライナの輸出余力の減少等を受け、前年度と比べ 20.2%増、過去 5 年平均（23.0 百万トン）と比べても 0.5%増と 4 年ぶりの高水準となる見込み。

2024/25 年度のうち 2024 年 6 月～12 月の輸出量は、1,280.9 万トンと前年同期（982.0 万トン）と比べ 30.4%増となっており、国別にはメキシコ 221.3 万トン（17.3%）、フィリピン 146.2 万トン（11.4%）、日本 138.7 万トン（10.8%）の順。

2024/25 年度の期末在庫量は、消費量の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン下方修正され 21.6 百万トンとなるものの、前年度と比べ 14.1%増となる見込み。

## 小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年6月～25年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	44.9	49.1	53.7	-	9.3
消費量	30.3	30.2	31.4	0.1	4.1
うち飼料用	2.0	2.3	3.3	-	41.6
輸 出 量	20.7	19.2	23.1	-	20.2
輸 入 量	3.3	3.8	3.5	-	▲ 5.9
期末在庫量	15.5	19.0	21.6	▲ 0.1	14.1
期末在庫率	30.4%	38.4%	39.7%	▲ 0.2	1.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	14.36	15.01	15.57	-	3.7
単収(t/ha)	3.13	3.27	3.45	-	5.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)

### 図 米国の小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2025.2.11)をもとに農林水産省で作成

### 表 米国産小麦の輸出量と輸出先国

(輸出量：万トン、シェア：%)

国 名	2024/25年度 (2024年6月～12月)		2023/24年度 (2023年6月～2024年5月)		2022/23年度 (2022年6月～2023年5月)	
	輸出量	シェア	輸出量	シェア	輸出量	シェア
メキシコ	221.3	17.3	325.8	17.4	365.4	18.0
フィリピン	146.2	11.4	274.5	14.7	206.1	10.2
日本	138.7	10.8	216.9	11.6	204.1	10.1
韓国	124.6	9.7	197.1	10.5	147.2	7.3
台湾	67.9	5.3	130.1	6.9	120.6	6.0
タイ	52.3	4.1	110.5	5.9	81.9	4.0
その他	529.8	41.4	618.1	33.0	901.7	44.5
計	1,280.9	100.0	1,873.0	100.0	2,027.0	100.0

資料：USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

## < カナダ > 2025/26 年度の作付面積は前年度から 2.5%増加の見込み (AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省 (AAFC) 「Outlook for Principal Field Crops」(2025.2.19) によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 35.0 百万トンと、干ばつの影響により減産となった前年度 (32.9 百万トン) と比べ 6.1%増、過去 5 年平均 (31.7 百万トン) と比べても 10.4%増となる見込み。種類別には、普通小麦が 29.1 百万トンと、前年度 (28.9 百万トン) と比べ 0.8%増、過去 5 年平均 (26.8 百万トン) と比べても 8.7%増となり、史上最高の生産量となった 2013/14 年度に次ぐ史上 2 番目の生産量になる見込み。デュラム小麦も 5.9 百万トンと、前年度 (4.1 百万トン) と比べ 43.6%増、過去 5 年平均 (4.9 百万トン) と比べても 19.8%増となる見込み。

2025/26 年度の小麦の作付面積は、前月予測から 7 万ヘクタール上方修正され 11.1 百万ヘクタールと前年度 (10.84 百万ヘクタール) と比べ 2.5%増加する見込み。種類別には、普通小麦は前月予測からの変更はなく 8.58 百万ヘクタールと前年度 (8.26 百万ヘクタール) と比べ 3.8%増となる一方で、デュラム小麦が前月予測から 7 万ヘクタール上方修正され 2.53 百万ヘクタールとなるものの、前年度 (2.58 百万ヘクタール) と比べ 2.0%減となる見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 26.2 百万トンと、前年度 (25.3 百万トン) と比べ 3.3%増となる見込み。種類別には、普通小麦が 21.3 百万トンと、増産となるものの、低品質な小麦が増加し飼料用消費量が増加すること等から前年度 (21.8 百万トン) と比べ 2.4%減となる見込み。デュラム小麦は 4.9 百万トンと、生産量の回復による輸出余力の増加等を受け、前年度 (3.5 百万トン) と比べ 38.1%増となる見込み。

カナダ穀物委員会 (CGC) によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 8 月～12 月の輸出量は、1,075.8 万トンと、前年同期 (1,034.4 万トン) と比べ 4.0%増。種類別には、普通小麦が 850.6 万トンと、前年同期 (910.6 万トン) と比べ 6.6%減で、国別にはインドネシア 88.1 万トン (10.4%)、日本 87.6 万トン (10.3%)、ペルー 57.3 万トン (6.7%) の順。デュラム小麦は 225.2 万トンと、前年同期 (123.8 万トン) と比べ 81.9%増で、国別にはイタリア 55.4 万トン (24.6%)、モロッコ 47.8 万トン (21.2%)、アルジェリア 35.5 万トン (15.8%) の順。

AAFC によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引下げ等を受け前月予測からわずかに下方修正され 4.4 百万トンと、前年度 (4.6 百万トン) と比べ 3.9%減となる見込み。

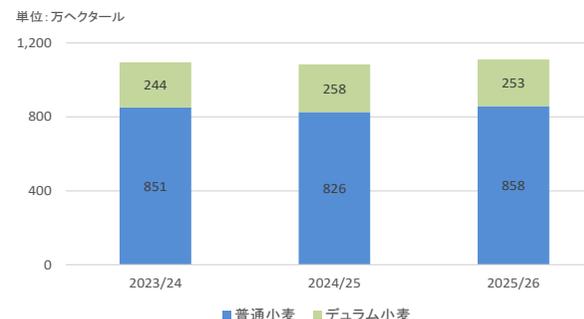
## 小麦—カナダ (春小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年8月～25年7月)		
			予測値、( ) は AAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	34.8	33.0	35.0 (35.0)		6.1
消費量	8.3	9.1	9.5 (9.1)	▲ 0.1	4.3
うち飼料用	3.2	4.0	4.3 (4.7)	▲ 0.2	7.0
輸出量	25.6	25.4	26.0 (26.2)	-	2.2
輸入量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	▲ 1.8
期末在庫量	5.6	4.6	4.6 (4.4)	0.1	0.2
期末在庫率	16.6%	13.3%	12.9% (12.5%)	0.2	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.10	10.70	10.65 (10.65)	-	▲ 0.5
単収(t/ha)	3.45	3.08	3.28 (3.28)	-	6.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)、  
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(19 February 2025)

### 図 カナダ産小麦の作付面積の推移



資料: AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2025.2.19) をもと  
に農林水産省で作成

### 表 カナダ産小麦の輸出量と輸出先国

○普通小麦 (輸出量:万トン)

2024/25年度 (2024年8月～12月)		2023/24年度 (2023年8月～2024年7月)		2022/23年度 (2022年8月～2023年7月)	
国名	輸出量 シェア	国名	輸出量 シェア	国名	輸出量 シェア
インドネシア	88.1 10.4%	中国	310.3 14.7%	中国	296.8 15.1%
日本	87.6 10.3%	インドネシア	251.9 11.9%	インドネシア	213.8 10.9%
ペルー	57.3 6.7%	日本	173.9 8.2%	日本	167.3 8.5%
コロンビア	56.0 6.6%	バングラデシュ	172.7 8.2%	ペルー	148.3 7.5%
米国	46.6 5.5%	ペルー	137.3 6.5%	バングラデシュ	144.4 7.3%
その他	514.9 60.5%	その他	1,069.2 50.5%	その他	996.1 50.7%
計	850.6 100.0%	計	2,115.3 100.0%	計	1,966.6 100.0%

○デュラム小麦 (輸出量:万トン)

2024/25年度 (2024年8月～12月)		2023/24年度 (2023年8月～2024年7月)		2022/23年度 (2022年8月～2023年7月)	
国名	輸出量 シェア	国名	輸出量 シェア	国名	輸出量 シェア
イタリア	55.4 24.6%	アルジェリア	89.3 26.0%	イタリア	121.0 23.8%
モロッコ	47.8 21.2%	モロッコ	81.7 23.8%	アルジェリア	120.8 23.8%
アルジェリア	35.5 15.8%	米国	46.2 13.5%	モロッコ	85.7 16.9%
米国	19.3 8.6%	イタリア	44.7 13.0%	米国	50.4 9.9%
ズバイン	14.0 6.2%	日本	21.2 6.2%	チェコ	32.5 6.4%
その他	53.2 23.6%	その他	60.4 17.6%	その他	96.8 19.1%
計	225.2 100.0%	計	343.5 100.0%	計	507.3 100.0%

資料: カナダ穀物委員会のデータをもとに農林水産省で作成

## < 豪州 > 2024/25 年度の小麦の収穫は完了し生産量は 31.9 百万トンの見込み (ABARES)

【生育・生産状況】豪州農業資源経済科学局 (ABARES) 「Australian Crop Report」(2024.12.3) によれば、2024/25 年度の小麦の生産量は前回予測 (2024.9.3) から 6 万トン上方修正され 31.9 百万トンと、前年度 (26.0 百万トン) と比べ 22.8%増、過去 5 年平均 (29.8 百万トン) と比べても 6.9%増となる見込み。州別の生産量は、ニューサウスウェールズ州 (NSW 州) が 12.4 百万トン (前年度比 74.8%増)、クイーンズランド州 (QLD 州) が 2.2 百万トン (同 106.5%増) とシーズンを通して十分な降雨に恵まれたことから前年度と比べ大きく増加する見込み。また、ウエスタンオーストラリア州 (WA 州) についても 10.8 百万トン (同 39.6%増) と生育後期の降雨により前年度から増加する見込み。一方、サウスオーストラリア州 (SA 州) は 3.0 百万トン (同 37.5%減)、ビクトリア州 (VIC 州) も 3.5 百万トン (同 33.7%減) とシーズンを通して降水量が少なかったことや 9 月に霜が降りた影響等により前年度から減少する見込み。なお、現地情報会社によれば 2024/25 年度の小麦の収穫は完了している。

西豪州穀物産業協会 (GIWA) 「Crop Report」(2025.2.14) によれば、WA 州の 2024/25 年度の小麦の生産量は、12 月予測から 1.6 百万トン上方修正され 12.45 百万トンと、前年度 (7.65 百万トン) と比べ 62.7%増となる見込み。生育期間全体では降雨量が少なかったものの、開花前に降雨があったことや開花以降の土壌水分量が想定を上回っていたことが、生産量増の要因。一方で、中央及び北部の生産地では収穫期に雨が降ったため、低品質の小麦が多く発生した。

【貿易情報・その他】ABARES (2024.12.3) によれば、2024/25 年度の小麦の輸出量は前回予測から 16 万トン上方修正され 21.9 百万トンと、前年度 (19.8 百万トン) と比べ 11.0%増となるものの、過去 5 年平均 (22.4 百万トン) と比べると 1.9%減となる見込み。

2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～12 月の輸出量は 386.8 万トンと、前年同期 (392.2 万トン) と比べ 1.4%減となっている。国別には、インドネシア 73.1 万トン (18.9%)、フィリピン 65.7 万トン (17.0%)、イエメン 36.6 万トン (9.5%) の順。2024 年 12 月の輸出量は 215.6 万トンと、南部から 2024/25 年産小麦の輸出が始まったことから、11 月 (57.7 万トン) と比べ 273.8%増、前年 12 月 (138.1 万トン) と比べても 56.1%増となっている。

2024/25 年度の期末在庫量は輸出量の上方修正等を受け前回予測から 7.2 万トン下方修正され 4.0 百万トンとなるものの、前年度 (2.8 百万トン) と比べ 43.8%増となる見込み。

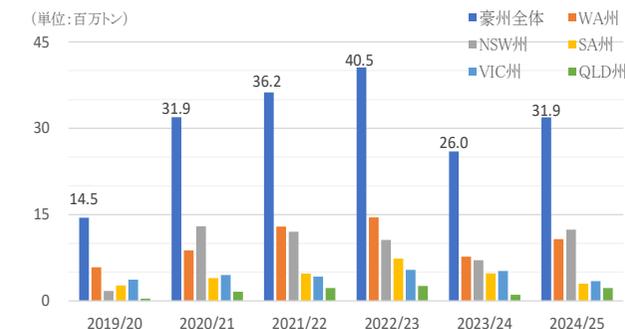
## 小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)		
			予測値、( ) はABARES	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	40.6	26.0	32.0 (31.9)	-	23.3
消費量	8.0	7.8	7.5 (8.7)	-	▲ 3.8
うち飼料用	4.5	4.3	4.0 ...	-	▲ 7.0
輸出量	31.8	19.8	25.0 (21.9)	-	26.0
輸入量	0.2	0.2	0.2 ...	-	▲ 9.1
期末在庫量	4.4	2.9	2.6 (4.0)	-	▲ 10.3
期末在庫率	11.0%	10.5%	8.0% (13.2%)	-	▲ 2.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	13.05	12.37	13.00 (13.06)	-	5.1
単収(t/ha)	3.11	2.10	2.46 (2.44)	-	17.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
ABARES 「Australian Crop Report」(3 December 2024)

## 図 豪州の小麦の生産量の推移



資料: ABARES「Australian Crop Report」(2024.12.3) をもとに農林水産省で作成

## 表 豪州産小麦の輸出量と輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

国名	2024/25年度 (2024年10月～12月)		2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)		2022/23年度 (2022年10月～2023年9月)	
	輸出量	シェア	輸出量	シェア	輸出量	シェア
インドネシア	73.1	18.9	375.5	19.0	759.2	23.9
フィリピン	65.7	17.0	323.5	16.4	502.9	15.8
イエメン	36.6	9.5	233.6	11.8	307.6	9.7
ベトナム	35.4	9.1	152.2	7.7	285.5	9.0
韓国	31.6	8.2	120.6	6.1	270.0	8.5
中国	17.6	4.6	119.4	6.1	199.2	6.3
その他	126.7	32.8	648.5	32.9	855.7	26.9
計	386.8	100.0	1,973.3	100.0	3,180.0	100.0

資料: ABARES 「Trade dashboard」 をもとに農林水産省で作成

## < EU27 > 2024/25 年度の輸出量は前年度から減少し 25.7 百万トンの見込み (EC)

【生育・生産状況】欧州委員会 (EC) 「EU Cereals Balance Sheets」(2025.2.3) によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 119.1 百万トンとなる見込み。2023 年秋の多雨で冬小麦の作付けが困難となったほか、生育期間を通じた降雨過多等により収穫面積及び単収が減少することを受け、前年度 (132.6 百万トン) と比べ 10.2% 減、過去 5 年平均 (133.4 百万トン) と比べても 10.7% 減となる見込み。このうち、普通小麦は前月予測からの変更はなく 111.9 百万トンと、前年度と比べ 10.6% 減、過去 5 年平均と比べても 11.1% 減となる見込み。国別にはフランスが降雨過多等を受け前年度比 27.2% 減の 25.4 百万トン、ドイツも同 13.8% 減の 18.2 百万トンとなる見込み。デュラム小麦も前月予測からの変更はなく 7.2 百万トンと、前年度と比べ 2.7% 減、過去 5 年平均と比べても 4.3% 減となる見込み。国別にはイタリアが同 5.1% 減の 3.5 百万トン、フランスも同 6.5% 減の 1.2 百万トンとなる一方、スペインが干ばつからの回復により前年度比 64.8% 増の 0.7 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】EC によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 25.7 百万トンと、減産を受け前年度 (36.4 百万トン) と比べ 29.4% 減となる見込み。2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～11 月の輸出量は、1,223.6 万トンと、前年同期 (1,525.4 万トン) と比べ 19.8% 減。種類別には、普通小麦が 1,187.8 万トンと、前年度と比べ 20.9% 減となる一方、デュラム小麦は 35.8 万トンと、同 53.3% 増。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2025.1.10) によれば、ロシアは 2024/25 年度後半の穀物輸出枠を過去 5 年間では最小となる 1,060 万トンに設定した (詳細は小麦の「ロシア」参照。)。ロシア産小麦の主要輸入国であるエジプト、トルコ、バングラデシュ等は EU など他の小麦輸出国に頼らざるを得ず、供給量は限られるものの、EU の輸出が上向き可能性もある。

EC によれば、2024/25 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく 10.0 百万トンと、ウクライナの輸出余力の低下により同国からの輸入が減少すること等から前年度 (12.1 百万トン) と比べ 17.3% 減となる見込み。2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～11 月の輸入量は、465.8 万トンと、前年同期 (535.4 万トン) と比べ 13.0% 減。種類別には、普通小麦が 408.7 万トンと、前年度と比べ 2.7% 増となる一方、デュラム小麦は 57.2 万トンと、同 58.4% 減。

2024/25 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引上げを受け、前月予測からわずかに上方修正され 10.7 百万トンとなるものの、供給量の減少から前年度 (18.0 百万トン) と比べ 40.5% 減となる見込み。

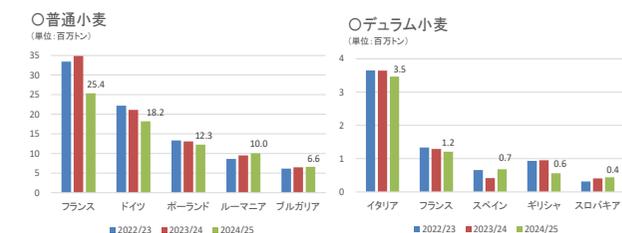
## 小麦－EU27 (冬小麦を主に栽培)

(単位: 百万トン)

年度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、( ) は EC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生産量	134.5	135.1	121.3 (119.1)	-	▲ 10.2
消費量	109.0	110.5	109.3 (110.6)	0.5	▲ 1.1
うち飼料用	45.0	46.5	45.0 (45.8)	0.5	▲ 3.2
輸出量	35.1	38.0	28.0 (25.7)	▲ 1.0	▲ 26.3
輸入量	12.2	12.7	11.0 (10.0)	▲ 0.5	▲ 13.0
期末在庫量	16.3	15.5	10.6 (10.7)	-	▲ 31.9
期末在庫率	11.3%	10.5%	7.7% (7.8%)	0.03	▲ 2.8

(参考)  
 収穫面積(百万ha) 24.44 24.34 22.83 (22.32) - ▲ 6.2  
 単収(t/ha) 5.50 5.55 5.31 (5.34) - ▲ 4.3  
 資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
 「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
 EC 「EU Cereals Balance Sheets」(3 February 2025)

### 図 主要小麦生産国の小麦生産量の推移



資料: EC 「EU cereals production, area and yield」(2025.2.3) をもとに農林水産省で作成

### 表 EU27 の小麦の輸出量及び輸入量

O輸出量					O輸入量				
国名	2024/25年度 (2024年7月～11月)		2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)		国名	2024/25年度 (2024年7月～11月)		2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)	
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)		輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ナイジェリア	165.7	13.5	348.9	9.6	ウクライナ	256.9	55.1	648.7	53.6
アルジェリア	135.2	11.1	396.7	10.9	カナダ	83.2	17.9	138.5	11.4
モロッコ	110.0	9.0	489.1	13.4	モルドバ	33.4	7.2	73.6	6.1
エジプト	104.4	8.5	178.5	4.9	米国	30.4	6.5	34.2	2.8
英国	95.9	7.8	140.0	3.8	トルコ	19.7	4.2	76.8	6.3
アンゴラ	48.0	3.9	82.6	2.3	英国	17.8	3.8	52.4	4.3
その他	564.3	46.1	2,006.9	55.1	その他	24.4	5.2	187.1	15.4
合計	1,223.6	100.0	3,642.6	100.0	合計	465.8	100.0	1,211.2	100.0

資料: EC 「EU trade for cereals」(2025.2.3) をもとに農林水産省で作成

## < ロシア > 2024/25 年度の輸出量は前月から下方修正され 45.5 百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量（クリミア地域分を含まず）は、前月予測からの変更はなく 81.5 百万トンと、前年度と比べ 10.9%減、過去 5 年平均（83.5 百万トン）と比べても 2.4%減となる見込み。種類別には、冬小麦が 57.5 百万トンと、前年度（64.0 百万トン）に比べ 10.2%減。春小麦も 24.0 百万トンと、前年度（27.5 百万トン）と比べ 12.7%減となる見込み。

ロシア気象センターによれば、冬小麦の主要産地である欧州部の北部及び南部では、1 月の気温が平年より 4～7℃高く、欧州部南部ではスノーカバー（積雪）が見られず、欧州部北部の西側ではスノーカバーが融解した。中旬に一時気温が低下したものの、スノーカバーがない地域も含め 2025/26 年度の冬小麦に影響はなかった。しかしながら、スノーカバーがない地域では土壌水分量が不足している。

【貿易情報・その他】ロシア連邦政府は、2024 年 12 月 20 日、2024/25 年度後半（2025 年 2 月 15 日～6 月 30 日）に小麦及びメスリンに設定される輸出枠を 1,060 万トン（前年度 2,900 万トン）とすることを発表した。USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2025.1.10) によれば、ロシアは、2024/25 年度の供給量が大きく減少しているにもかかわらず、2024/25 年度前半（2024 年 7 月～12 月）で 29.4 百万トンを輸出しており、史上最高の輸出量となった前年度同期（27.7 百万トン）を上回った。12 月 1 日現在のロシアの農場の小麦在庫は前年比 25%減となっており、ロシア連邦政府は、ロシア国内への供給を維持し、食料品価格の上昇を抑制するため、2024/25 年度後半の輸出枠を 1,060 万トンに設定した。当該穀物輸出枠は過去 5 年間で最小であり、2025 年 2 月以降、ロシアの輸出は減速する見込み。

USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、低調な輸出を受け前月予測から 0.5 百万トン下方修正され 45.5 百万トンと、史上最高の輸出量となった前年度と比べ 18.0%減となるものの、過去 5 年平均（42.4 百万トン）と比べれば 7.3%増と史上 3 番目の輸出量となる見込み。

現地情報会社によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～2025 年 1 月の輸出量は 3,104.6 万トンと、前年同期（3,109.5 万トン）と同水準となっている。国別には、エジプト 613.3 万トン（19.8%）、バングラデシュ 228.1 万トン（7.3%）、トルコ 201.4 万トン（6.5%）の順。なお、1 月のみの輸出量は 238.2 万トンで前年同月（393.8 万トン）と比べ 39.5%減と、輸出量が大きく減速している。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げを受け前月予測から 0.5 百万トン上方修正され 9.7 百万トンとなるものの、前年度と比べ 16.7%減となる見込み。

## 小麦—ロシア（主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)			
			予測値、( ) はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	92.0	91.5	81.5 (81.3)	-	▲ 10.9	
消費量	41.0	39.0	38.3 (39.0)	-	▲ 1.9	
うち飼料用	18.0	16.0	15.5 (16.0)	-	▲ 3.1	
輸 出 量	49.0	55.5	45.5 (43.7)	▲ 0.5	▲ 18.0	
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.4)	-	-	
期末在庫量	14.4	11.7	9.7 (9.7)	0.5	▲ 16.7	
期末在庫率	16.0%	12.4%	11.6% (11.7%)	0.7	▲ 0.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	29.00	28.83	28.00 (27.73)	-	▲ 2.9	
単収(t/ha)	3.17	3.17	2.91 (2.93)	-	▲ 8.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
IGC 「Grain Market Report」(16 January 2025)

図 ロシアの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2025.2.11)をもとに農林水産省で作成

表 ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2024/25年度 (2025年1月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年1月)		2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)	
国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
エジプト	85.0	エジプト	613.3	エジプト	868.3
イエメン	14.9	バングラデシュ	228.1	トルコ	691.9
アラブ首長国連邦	11.8	トルコ	201.4	バングラデシュ	350.2
オマーン	10.8	アルジェリア	166.3	アルジェリア	236.8
リビア	8.8	ケニア	139.9	サウジアラビア	224.8
ナイジェリア	8.7	ナイジェリア	123.3	カザフスタン	222.2
ケニア	8.1	サウジアラビア	106.2	パキスタン	213.0
その他	90.1	その他	1,526.1	その他	2,608.8
計	238.2	計	3,104.6	計	5,410.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

## <ウクライナ> 2024/25年度の輸出量は前月から下方修正され15.5百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2024/25年度の生産量（クリミア地域分を含む）は、前月予測からの変更はなく22.9百万トンと、2024年3月以降、降水量が平年を下回り乾燥が続いた影響により前年度と比べ0.4%減、ロシアのウクライナ侵攻前の過去5年平均（2017/18～2021/22年度、27.9百万トン）と比べても18.0%減となる見込み。

現地情報会社によれば、1月は平年に比べ暖かく、上旬には中程度の降雨があったものの、降水量は不足しており土壌水分量が非常に少ない状態となっている。このことは現在越冬中の2025/26年度の冬小麦だけでなく、今後の春小麦の播種にも影響することから更なる降雨が必要となっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2024/25年度の輸出量は、低調な輸出を受け前月予測から0.5百万トン下方修正され15.5百万トンと、供給量の減少により前年度と比べ16.6%減、ロシアのウクライナ侵攻前の過去5年平均（18.1百万トン）と比べても14.4%減となる見込み。

現地情報会社によれば、2024年9月3日、ウクライナ農業政策食料省は穀物市場関係者と覚書の附属書を締結し、2024/25年度の小麦の輸出上限は1,620万トンに設定された。

また、ウクライナ政府は2024年12月1日から輸出許可制度を廃止し、輸出安全保障制度を導入した。当該制度では、最低輸出価格の設定、付加価値税を納税した事業者のみへの輸出許可、輸出業者の管理のため銀行及び税務当局との間での電子データ情報の交換が定められている。

ウクライナ税関庁によれば、2024/25年度のうち2024年7月～2025年1月の輸出量は1,075.7万トンと、前年同期（921.8万トン）と比べ16.7%増となっており、2024/25年度の輸出上限1,620万トンに対し66.4%を輸出している。国別には、スペイン258.1万トン（24.0%）、インドネシア155.4万トン（14.4%）、エジプト95.6万トン（8.9%）の順となっており、前年度同様スペインが首位である一方、アルジェリアやインドネシア、ベトナム、タイといったアジア諸国のシェアが増加している。現地情報会社によれば、シェア増加の要因は、アルジェリアは同国市場で大きなシェアを占めていたフランスの小麦生産量が大きく減少したこと、アジア諸国は飼料穀物の需要が増加していることやルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する臨時回廊により遠方への輸出が安定してきたことが挙げられる。

USDAによれば、2024/25年度の期末在庫量は、輸出量の引下げ等を受け前月予測から0.3百万トン上方修正され1.3百万トンと、前年度と比べ81.7%増となるものの、史上5番目に低い水準となる見込み。

## 小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

年度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	21.5	23.0	22.9 (25.4)	-	▲ 0.4
消費量	7.8	6.7	6.9 (8.3)	0.2	3.0
うち飼料用	3.0	2.0	2.2 (1.4)	0.2	10.0
輸出量	17.1	18.6	15.5 (17.4)	▲ 0.5	▲ 16.6
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	33.3
期末在庫量	2.9	0.7	1.3 (0.7)	0.3	81.7
期末在庫率	11.8%	2.8%	5.8% (2.6%)	1.4	3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.60	5.01	5.20 (6.17)	-	3.8
単収(t/ha)	3.84	4.59	4.40 (4.11)	-	▲ 4.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
IGC 「Grain Market Report」(16 January 2025)

図 ウクライナの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2025.2.11)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2024/25年度 (2025年1月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年1月)		2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)	
国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
スペイン	22.3	スペイン	258.1	スペイン	589.9
アルジェリア	19.6	インドネシア	155.4	エジプト	172.1
エジプト	15.6	エジプト	95.6	インドネシア	151.5
チュニジア	7.4	アルジェリア	94.3	トルコ	107.8
ベトナム	6.8	ベトナム	88.4	ルーマニア	100.1
バングラデシュ	5.4	タイ	64.0	パキスタン	81.4
イタリア	4.9	チュニジア	52.1	ベトナム	75.1
ポルトガル	2.7	バングラデシュ	52.1	バングラデシュ	73.7
ギリシャ	1.4	イタリア	44.4	イタリア	67.7
ドバイ	0.8	イエメン	29.8	アルジェリア	63.3
その他	2.2	その他	141.5	その他	358.0
合計	89.1	合計	1,075.7	合計	1,840.6

資料：APK-Inform Agencyのデータをもとに農林水産省で作成

## < 中国 > 2024/25 年度の輸入量は前月から下方修正され 8.0 百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 140.1 百万トンと、前年度より収穫面積は減少するものの、単収が増加することから前年度と比べ 2.6%増、過去5年平均（135.8 百万トン）と比べても 3.1%増となり史上最高となる見込み。

中国農業農村部「農産品供需形成分析月報 2024 年 12 月号」によれば、2025/26 年度の冬小麦の生育状況は、主要生産地において、気温が高く土壌水分も良好で越冬前に小麦が生長するために適した環境であったことから、生育が良好な小麦の割合が高くなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく 151.0 百万トンと、経済成長による食生活の変化に伴い小麦粉需要が増加する一方、2023/24 年度に飼料用グレードの国産小麦が増加していたものが減少し飼料用消費量が減少することから、前年度と比べ 1.6%減となるものの、過去5年平均（146.1 百万トン）と比べれば 3.4%増となる見込み。

2024/25 年度の輸入量は、低調な輸入を受け前月予測から 2.5 百万トン下方修正され 8.0 百万トンと、史上最高の生産量となり国内需給が緩和したことから、前年度と比べ 41.3%減となり過去5年間で最低の輸入量となる見込み。

中国海関統計によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～12 月までの輸入量は 190.0 万トンと、増産を受け前年同期（408.8 万トン）と比べ 53.5%減となっている。国別には、カナダ 66.4 万トン（35.0%）、米国 46.2 万トン（24.3%）、カザフスタン 28.4 万トン（15.0%）の順となっている。豪州は 2023/24 年度の減産に伴う豪州産の相対的な価格競争力の低下等を受け前年同期の 46.0%から 10.7%と大きくシェアを減らしている一方で、米国、カザフスタン及びロシアが大きくシェアを伸ばしている。

報道によれば、中糧集团有限公司（COFCO）は輸入予定であった豪州産小麦 2 隻分について、インドネシアやタイなどの国に転売した。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、輸入量の引下げを受け前月予測から 2.5 百万トン下方修正され 130.6 百万トンと、前年度と比べ 2.9%減となる見込み。

## 小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	137.7	136.6	140.1 (140.1)	-	2.6
消費量	148.0	153.5	151.0 (146.8)	-	▲ 1.6
うち飼料用	33.0	37.0	33.0 (28.0)	-	▲ 10.8
輸 出 量	1.0	1.0	1.0 (1.2)	-	▲ 3.8
輸 入 量	13.3	13.6	8.0 (9.2)	▲ 2.5	▲ 41.3
期末在庫量	138.8	134.5	130.6 (141.5)	▲ 2.5	▲ 2.9
期末在庫率	93.2%	87.0%	85.9% (95.6%)	▲ 1.6	▲ 1.1

（参考）  
 収穫面積(百万ha) 23.52 23.63 23.59 (23.59) - ▲ 0.2  
 単収(t/ha) 5.86 5.78 5.94 (5.94) - 2.8  
 資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
 「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
 IGC 「Grain Market Report」(16 January 2025)

## 図 中国の小麦の供給量と消費量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2025.2.11)をもとに農林水産省で作成

## 表 中国の小麦輸入量と輸入先国

（輸入量：万トン、シェア：%）

国 名	2024/25年度 (2024年7月～12月)		2023/24年度 (2023年7月～12月)		2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)	
	輸入量	シェア	輸入量	シェア	輸入量	シェア
カナダ	66.4	35.0	121.6	29.7	307.8	23.0
米国	46.2	24.3	37.8	9.2	181.8	13.6
カザフスタン	28.4	15.0	36.1	8.8	66.8	5.0
ロシア	25.2	13.3	22.8	5.6	43.0	3.2
豪州	20.3	10.7	187.9	46.0	503.5	37.7
日本	2.6	1.3	1.8	0.4	3.3	0.2
フランス	0.7	0.4	0.4	0.1	230.1	17.2
その他	0.1	0.1	0.5	0.1	0.6	0.0
計	190.0	100.0	408.8	100.0	1,336.7	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

## 2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<USDAの見通し> 2024/25年度

**生産量** 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ブラジル、アルゼンチンで下方修正され、前月から下方修正された。

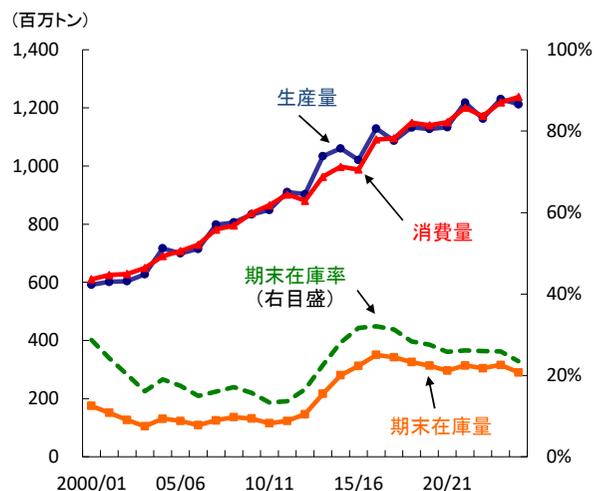
**消費量** 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ベトナム、ウクライナ等で上方修正されたものの、中国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

**輸出量** 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ブラジル、ウクライナ等で下方修正され、前月から下方修正された。

**期末在庫量** 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」(2025.2.11)をもとに農林水産省にて作成。

## ◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

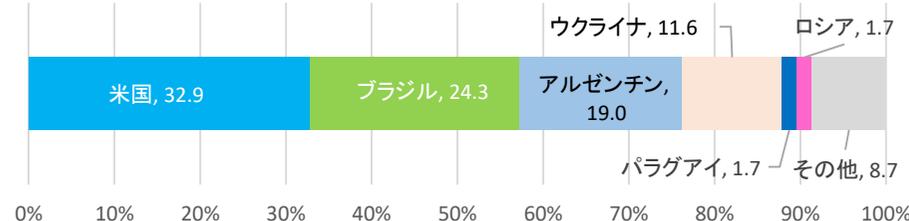
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,163.3	1,230.1	1,212.5	▲ 1.9	▲ 1.4
消費量	1,172.4	1,219.1	1,238.0	▲ 0.5	▲ 1.5
うち飼料用	735.1	772.8	777.5	▲ 0.8	▲ 0.6
輸出量	180.4	193.3	189.2	▲ 2.2	▲ 2.1
輸入量	173.4	197.3	181.2	▲ 2.0	▲ 8.2
期末在庫量	304.8	315.8	290.3	▲ 3.0	▲ 8.1
期末在庫率	26.0%	25.9%	23.5%	▲ 0.2	▲ 2.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 February 2025)

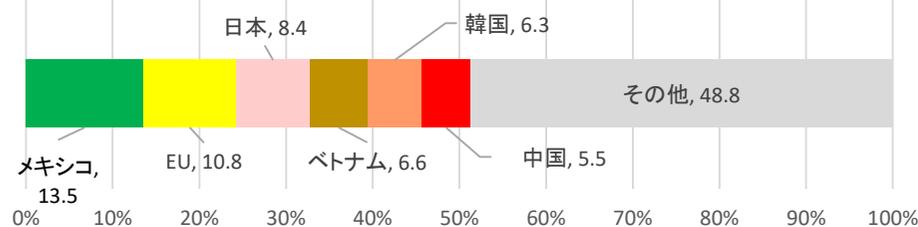
○ 2024/25年度 世界のとうもろこしの生産量(1,212.5百万トン)(単位：%)



○ 2024/25年度 世界のとうもろこしの輸出量(189.2百万トン)(単位：%)



○ 2024/25年度 世界のとうもろこしの輸入量(181.2百万トン)(単位：%)



## (2) 国別のとうもろこしの需給動向

### < 米国 > 2024/25年度の生産量は史上最高の前年度から3.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2024/25年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少（対前年度比4.2%減）を受け、史上最高の前年度より3.1%減の377.6百万トンとなったものの、史上4番目に高い見通し。収穫面積の減少は、作付け時の大豆価格が、前年度に史上最高の豊作で価格が下落したとうもろこしに比べ大豆の作付けに有利であったため、多くの農家が大豆の作付けに切り替えたことによる。

【需要状況】USDAによれば、2024/25年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の減少を受けて前年度に比べ0.1%減の321.7百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2024/25年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、米国産が価格競争力を有する見通しを受けて前年度より6.9%増の62.2百万トンの見込み。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2025.2.11)によれば、米国産の輸出価格は、2月6日現在、米国産の堅調な輸出と国内需要を受けて前月から11ドルトン上昇したものの、226ドルトンと、ブラジル産(244ドルトン)、アルゼンチン産(232ドルトン)を下回り、価格競争力を有している。なお、2024年9月～2025年1月の輸出量は2,162.6万トンと、前年同期の1,602.5万トンより35.0%増。主な輸出先は、メキシコ814.0万トン(国別シェア37.6%)、日本393.1万トン(同18.2%)、コロンビア298.3万トン(同13.8%)の順。

同「Feed Outlook」(2025.2.13)によれば、メキシコ向け輸出量は前年同期から3.8%増加した一方、中国向けは3.3万トンで6年ぶりの低水準となった。米国産は価格競争力を有しており、中国の需要低下にかかわらず、メキシコや減産のEU等の他国向けの輸出が増加する見込み。

USDAによれば、2024/25年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より12.7%減の39.1百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より1.6ポイント減少し10.2%と、過去5年平均(10.7%)を下回っている。

## とうもろこし—米国

(概ね4～5月に作付けされ、9～11月に収穫される。)

(単位：百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年9月～25年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	346.7	389.7	377.6	-	▲ 3.1
消費量	305.9	321.9	321.7	-	▲ 0.1
うち飼料用	139.4	147.5	146.7	-	▲ 0.5
エタノール用等	131.5	139.1	139.7	-	0.4
輸 出 量	42.2	58.2	62.2	-	6.9
輸 入 量	1.0	0.7	0.6	-	▲ 11.1
期末在庫量	34.6	44.8	39.1	-	▲ 12.7
期末在庫率	9.9%	11.8%	10.2%	-	▲ 1.6

(参考)

収穫面積(百万ha)	31.85	35.01	33.55	-	▲ 4.2
単収(t/ha)	10.89	11.13	11.26	-	1.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)

### 図 米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格 (FOB) の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

## < ブラジル > 2024/25年度の生産量は前年度から3.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2024/25年度の生産量は、収穫面積の増加を受けて前年度より3.3%増の126.0百万トンと、史上2番目に高い生産量となる見通し。ただし、中西部で冬とうもろこしの作付遅延により単収が引き下げられたことを受けて前月予測から1.0百万トン引き下げられた。冬とうもろこしの作付けが遅れ、受粉期が乾季と重なると、十分な降雨を得られず作柄が悪化する懸念がある。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2025.2.13）によれば、2024/25年度のとうもろこしの生産量は、前年度比5.5%増の122.0百万トンの見込み。夏とうもろこし（ブラジルのクロップカレンダー（図）参照）は、主要生産地の南部での単収増等を受けて、前年度比2.7%増の23.6百万トンの見込み。2月上旬現在、作付進捗率は前年同期並みの95%と作付けは概ね完了。南部リオ・グランデ・ド・スール州の収穫進捗率は43%と、前年同期（14%）を上回っている。一方、冬とうもろこしは、収穫面積及び単収の増加等を受け、前年度比6.1%増の98.4百万トンの見込み。2月上旬現在、作付進捗率は5%と、前年同期（19%）を大きく下回っている。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」（2025.2.11）によれば、2月上旬、冬とうもろこしの主要生産地の中西部では降雨により大豆の収穫が遅延し、大豆収穫後の圃場で作付けされる冬とうもろこしの作付けが例年より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2024/25年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産施設への投資によるエタノールの増産見通しを受けて前年度から2.9%増の87.5百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2024/25年度の輸出量は、中国向けの輸出実績が当初予想を下回ったことを受けて前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、増産を受けて前年度より16.5%増の46.0百万トンの見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2025年1月の輸出量は359.2万トンと、史上最高の増産となった2022/23年度より減産したことから前年同月比26%減。内訳は、イラン108.1万トン（国別シェア30.1%）、エジプト87.1万トン（同24.2%）、ベトナム31.4万トン（同8.7%）の順。

## とうもろこしーブラジル

（夏とうもろこしは、概ね8～翌年1月に作付けされ、2～4月に収穫される。  
冬とうもろこしは、大豆収穫後の概ね1～3月に作付けされ、6～10月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25年3月～26年2月)		
			予測値、( )はCONAB	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	137.0	122.0	126.0 (122.0)	▲ 1.0	3.3
消費量	78.0	85.0	87.5 (86.9)	-	2.9
うち飼料用	61.5	63.5	64.0 ...	-	0.8
輸 出 量	54.3	39.5	46.0 (34.0)	▲ 1.0	16.5
輸 入 量	1.3	1.3	1.5 (1.7)	-	15.4
期末在庫量	10.0	8.8	2.8 (4.9)	-	▲ 67.9
期末在庫率	7.6%	7.1%	2.1% (4.0%)	0.02	▲ 5.0

（参考）

収穫面積(百万ha)	22.40	21.50	22.30 (21.19)	-	3.7
単収(t/ha)	6.12	5.67	5.65 (5.76)	▲ 0.05	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
CONAB「Graos」(13 February 2025)

## 図 ブラジルのクロップカレンダー（中部から南部）

2024/25年度の夏とうもろこしの作付けは、2024年9月以降、順次開始。  
冬とうもろこしの作付けは、2025年1月以降、大豆の収穫後に開始。

2024/25年度	2024年				2025年								
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし (リオ・グランデ・ド・スール州等)	作付 3.7(百万ha)				収穫 23.6(百万t) → 収穫夏冬作計 122.0百万t								
冬とうもろこし (マツ・グロソ州、パラナ州等)	作付面積夏冬作計 21.2百万ha				作付 17.5(百万ha) → 収穫98.4(百万t) 大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け								
大豆 (マツ・グロソ州、パラナ州等)	作付 47.5(百万ha)				収穫 166.0(百万t)								

資料：CONAB「Graos」(2025.2.13)をもとに農林水産省にて作成

## < アルゼンチン > 2024/25 年度の生産量は、前年度並みの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実生産量は、早植えとうもろこしの主産地で1月から2月上旬にかけての高温乾燥により単収が引き下げられたことを受けて、前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、前年度並みで過去5年平均（49.7百万トン）より0.6%増の50.0百万トンの見込み。

USDA「World Agricultural Production」(2025.2.11)によれば、とうもろこしの作付けは1月末時点で完了。昨年、遅植えとうもろこしに病害虫のヨコバイが大量発生し作柄が悪化した一方、早植えとうもろこしは被害を免れたことから、今年度は多くの農家が例年より多くの早植えとうもろこしを作付けしたところ、早植えとうもろこしが受粉期を迎える1月に高温乾燥となり、作柄が悪化した。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2025.2.11)によれば、2月上旬、南部では降雨により土壌水分量が増加し、成熟に好影響を与えている一方、北部では乾燥が続き、成熟が依然として進んでおらず、降雨が必要とされている。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の実消費量は、飼料用消費の引下げを受けて前月予測から2.0百万トン下方修正されたものの、食用等消費の増加を受けて前年度から0.4%増の14.3百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、供給増を受けて、前年度より2.9%増の36.0百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2024年1～12月の輸出量は3,498.9万トンで、2022/23年度の減産から回復したことを受け、前年同期（2,397.5万トン）比で46%増となった。内訳は、ベトナム681.4万トン（国別シェア19.5%）、ペルー427.3万トン（同12.2%）、マレーシア320.2万トン（同9.2%）の順。

アルゼンチン政府は、2024年5月に、市場に対する規制改革の一環として、小麦及びとうもろこしの輸出上限数量の撤廃を決定した。また、アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019年12月14日、輸出税を約7%から12%へ引き上げ、これを継続していたが、2025年1月25日、1月27日～6月30日まで一時的にとうもろこしの輸出税を9.5%に引き下げると発表した。

## とうもろこしーアルゼンチン

（早植えとうもろこしは、概ね9月後半～12月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、概ね12月前半～翌年2月前半に作付けされる。概ね3～8月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25年3月～26年2月)			
			予測値、( )はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	37.0	50.0	50.0 (54.0)	▲ 1.0	-	
消費量	14.2	14.3	14.3 (20.5)	▲ 2.0	0.4	
うち飼料用	10.0	10.0	10.0 (15.4)	▲ 2.0	-	
輸出量	25.2	35.0	36.0 (35.0)	-	2.9	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 50.0	
期末在庫量	2.3	3.1	2.8 (1.8)	-	▲ 9.7	
期末在庫率	5.9%	6.3%	5.5% (3.2%)	0.2	▲ 0.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.20	7.00	6.40 (7.70)	-	▲ 8.6	
単収(t/ha)	5.14	7.14	7.81 (7.01)	▲ 0.16	9.4	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
IGC「Grain Market Report」(16 January 2025)

### 写真 北部サンタフェ州のとうもろこしの圃場風景 (2025年1月31日撮影)



当圃場のとうもろこしは、2024年9月上旬に作付けられ、現在は成熟期にある。  
1月の降雨量は23.6mmと降雨はほぼなく、最高気温は40.6℃と気温が高かった。  
収穫作業は3月前半を予定。

撮影者：José Daniel Peloni

## < ウクライナ > 2024/25 年度の生産量は、前年度から 18.5%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、前年度より 18.5%減、侵攻前の史上最高の豊作となった 2021/22 年度から 37.1%減の 26.5 百万トンとなる見込み。収益性の高い油糧種子への作付けシフトを受けて収穫面積が減少（対前年度比 2.4%減）するとともに、7 月以降の高温乾燥の継続を受けて豊作の前年度から単収も減少（対前年度比 16.5%減）することにより、減産となる見込み。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、飼料用消費の引上げを受けて前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度並みの 5.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、減産により前年度から 25.4%減の 22.0 百万トンの見込み。なお、中国向け等の低調な輸出ペースを受けて前月予測から 1.0 百万トン下方修正された。

2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年 1 月の輸出量は 956.6 万トンと、前年同期（1,030.0 万トン）より 7.1%減。輸出先国は、トルコ 186.2 万トン（19.5%）、スペイン 150.7 万トン（15.8%）、イタリア 149.5 万トン（15.6%）の順。2024 年 10 月～2025 年 1 月のトルコ向け輸出量は前年同期（19.4 万トン）の 9.6 倍と大幅に増加した一方、豊作の中国向け輸出量は前年同期（163.8 万トン）から 80%以上減少しており、トルコや EU、エジプト等の近隣国向けの輸出シェアが高まっている。ただし、現地情報（2025.1.28、2025.1.30）によれば、EU はウクライナ産品に対する輸入関税と輸入枠の停止措置（現行の適用期間は 2024 年 6 月 6 日～2025 年 6 月 5 日）を今後は延長しないことを検討し、新たな仕組みについてウクライナ側と交渉している。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、減産による供給減から前年度より 40.2%減、侵攻前の 5 年平均より 74.7%減の 0.6 百万トンの見込み。2024/25 年度の期末在庫率は、前年度から 0.7 ポイント減の 2.4%と、2018/19 年度以来の低水準となる見込み。

## とうもろこしーウクライナ

（概ね 4～5 月に作付けされ、8～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)		
			予測値、( ) は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	27.0	32.5	26.5 (26.5)	-	▲ 18.5
消費量	4.7	5.0	5.0 (4.7)	0.5	-
うち飼料用	3.8	4.0	4.0 (3.3)	0.5	-
輸 出 量	27.1	29.5	22.0 (22.2)	▲ 1.0	▲ 25.4
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	100.0
期末在庫量	3.0	1.1	0.6 (0.7)	-	▲ 40.2
期末在庫率	9.4%	3.1%	2.4% (2.7%)	0.04	▲ 0.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	4.05	4.20	4.10 (4.00)	-	▲ 2.4
単収(t/ha)	6.67	7.74	6.46 (6.62)	-	▲ 16.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)

IGC 「Grain Market Report」(16 January 2025)

## 表 ウクライナのとうもろこし輸出量と輸出先国

（輸出量：万トン、シェア：%）

2024/25年度 (2024年10月～2025年1月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年1月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
トルコ	186.2	19.5	スペイン	297.4	10.1	スペイン	617.4	21.0
スペイン	150.7	15.8	中国	163.8	5.6	中国	461.9	15.7
イタリア	149.5	15.6	エジプト	134.1	4.6	エジプト	361.9	12.3
オランダ	115.6	12.1	イタリア	96.9	3.3	オランダ	277.7	9.4
エジプト	85.8	9.0	オランダ	91.8	3.1	イタリア	253.0	8.6
その他	268.8	28.1	その他	246.0	8.3	その他	975.1	33.1
合計	956.6	100.0	合計	1,030.0	35.0	合計	2,947.0	100.0

資料：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

## < 中国 > 2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2024/25 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受けて、前年度より 2.1%増の 294.9 百万トンとなり、史上最高となる見込み。

中国国家统计局「2024 年糧食生産量データ」（2024.12.13）によれば、2024 年の生産量は前年より 2.1%増の 294.9 百万トンとなる見込み。作付面積が 4,474 万ヘクタールと前年より 1.2%増加し、単収も 6.59 トン/ヘクタールと、前年より 0.9%増加したことによる。なお、一部地域で洪水や干ばつ、台風等の被害を受けたものの、大半では気象条件は良好であり、生育に有利に働いたとみられる。

【需要状況】USDAによれば、2024/25 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、飼料用需要が増大することから、前年度より 2.0%増の 313.0 百万トンと史上最高の見込み。ただし、国内の食肉需要は堅調なもの、伸びが鈍化しており、中国国家统计局（2025.1.17）によれば、2024 年の食肉生産量は 9,663 万トンと、前年比で 0.2%増。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2024/25 年度の実績は、ブラジル、ウクライナからの輸入量の減少を受けて前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、国内価格の下落等を受けた政策により、外国産ではなく豊作の国内産の備蓄向け購入を増加させていることから前年度より 57.3%減の 10.0 百万トンとなる見込み。

中国海関統計によれば、2024 年 1～12 月の輸入量は、国内産とうもろこし及び代替品の価格低下等を受けて前年同期比 49.2%減の 1,377.5 万トンの見込み。内訳は、ブラジル 646.6 万トン（46.9%）、ウクライナ 465.3 万トン（33.8%）、米国 207.2 万トン（15.0%）の順。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2024 年 12 月号」によれば、12 月の国内価格は、2,014 元/トンと豊作の新穀の供給を受けて前月（2,228 元/トン）から下落した。

USDAによれば、2024/25 年度の実績は、輸入量の引下げを受けて前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、輸入量の減少を受けて前年度より 3.8%減の 203.2 百万トンの見込み。

## とうもろこし—中国

（春とうもろこしは、概ね 2～4 月に作付けされ、7～9 月に収穫される。  
夏とうもろこしは、概ね 4～6 月に作付けされ、9～10 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)		
			予測値、( ) はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	277.2	288.8	294.9 (294.9)	-	2.1
消費量	299.0	307.0	313.0 (315.1)	-	2.0
うち飼料用	218.0	225.0	231.0 (213.0)	-	2.7
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-
輸 入 量	18.7	23.4	10.0 (11.0)	▲ 3.0	▲ 57.3
期末在庫量	206.0	211.3	203.2 (179.8)	▲ 3.0	▲ 3.8
期末在庫率	68.9%	68.8%	64.9% (57.0%)	▲ 1.0	▲ 3.9

(参考)

収穫面積(百万ha)	43.07	44.22	44.74 (44.74)	-	1.2
単収(t/ha)	6.44	6.53	6.59 (6.59)	-	0.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
IGC「Grain Market Report」(16 January 2025)

## 表 中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

（輸入量：万トン、シェア：%）

2024年 1月～12月			2023年 1月～12月			2022年 1月～12月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	646.6	46.9	ブラジル	1,280.6	47.2	米国	1,486.5	72.1
ウクライナ	465.3	33.8	米国	714.4	26.3	ウクライナ	526.4	25.5
米国	207.2	15.0	ウクライナ	551.8	20.3	ミャンマー	19.4	0.9
ミャンマー	17.8	1.3	ブルガリア	73.9	2.7	ブルガリア	14.7	0.7
ロシア	15.5	1.1	ミャンマー	38.1	1.4	ロシア	9.5	0.5
ラオス	7.7	0.6	ロシア	29.4	1.1	ラオス	5.1	0.2
その他	17.3	1.3	その他	24.5	0.9	その他	0.2	0.0
計	1,377.5	100	計	2,712.7	100	計	2,061.8	100

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

### 3 コメ

#### (1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<USDAの見通し> 2024/25年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

- ・スリランカ、アルゼンチンで下方修正され、前月から下方修正されたものの、史上最高の見込み。

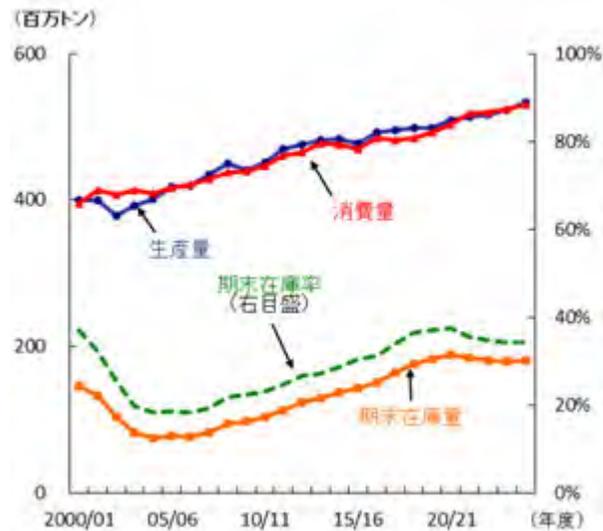
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・中国、インドネシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・インド、韓国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」(2025.2.11)をもとに農林水産省にて作成

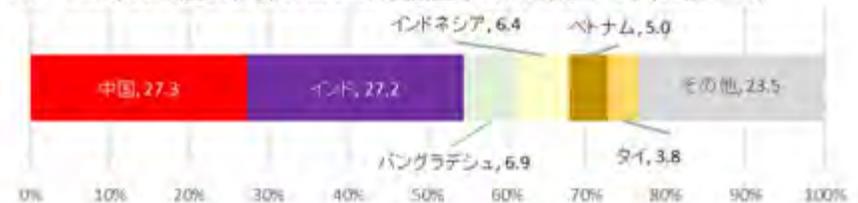
#### ◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	516.7	522.3	532.7	▲ 0.2	2.0
消費量	520.2	523.5	530.5	0.3	1.3
輸出量	55.1	56.9	58.3	0.4	2.5
輸入量	57.3	53.4	54.9	0.8	2.8
期末在庫量	180.7	179.5	181.6	▲ 0.5	1.2
期末在庫率	34.7%	34.3%	34.2%	▲ 0.1	▲ 0.05

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 February 2025)

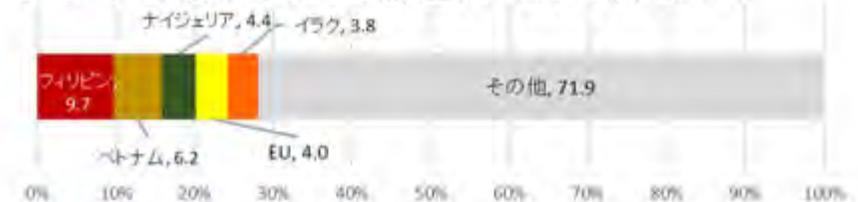
#### ○ 2024/25年度の世界のコメの生産量(532.7百万トン)(単位：%)



#### ○ 2024/25年度の世界のコメの輸出量(58.3百万トン)(単位：%)



#### ○ 2024/25年度の世界のコメの輸入量(54.9百万トン)(単位：%)



## (2) 国別のコメの需給動向

### < タイ > 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2024/25年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、20.1百万トンと、前年度に比べ0.5%増加する見込み。

タイ農業協同組合省農業経済局「農業経済」(2025.1)によれば、2024/25年度の雨季米(2024年5月～10月作付け)の生産量は、良好な天候から、前年度に比べ0.8%増の27.0百万トン(粳ベース)の見込み。作付面積は、前年度の994万ヘクタールから992万ヘクタールに減少する見込み。コメの市場価格が高いことから作付面積を増加させる生産者がいる一方、天候への懸念から乾燥に強いキャッサバや市場価格が高騰しているサトウキビへの作付けのシフトも行われている。なお、雨季米の収穫は1月に終了している。

2024/25年度の乾季米(2024年11月～2025年4月作付け)の作付面積は、雨季中の降雨量が多く、十分な灌漑用水を供給できることから、前年度(163万ヘクタール)から19%増の192万ヘクタールと予測されている。

アセアン食料安全保障情報システム(2025.2)によると、2024/25年度の乾季米は、豊富な水の供給と良好な気象条件により、単収が増加すると予測されている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2024/25年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、インドネシア政府の輸入減の見直しを受け、前年度から24.2%減少し、7.5百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会は、インド政府による輸出規制撤廃に加え、世界的に生産量の増加が見込まれることから、国際市場での競争が激化し、2024/25年度のインドネシア向け輸出は大幅に減少すると見込んでいる。

タイ関税局によれば、2024年1～12月の輸出量は、前年同期比13.5%増の995万トンで、主な輸出先国は、インドネシア133.3万トン(国別シェア13%)、イラク99.7万トン(同10%)、米国84.8万トン(同9%)。このうち、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していたインドネシア向けの輸出量は、133万トンと輸出先国の中で最大となっている。

## コメータイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位:百万精米トン)

年度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25年1月～25年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)	
生産量	20.9	20.0	20.1 (20.1)	-	0.5	
消費量	12.3	12.3	12.3 (12.4)	-	-	
輸出量	8.7	9.9	7.5 (7.6)	-	▲ 24.2	
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.0)	-	-	
期末在庫量	4.4	2.3	2.7 (2.5)	0.1	17.7	
期末在庫率	20.7%	10.2%	13.4% (12.6%)	0.6	3.2	

(参考)

収穫面積(百万ha)	11.07	10.65	10.70 (10.70)	-	0.5	
単収(粳t/ha)	2.86	2.85	2.85 (1.88)	-	-	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)、  
IGC「Grain Market Report」(16 January 2025) (単収は精米t/ha)

## 表 タイの国別輸出量

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2024年1月～12月)			2022/23年度 (2023年1月～12月)			2021/22年度 (2022年1月～12月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
インドネシア	133.3	13.4	インドネシア	141.1	16.1	イラク	160.0	20.8
イラク	99.7	10.0	南アフリカ	88.7	10.1	南アフリカ	77.5	10.1
米国	84.8	8.5	イラク	85.4	9.7	中国	75.2	9.8
南アフリカ	83.3	8.4	米国	70.6	8.1	米国	65.2	8.5
フィリピン	61.8	6.2	中国	47.2	5.4	日本	31.3	4.1
セネガル	46.2	4.6	フィリピン	42.0	4.8	セネガル	23.2	3.0
その他	485.4	48.8	その他	401.8	45.8	その他	338.6	43.9
計	994.5	100.0	計	876.9	100.0	計	771.0	100.0

資料: タイ関税局

## < 米国 > 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 1.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実生産量は、7.1 百万トンと、長粒種の収穫面積、単収増により、前年度に比べ 1.9%増加し、2020/21 年度以降最大となる見込み。

同「Rice Outlook」(2025.2.13)によれば、2024/25 年度の種別生産量は、長粒種は、収穫面積、単収ともに増加し、前年度より 12%増の 5.5 百万トンとなる見込み。一方、中・短粒種は、南部の生産州及びカリフォルニア州における作付面積の減少を受け 1.6 百万トンと前年度より 22%減少する見込み。

【貿易情報・その他】同「Rice Outlook」(2025.2.13)によれば、2024/25 年度の輸入量は、前月予測から 0.01 百万トン上方修正され、前年度に比べ 4.9%増の 1.5 百万トンと史上最高の見込み。長粒種の輸入量は、特に 12 月のタイからの輸入量の増加を受け、前月予測から 0.03 百万トン上方修正され、前年度に比べ 7.2%増の 1.3 百万トンと史上最高の見込み。インドを中心としたアジア諸国からの香り米の継続的な輸入も見込まれている。

中・短粒種の輸入量は、中国からの米国領プエルトリコ向けの輸入が減るとの予測を受け、前月予測から 0.01 百万トン下方修正され、前年度に比べ 4.1%減の 0.22 百万トンの見込み。

2024/25 年度の輸出量は 3.1 百万トンと、3 月～4 月に収穫のピークを迎えるウルグアイ産等の南米産米との競争が見込まれることから、前月予測から 0.13 百万トン下方修正され、前年度に比べ 2.2%減少する見込み。米国産長粒種の精米価格は、2 月 7 日現在、ウルグアイ産米の価格を上回っている(ベトナムの「図 長粒種の FOB 価格の推移」参照)。

同「Exports Sales Query System」(2025.1)によれば、2023/24 年度(2023 年 8 月～2024 年 7 月)の輸出量は 327.7 万トンで、主な輸出先国は、メキシコ 90.6 万トン(国別シェア 27.7%)、ハイチ 34.5 万トン(同 10.5%)、日本 29.6 万トン(同 9.0%)の順。種別には、長粒種は、輸出量 263.4 万トンで、主な輸出先国は、メキシコ 84 万トン(国別シェア 31.9%)、ハイチ 34.5 万トン(同 13.1%)、ベネズエラ 21.7 万トン(同 8.2%)。中・短粒種は、輸出量 64.3 万トンで、主な輸出先国は、日本 29.6 万トン(国別シェア 46.0%)、韓国 13.8 万トン(同 21.5%)、メキシコ 6.6 万トン(同 10.3%)。

2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度に比べ 17.3%増加し、1.5 百万トンの見込み。

## コメー米国

長粒種の生産量が 75%を占め、中・短粒種の生産量は 25%、その内カリフォルニア州での栽培が 20%

(単位:百万精米トン)

年度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年8月～25年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	5.1	6.9	7.1	-	1.9
消費量	4.6	4.9	5.3	0.03	7.1
輸出量	2.1	3.1	3.1	▲ 0.1	▲ 2.2
輸入量	1.3	1.4	1.5	0.01	4.9
期末在庫量	1.0	1.3	1.5	0.1	17.3
期末在庫率	14.4%	15.8%	17.9%	1.5	2.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	0.88	1.16	1.16	-	-
単収(収t/ha)	8.28	8.56	8.69	-	1.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)

図 米国の長粒種と中・短粒種の生産量・輸出価格の推移



資料:USDA「Rice Outlook」(2025.2.13)をもとに農林水産省で作成。  
価格は年度内の平均価格

## < 中国 > 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、政府の最低支持価格の上昇により、収穫面積が増加（前年度比 0.2%増）することから、前年度比 0.5%増の 145.3 百万トン（精米ベース）となる見込み。

中国国家统计局「2024 年糧食生産量データ」（2024.12.13）によれば、2024 年の生産量は、作付面積 29.0 百万ヘクタール（前年比 0.2%増）及び単収 7.15 トン/ヘクタール（同 0.1%増）の増加から、前年に比べ 0.5%増の 207.5 百万トン（粳ベース）の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、世界のコメ価格の下落による輸入増を受け、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、145.9 百万トンとなる見込み。飼料用需要が比較的安価なとうもろこしへシフトすることや、高齢化の進展、若年層の食生活の西洋化等に伴い食用需要が減少することから、前年度比で 1.5%減少する見込み。なお、消費量は 2021/22 年度に史上最高の 156.4 百万トンに達したのち、3 年連続で減少している。

2024/25 年度の輸入量は、世界のコメ価格の下落を受けベトナム、ミャンマー、パキスタン、タイ、カンボジアといった伝統的なインディカ米の供給国からの輸入が増加するとの予測から、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、前年度比 37.3%増の 2.1 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、12 月の輸入量は、前月に比べ 20.33 万トン増加し、37.48 万トン（前月比 118.54%増）。

2024 年 1～12 月の輸入量は 162.5 万トン（前年同期 37%減）。内訳は、ミャンマー 56.4 万トン（国別シェア 34.7%）、タイ 43.3 万トン（同 26.6%）、ベトナム 28.1 万トン（同 17.3%）の順。

USDA によれば、「一帯一路」政策の賛同国を拡大する目的から、同政策の関係国に対しコメの輸出促進を図っているものの、軟調な需要に基づく輸出が継続すると予測されることから、2024/25 年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、前年度比 38.7%減の 1.0 百万トンの見込み。

2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測から変更はなく、103.5 百万トンと前年度に比べ 0.5%増の見込み。

## コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは 3 割程度

(単位: 百万精米トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	146.0	144.6	145.3 (145.3)	-	0.5
消費量	155.0	148.1	145.9 (145.2)	0.4	▲ 1.5
輸出量	1.7	1.6	1.0 (1.6)	-	▲ 38.7
輸入量	4.4	1.5	2.1 (2.4)	0.4	37.3
期末在庫量	106.6	103.0	103.5 (102.1)	-	0.5
期末在庫率	68.0%	68.8%	70.5% (69.6%)	▲ 0.2	1.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	29.45	28.95	29.01 (29.00)	-	0.2
単収(粳t/ha)	7.08	7.14	7.15 (5.01)	-	0.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
IGC 「Grain Market Report」(16 January 2025) (単収は精米t/ha)

図 中国の生産量、収穫面積、単収の推移  
(2004/05～2024/25 年度)



資料: USDA 「PS&D」(2025. 2. 11) をもとに農林水産省にて作成

## < インド > 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 5.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2024/25 年度の実績は、145.0 百万トンと、前年度比で 5.2%増加、過去 5 年平均 (134.5 百万トン) と比べ 7.8%増加し、史上最高の見込み。収穫面積は、50.0 百万ヘクタールと前年度に比べ 4.5%増加し史上最高となる見込み。単収も 4.35 トン/ヘクタールと、前年度 (4.32 トン/ヘクタール) と比べ 0.7%増と史上最高となる見込み。

インド農業・農民福祉省によると、11 月 4 日時点で、2024/25 年度のカリフ米生産量は、前年度 (113.2 百万トン) から 5.9%増の 119.9 百万トンとなる見込み。カリフ米の作付面積は前年度 (40.45 百万ヘクタール) から 2.5%増加し 41.45 百万ヘクタールとなる見込み。2024/25 年度のカリフ米の作付けは、2 月 4 日時点で、前年度 (40.59 百万ヘクタール) から 4.8%増加し、42.54 百万ヘクタールとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2024/25 年度の消費量は、旺盛な国内需要から前年度比 4.0%増の 121.0 百万トンとなる見込み。なお、国民の食料安全保障を確保するため、食料安全保障法に基づき、公的食料配給制度 (PDS) が実施されており、より多くのコメが供給される見込み。政府は公的食料配給制度により市場からコメ等を調達し、低所得世帯 (8.14 億人以上) に無償又は低価格で配給している。2024/25 年度の輸出量は、インド政府の輸出規制撤廃等を受け、アフリカ及び中東向けの輸出が増加するとの予測から、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度比 52.5%増の 22.0 百万トンの見込み。依然として世界第 1 位の輸出シェアを維持し、世界全体のコメ輸出総量の約 38%を占める。インド輸出入統計によれば、2024 年 11 月の輸出量は 203.1 万トンで、主な輸出先国は、ベナン 25.1 万トン (国別シェア 12.4%)、コートジボアール 18.8 万トン (同 9.2%)、トーゴ 13.8 万トン (同 6.8%) の順。ベナン等のアフリカ諸国向けは非バスマティ米の輸出が主である。

インド政府は、2022 年 9 月 9 日以降、砕米の輸出禁止や輸出関税・最低輸出価格の設定等の措置を発動・強化してきたが、史上最高の増産予測及び農家・輸出者からの要請を受け、2024 年 9 月 14 日に、バスマティ米の最低輸出価格の撤廃を発表した。また 9 月 27 日には、粳米、玄米、パーボイルド米の輸出関税を 20%から 10%への引き下げを発表。更に、10 月 23 日には、非バスマティ米の輸出禁止措置の撤廃を発表した。また、インド政府は、2025 年 1 月 1 日、インドネシア政府と年間 100 万トンの非バスマティ米の貿易に係る覚書を調印、閣議決定したと発表した。

インド食品公社 (Food Cooperation India) によれば、2025 年 1 月時点の期末在庫量は、29.09 百万トン (精米) と前年に比べ 60%増の見込み。

## コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月~25年9月)		
			予測値、( )はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	135.8	137.8	145.0 (144.5)	-	5.2
消費量	114.5	116.4	121.0 (121.0)	-	4.0
輸出量	20.3	14.4	22.0 (21.4)	0.5	52.5
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	35.0	42.0	44.0 (43.9)	▲ 0.5	4.8
期末在庫率	26.0%	32.1%	30.8% (30.8%)	▲ 0.5	▲ 1.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	47.83	47.83	50.00 (50.00)	-	4.5
単収(精t/ha)	4.26	4.32	4.35 (2.89)	-	0.7

資料: USDA [World Agricultural Supply and Demand Estimates]、  
[World Agricultural Production] (11 February 2025)、  
IGC [Grain Market Report] (16 January 2025) (単収は精米t/ha)

表 インドのコメ輸出規制(2024 年 10 月 23 日時点)及び  
対象品目別輸出シェア

対象品目	措置内容	2024年 1月~11月 輸出シェア (%)
全ての種類のコメ粳 (HS 1006 10)	輸出関税 (10%)	1.65
全ての種類のコメの玄米 (HS 1006 20)	輸出関税 (10%)	2.46
バスマティ米・精米 (HS1006 30 20)	輸出関税: 12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t)	34.44
パーボイルド米・精米 (HS1006 30 10)	輸出関税 (10%)	45.87
バスマティ米・パーボイルド米以外の精米 (HS1006 30 90)	輸出再開	10.82
砕米 (HS1006 40 00)	輸出禁止	4.77

※食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は輸出を許可  
※有機米は本措置の対象外  
資料: インド政府の公示等をもとに農林水産省にて作成

## < ベトナム > 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.8%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2024/25年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、26.5百万トンと、前年度を0.8%上回る見込み。2016/17年度以降、南部沿岸地域における海水の浸潤やメコン川の水流通減少、肥料価格の高騰、高収益作物等（果物・野菜・養殖）へのシフト等から、作付面積は減少傾向にあったが、2024/25年度の収穫面積は6.95百万ヘクタールと前年度に比べ0.7%増加する見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2025.2）によると、红河デルタ地域（北部）では、乾季米（冬春作）の作付けが開始されている。温暖な天候と灌漑整備が進み、作付進捗は良好とのこと。メコンデルタ地域（南部）でも、乾季米（冬春作）の作付けが開始されており、2月初旬の作付面積は1.86百万ヘクタールとなっている。

【貿易情報・その他】USDA「Rice Outlook」（2025.2.13）によれば、2024/25年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ10.5%減の3.4百万トンとなる見込み。ベトナムのコメ輸入の大部分をカンボジアが占めており、カンボジアで精米されたほとんどがベトナム向けに出荷され、残りはインドから輸入している。

USDAによれば、2024/25年度の輸出量は、インドネシア政府調達の減少及び世界第1位のコメ輸出国であるインドが非バスマティ米の輸出規制撤廃等を実施したことによる同国との競争激化が予想され、前月予測から変更はなく、前年度から17.0%減少し、7.5百万トンとなる見込み。

ベトナム税関総局によれば、2024年1月～12月の輸出量は903.4万トンと、前年同期（813.2万トン）に比べ11.1%増加し、過去最高となった。主な輸出先国は、フィリピン422.1万トン（国別シェア46.7%）、インドネシア125.7万トン（同13.9%）、マレーシア71.9万トン（同7.9%）、ガーナ61.3万トン（同6.7%）の順。

USDA「Grain; World Markets and Trade」（2025.2.11）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の2月7日までの週の価格は、インドネシア向けの需要低迷を反映し、前月1月7日までの週から55ドルトン下落し、394ドルトンとなった。

## コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位:百万精米トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25年1月～25年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	27.1	26.3	26.5 (28.6)	-	0.8
消費量	22.4	22.4	22.4 (22.7)	-	-
輸出量	8.2	9.0	7.5 (7.5)	-	▲ 17.0
輸入量	3.3	3.8	3.4 (2.2)	-	▲ 10.5
期末在庫量	3.4	2.0	2.0 (2.6)	▲ 0.03	-
期末在庫率	11.0%	6.5%	6.8% (8.5%)	▲ 0.1	0.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.12	6.90	6.95 (7.12)	-	0.7
単収(精t/ha)	6.10	6.10	6.10 (4.02)	-	-

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
IGC「Grain Market Report」(16 January 2025) (単収は精米t/ha)

## 写真 カントー市 Thoi Lai 郡 Tan Thanh 村の圃場 (2025. 2. 11)



生育は良好で、乾季米（冬作）は登熟期を迎えており、作柄は良好。

## 図 長粒種の FOB 価格の推移 (2024年2月7日～2025年2月7日)



資料: USDA「Grain: World Markets and Trade」(2025. 2. 11)より

## II 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要 (詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2024/25年度

**生産量** 前年度比 ↑ 前月比 ↓

- ・アルゼンチン、パラグアイで下方修正され、前月予測から下方修正されたものの、史上最高の見込み。

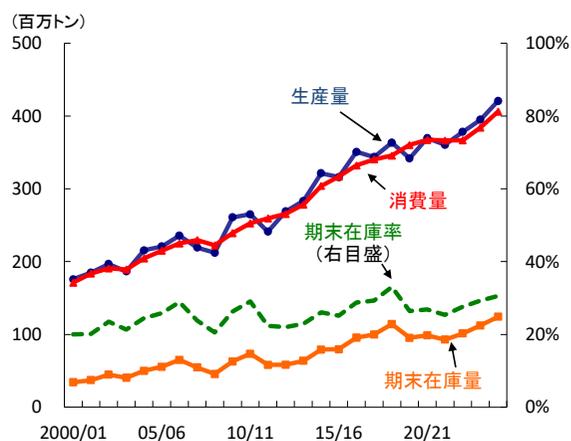
**消費量** 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・パラグアイで下方修正されたものの、ブラジル等で上方修正され、前月予測から上方修正され、史上最高の見込み。

**輸出量** 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・カザフスタンで上方修正され、前月予測から上方修正され、史上最高の見込み。

**期末在庫量** 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」(2025.2.11)をもとに農林水産省で作成

## ◎世界の大豆需給

(単位：百万トン)

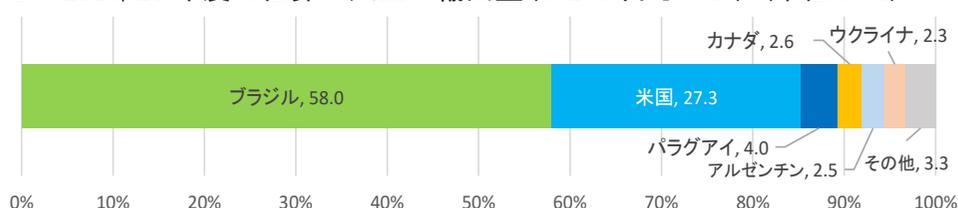
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	378.2	395.0	420.8	▲ 3.5	6.5
消費量	366.7	384.3	406.2	0.7	5.7
うち搾油用	315.6	331.2	349.9	0.6	5.6
輸出量	171.8	177.5	182.0	0.01	2.5
輸入量	168.6	178.1	179.2	-	0.6
期末在庫量	101.2	112.5	124.3	▲ 4.0	10.5
期末在庫率	27.6%	29.3%	30.6%	▲ 1.0	1.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 February 2025)

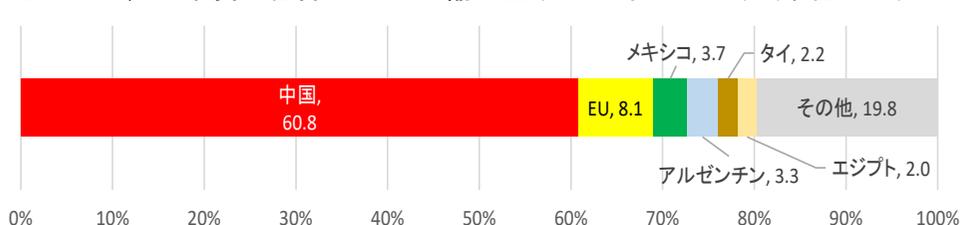
### ○ 2024/25年度の世界の大豆の生産量(420.8百万トン)(単位：%)



### ○ 2024/25年度の世界の大豆の輸出量(182.0百万トン)(単位：%)



### ○ 2024/25年度の世界の大豆の輸入量(179.2百万トン)(単位：%)



## (2) 国別の大豆の需給動向

### < 米国 > 2024/25 年度の生産量は前年度から 4.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実績は、収穫面積及び単収の増加を受け、前年度より 4.9%増の 118.8 百万トンと史上 4 番目の見通し。作付け時の大豆価格が、前年度に史上最高の豊作となり価格が下落したとうもろこしに比べ大豆の作付けに有利であったため、多くの農家が大豆の作付けに切り替えたとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、大豆油等の需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 4.8%増の 68.7 百万トンで史上最高の見込み。

USDA 「Oil Crops Outlook」(2025.2.13) によれば、2024 年 12 月の大豆搾油量は、5.9 百万トンと、前月よりわずかに増加し、一日あたりの搾油量は 19.1 万トンと史上最高となった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、世界全体の搾油用需要が増加する見通しから、前年度より 7.7%増の 49.7 百万トンの見込み。

USDA によれば、2024 年 9 月～2025 年 1 月の輸出量は 3,400.7 万トンと、世界的な大豆需要の増加を受けて前年同期の 2,862.3 万トンより 19%増。内訳は中国 1,811.2 万トン(国別シェア 53.3%)、メキシコ 243.2 万トン(同 7.2%)、イタリア 185.6 万トン(同 5.5%)の順となっている。

2025 年 2 月 4 日、米国政府は、中国からの全輸入品に 10%の追加の輸入関税を発効した。それに対し、2 月 10 日、中国政府は、石炭や石油ガス、原油等に対象品目を絞り米国からの輸入品に追加の輸入関税を設定したものの、米国产大豆は対象に含まれなかった。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、増産を受けて前年度より 10.9%増の 10.3 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前月予測からの変更はなく、8.7%と、前年度(8.3%)、過去 5 年平均(8.0%)を上回っている。

## 大豆—米国

(概ね 5～6 月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

(単位：百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年 9月～25年 8月)		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	116.2	113.3	118.8	-	4.9
消費量	63.3	65.6	68.7	-	4.8
うち搾油用	60.2	62.2	65.6	-	5.4
輸 出 量	53.9	46.1	49.7	-	7.7
輸 入 量	0.7	0.6	0.5	-	▲ 5.3
期末在庫量	7.2	9.3	10.3	-	10.9
期末在庫率	6.1%	8.3%	8.7%	-	0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	34.87	33.29	34.82	-	4.6
単収(t/ha)	3.33	3.40	3.41	-	0.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)

### 図 米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格 (FOB) の推移



資料：IGC のデータをもとに農林水産省にて作成

## < ブラジル > 2024/25 年度の生産量は前年度から 10.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が史上最高（対前年度比 2.8%増）となり、主要生産地の中西部で生育期を通じて天候に恵まれ単収も増加（同 7.5%増）する見込みを受け、前年度より 10.5%増の 169.0 百万トンと史上最高の見込み。

CONAB の月例報告（2025.2.13）によれば、2024/25 年度の実績は、とうもろこしから収益性が高い大豆に作付けがシフトすること等による作付面積の増加（対前年度比 2.8%増）及び単収の増加（同 9.3%増）から前年度より 12.4%増の 166.0 百万トンの見込み。2 月上旬現在、収穫進捗率は 8%と、中西部マット・グロッソ州等での降雨過多による収穫作業の遅れを受けて前年同期（14%）を下回っている。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の実績は、搾油用消費の引上げを受けて前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 2.6%増の 60.1 百万トンと史上最高の見込み。

「OIL WORLD Weekly」（2025.2.7）によれば、2024 年のブラジルのバイオディーゼル生産量は、前年より 20%増の 7.9 百万トンの見込み。2024 年 3 月に導入された 14%のバイオディーゼル混合基準は概ね満たされている。なお、ブラジルでのバイオディーゼル原料に占める大豆油の割合は約 7 割と、大豆油が主要な原料となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、中国からの引き続き堅調な需要等により、前年度から 1.3%増の 105.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2025 年 1 月の輸出量は 107.3 万トンで、前年同月（285.5 万トン）に比べ 62.4%減。輸出先は、中国 80.0 万トン（国別シェア 74.6%）、タイ 11.9 万トン（同 11.1%）、イラク 9.3 万トン（同 8.6%）の順。

「OIL WORLD Weekly」（2025.2.14）によれば、2024/25 年度の実績は、大豆の収穫遅延を受けて輸出量が前年同月から減少したとみられる。

## 大豆—ブラジル

（概ね 9～12 月に作付けされ、1～4 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)			
			予測値、( )はCONAB	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	162.0	153.0	169.0 (166.0)	-	10.5	
消費量	57.2	58.6	60.1 (60.2)	1.0	2.6	
うち搾油用	53.4	54.7	56.0 ...	1.0	2.4	
輸 出 量	95.5	104.2	105.5 (105.4)	-	1.3	
輸 入 量	0.2	0.9	0.2 (0.5)	-	▲ 82.8	
期末在庫量	36.8	28.0	31.5 (1.7)	▲ 1.0	12.7	
期末在庫率	24.1%	17.2%	19.0% (1.0%)	▲ 0.7	1.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	44.60	46.10	47.40 (47.45)	0.10	2.8	
単収(t/ha)	3.63	3.32	3.57 (3.50)	-	7.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)、  
CONAB「Graos」(13 February 2025)

### 写真 中西部マット・グロッソ州の大豆の圃場風景 (2025 年 1 月 23 日撮影)



当圃場の作付作業は 2024 年 10 月 21 日に行われ、現在は自然乾燥待ちである。  
気象条件によるものの、通常は自然乾燥を 10 日間続ければ収穫可能である。

撮影者：Rafael Rohenkohl

## < カナダ > 2024/25 年度の生産量は前年度から 8.4%増加する見込み (AAFC)

【生育・生産状況】AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2025.2.19)によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、東部での収穫面積と単収の増加等により、前年度(7.0 百万トン)から 8.4%増の 7.6 百万トンの見込み。州別には、米国コーンベルトに隣接する最大生産州オンタリオ州の実産量は前年度から 8%増の 4.4 百万トンの見込み。隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されており、マニトバ州の実産量は前年度から 8%増の 1.1 百万トン、ケベック州の実産量は前年度から 9%増の 1.4 百万トンの見込み。

なお、AAFCによれば、2025/26 年度の作付面積は、大豆価格の低下を受けて農家他作物に作付けをシフトさせることが見込まれることから、2024/25 年度(231 万ヘクタール)から 7.0%減の 215 万ヘクタールの見込み。

【需要状況】AAFCによれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用等の需要増により前年度(2.2 百万トン)から 11.6%増の 2.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFCによれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、供給増を受けて前年度(4.9 百万トン)より 11.9%増、過去 5 年平均(4.3 百万トン)より 27.0%増の 5.5 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会によれば、2024/25 年度(2024 年 8~12 月)の輸出量は 301.6 万トンで、前年同期(267.4 万トン)を上回っている。国別では、中国 83.8 万トン(国別シェア 27.8%)、イラン 68.1 万トン(同 22.6%)、アルジェリア 37.8 万トン(同 22.6%)の順となっている。

なお、カナダ産大豆は、主産地がカナダ東部であるものの、通常日本向けは鉄道を利用して太平洋岸のバンクーバーを経由して輸出されるルートとなっている。

AAFCによれば、2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、増産を受けて前年度から 4.2%増の 0.6 百万トンの見込み。

## 大豆—カナダ

(概ね 5~6 月に作付けされ、9~11 月に収穫される。)

(単位:百万トン)

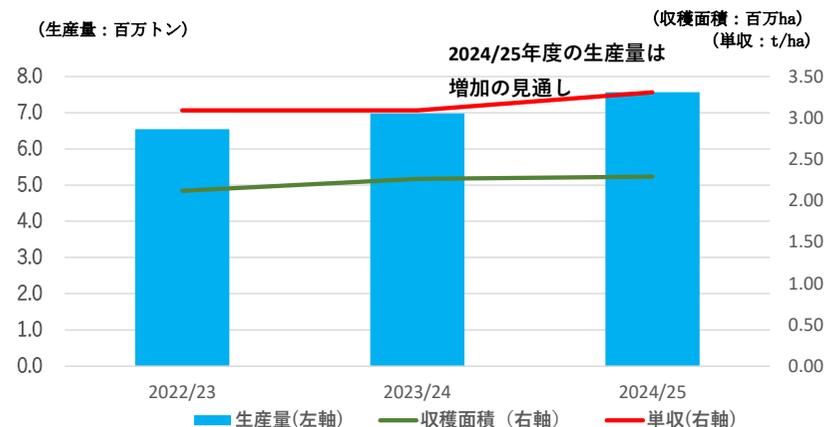
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年8月~25年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.5	7.0	7.6 (7.6)	-	8.4
消費量	2.7	2.3	2.9 (2.5)	-	25.1
うち搾油用	1.8	1.7	1.8 (1.9)	-	5.9
輸 出 量	4.2	4.8	4.8 (5.5)	-	▲ 0.9
輸 入 量	0.5	0.3	0.4 (0.4)	-	4.5
期末在庫量	0.4	0.6	0.8 (0.6)	-	47.6
期末在庫率	5.3%	7.9%	10.9% (7.2%)	-	3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.12	2.26	2.29 (2.29)	-	1.3
単収(t/ha)	3.09	3.09	3.30 (3.31)	-	6.8

資料: USDA「PS&D」、

「World Agricultural Production」(11 February 2025)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(19 February 2025)

## 図 カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料: AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2025.2.19)をもとに

農林水産省にて作成

## < 中国 > 2024/25 年度の生産量は、史上最高の前年度から 0.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受けて前年度より 0.9%減の 20.7 百万トンとなるも、史上 2 番目に高い見込み。

中国国家统计局「2024 年糧食生産量データ」（2024.12.13）によれば、2024 年の生産量は、前年から 0.9%減の 20.7 百万トンとなる見込み。単収は 2.00 トン/ヘクタールと前年から 0.5%増加したものの、作付面積は 10.34 百万ヘクタールと前年より 1.4%減少することによる。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国内の畜産物の需要増を受けて大豆粕の需要が増加することから、前年度より 4.2%増の 126.9 百万トンと史上最高の見込み。ただし、国内の食肉需要は堅調なものの、伸びが鈍化しており、中国国家统计局（2025.1.17）によれば、2024 年の食肉生産量は 9,663 万トンと、前年比で 0.2%増。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、史上最高の前年度より 2.7%減の 109.0 百万トンとなるも、引き続き高水準を維持する見込み。

中国海関統計によれば、2024 年 1～12 月の輸入量は、前年同期より 6.1%増の 10,503.5 万トン。内訳は、ブラジル 7,465.0 万トン（71.1%）、米国 2,213.4 万トン（21.1%）、アルゼンチン 410.2 万トン（3.9%）の順。12 月の米国からの輸入量は 425.4 万トンと、前月比で 52.4%増、前年同月比で 10.5%増となった。これは、ブラジル産大豆の端境期に当たり、米国産の輸入を増やしたためとみられる。

USDA 「Oilseeds: World Markets and Trade」（2025.2.11）によれば、中国の米国産輸入量は 5 年ぶりの低水準となった。ブラジル産が米国産より大幅に安価に取引されているためとみられる。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量と輸入量の合計が消費量を上回っていることを受けて、前年度より 6.1%増の 46.0 百万トンと史上最高の見込み。

## 大豆－中国

（概ね 4～6 月に作付けされ、9～10 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	20.3	20.8	20.7 (20.7)	-	▲ 0.9
消費量	117.5	121.8	126.9 (127.8)	-	4.2
うち搾油用	96.0	99.0	103.0 (105.8)	-	4.0
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
輸 入 量	104.5	112.0	109.0 (109.0)	-	▲ 2.7
期末在庫量	32.3	43.3	46.0 (48.8)	-	6.1
期末在庫率	27.5%	35.5%	36.2% (38.2%)	-	0.7
（参考）					
収穫面積(百万ha)	10.24	10.47	10.33 (10.36)	-	▲ 1.3
単収(t/ha)	1.98	1.99	2.00 (1.99)	-	0.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」（11 February 2025）  
IGC 「Grain Market Report」（16 January 2025）

## 表 中国の大豆輸入量と輸入先国

（輸入量：万トン、シェア：%）

2024年 1月～12月			2023年 1月～12月			2022年 1月～12月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	7,465.0	71.1	ブラジル	6,993.0	70.7	ブラジル	5,439.3	61.0
米国	2,213.4	21.1	米国	2,374.3	24.0	米国	2,780.2	31.2
アルゼンチン	410.2	3.9	アルゼンチン	199.2	2.0	アルゼンチン	351.8	3.9
ウルグアイ	145.3	1.4	カナダ	146.6	1.5	ウルグアイ	178.8	2.0
カナダ	122.8	1.2	ロシア	129.3	1.3	カナダ	71.9	0.8
ウクライナ	61.5	0.6	南アフリカ	14.7	0.1	ロシア	69.4	0.8
その他	85.5	0.7	その他	38.6	0.4	その他	30.4	0.3
計	10,503.5	100.0	計	9,895.7	100.0	計	8,921.8	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

## < アルゼンチン > 2024/25 年度の生産量は、前年度から 1.6%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前年度から 1.6%増の 49.0 百万トンの見込み。増産の主な要因は、大豆の収益性が高まっていることに加え、農家が病害虫のヨコバイによる被害懸念からとうもろこしから大豆へ作付けをシフトさせることによる。ただし、継続的な高温乾燥を受けて生産量は前月予測から 3.0 百万トン下方修正された。

USDA 「World Agricultural Production」(2025.2.11) によれば、1 月末時点で大豆の作付けは完了。アルゼンチン産大豆の約 75 パーセントを占める早植え大豆が開花期を迎える 1 月に高温乾燥が続き、単収の見込みが引き下げられた。

USDA 「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2025.2.11) によれば、2 月上旬、南部では降雨により土壌水分量が増加し、成熟に好影響を与えているとみられる。一方、北部では乾燥が続き、成熟が依然として進んでおらず、降雨が必要とされている。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産に伴い搾油量が増加することから、前年度比 10.9%増の 48.6 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 23.0%減の 6.0 百万トンの見込み。

2024/25 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、世界全体の供給量の引上げによる競争の激化を受けて前年度より 11.9%減の 4.5 百万トンとなるも、中国向け輸出が引き続き堅調に推移する見通し。なお、アルゼンチン国家統計局によれば、2024 年 1～12 月の輸出量は、2022/23 年度の干ばつによる減産からの回復を受けて 459.9 万トンで前年同期(185.9 万トン)の 2.5 倍。輸出先は、中国 391.9 万トン(国別シェア 85.2%)、米国 12.3 万トン(同 2.7%)、チリ 6.7 万トン(同 1.5%)の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆に最大 33%、大豆油及び大豆粕に 31%を設定していたが、2025 年 1 月 25 日、1 月 27 日～6 月 30 日まで一時的に大豆を 26%、大豆油及び大豆粕を 24.5%に引き下げると発表した。

## 大豆ーアルゼンチン

(早植え大豆は、概ね 10～1 月に作付けされ、3～7 月に収穫。  
遅植え大豆は、概ね 10～1 月に作付けされ、4～7 月に収穫。)

(単位：百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	25.0	48.2	49.0 (51.5)	▲ 3.0	1.6
消費量	36.6	43.8	48.6 (49.2)	-	10.9
うち搾油用	30.3	36.6	41.0 (42.7)	-	12.1
輸 出 量	4.2	5.1	4.5 (5.4)	-	▲ 11.9
輸 入 量	9.1	7.8	6.0 (5.7)	-	▲ 23.0
期末在庫率	17.0	24.1	26.0 (11.5)	▲ 3.0	7.9
期末在庫率	41.7%	49.1%	48.9% (21.1%)	▲ 5.6	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.40	16.37	17.30 (17.33)	-	5.7
単収(t/ha)	1.74	2.95	2.83 (2.97)	▲ 0.18	▲ 4.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、  
「World Agricultural Production」(11 February 2025)  
IGC 「Grain Market Report」(16 January 2025)

## 写真 北部サンタフェ州の大豆の圃場風景 (2025 年 1 月 31 日撮影)



本圃場では遅植え大豆の作付作業が 2024 年 11 月下旬に行われ、現在は開花期にある。1 月の降雨量は 23.6mm と降雨はほぼなく、最高気温は 40.6℃ と気温が高かった。ただ、大豆の作付け前に小麦があったため、水分量が保たれた。収穫作業は 4 月前半を予定。

撮影者：José Daniel Peloni

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について (2024/25年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	24年6月～25年5月	24年9月～25年8月	24年8月～25年7月	24年9月～25年8月
カナダ	24年8月～25年7月			24年8月～25年7月
豪州	24年10月～25年9月		25年3月～25年2月	
EU	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月		
中国	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月
ロシア	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月		24年9月～25年8月
ウクライナ	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月		
ブラジル		25年3月～26年2月	25年4月～26年3月	24年10月～25年9月
アルゼンチン	24年12月～25年11月	25年3月～26年2月		24年10月～25年9月
タイ			25年1月～12月	
インド	24年4月～25年3月		24年10月～25年9月	
ベトナム			25年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。  
 例えば、2024/25年度は、米国の小麦では2024年6月～2025年5月、ブラジルのとうもろこしでは2025年3月～2026年2月です。  
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。  
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国

1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
------------	-----	-----	-----

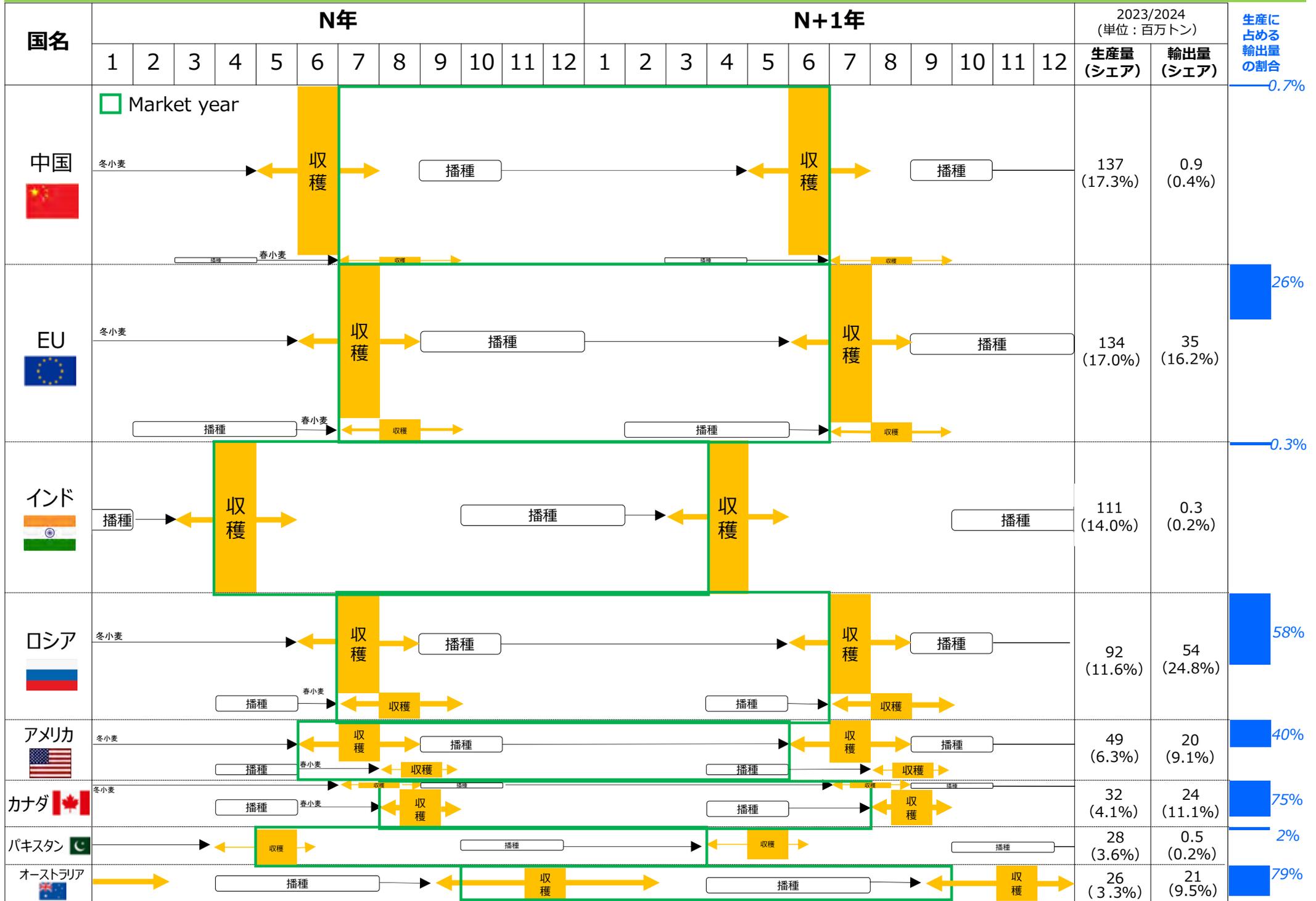
1斤	500g	重量	中国
----	------	----	----

華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			
---------------------------------------------------------------	--	--	--

(参考3)各国のクロープカレンダー一覧(主要品目毎)

# 主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



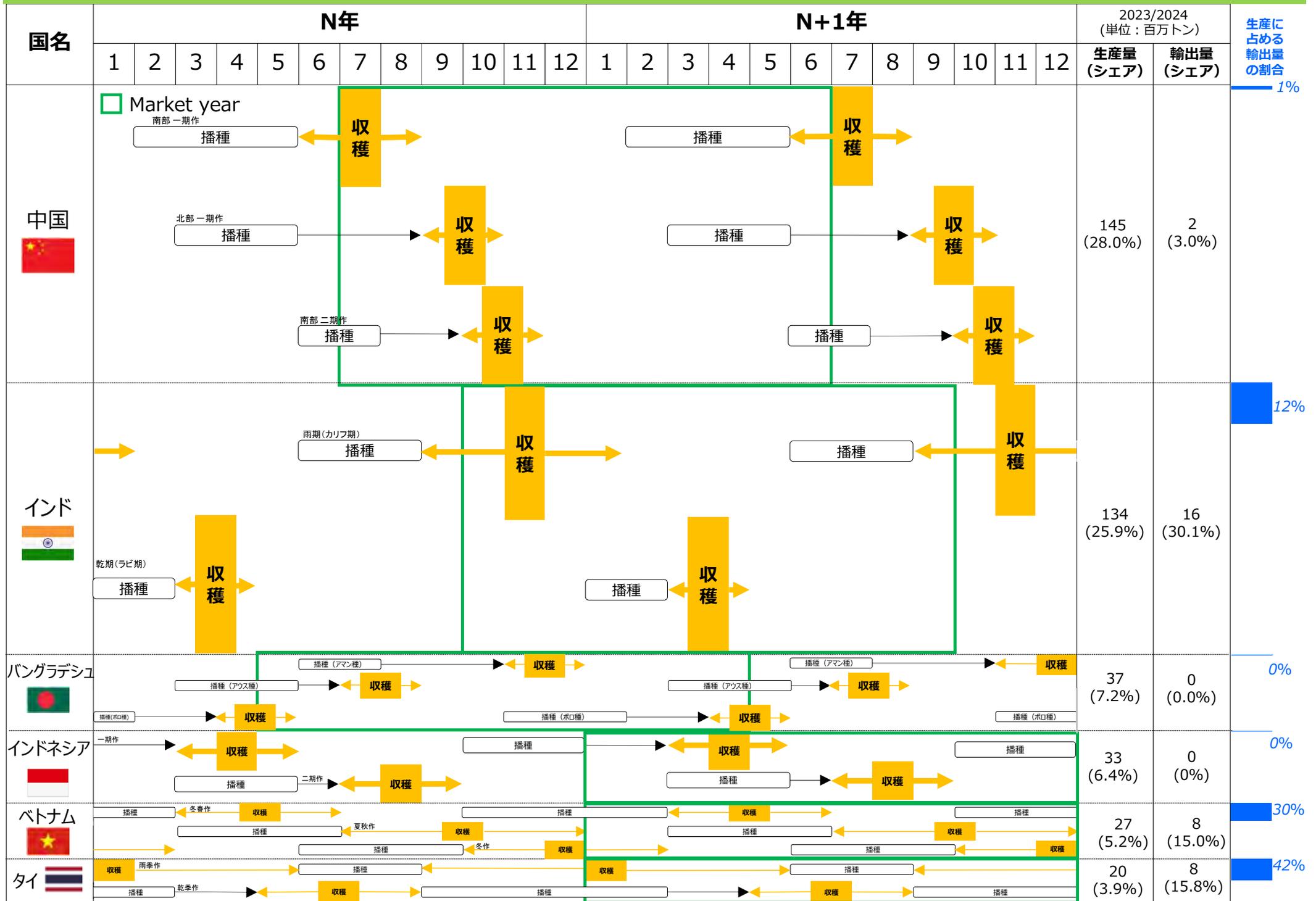
資料: AMIS [Supply and demand balances manual]、USDA [Crop Calendars]、[PS&D] (2024.5)

注: シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。  
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他: 生産に占める輸出量の割合

# 主要生産国のクロープカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

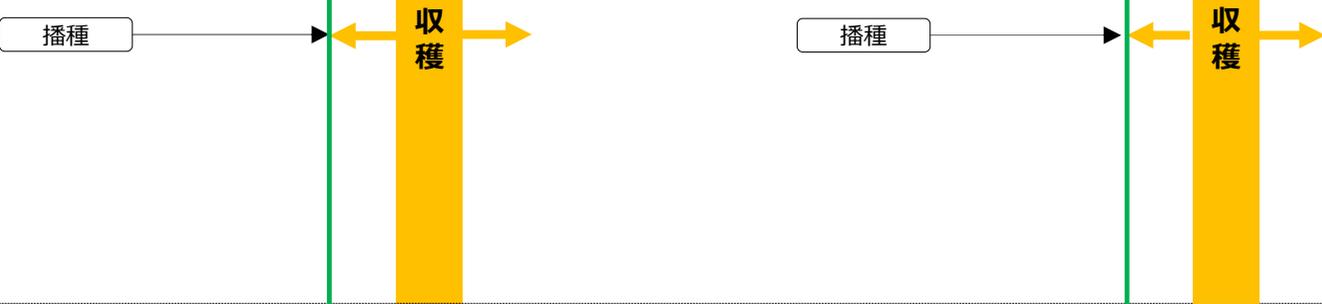
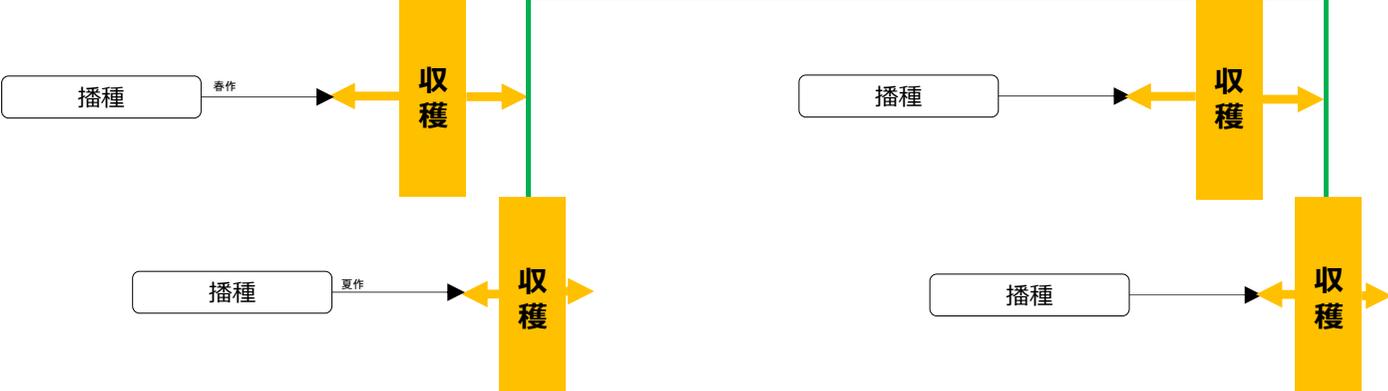
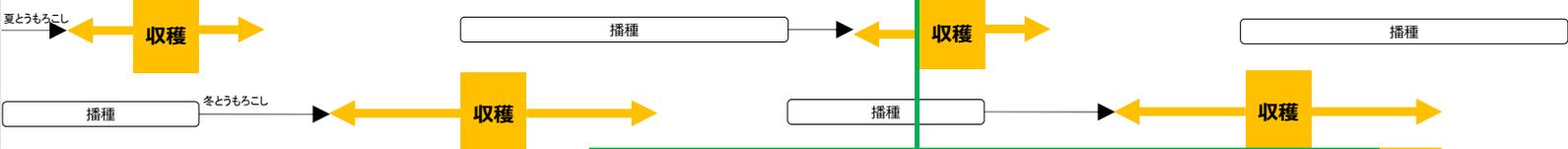


資料: AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「Crop Calendar」、「PS&D」(2024.5)

注: シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。 その他: 122 (23.5%) 19 (36.1%)

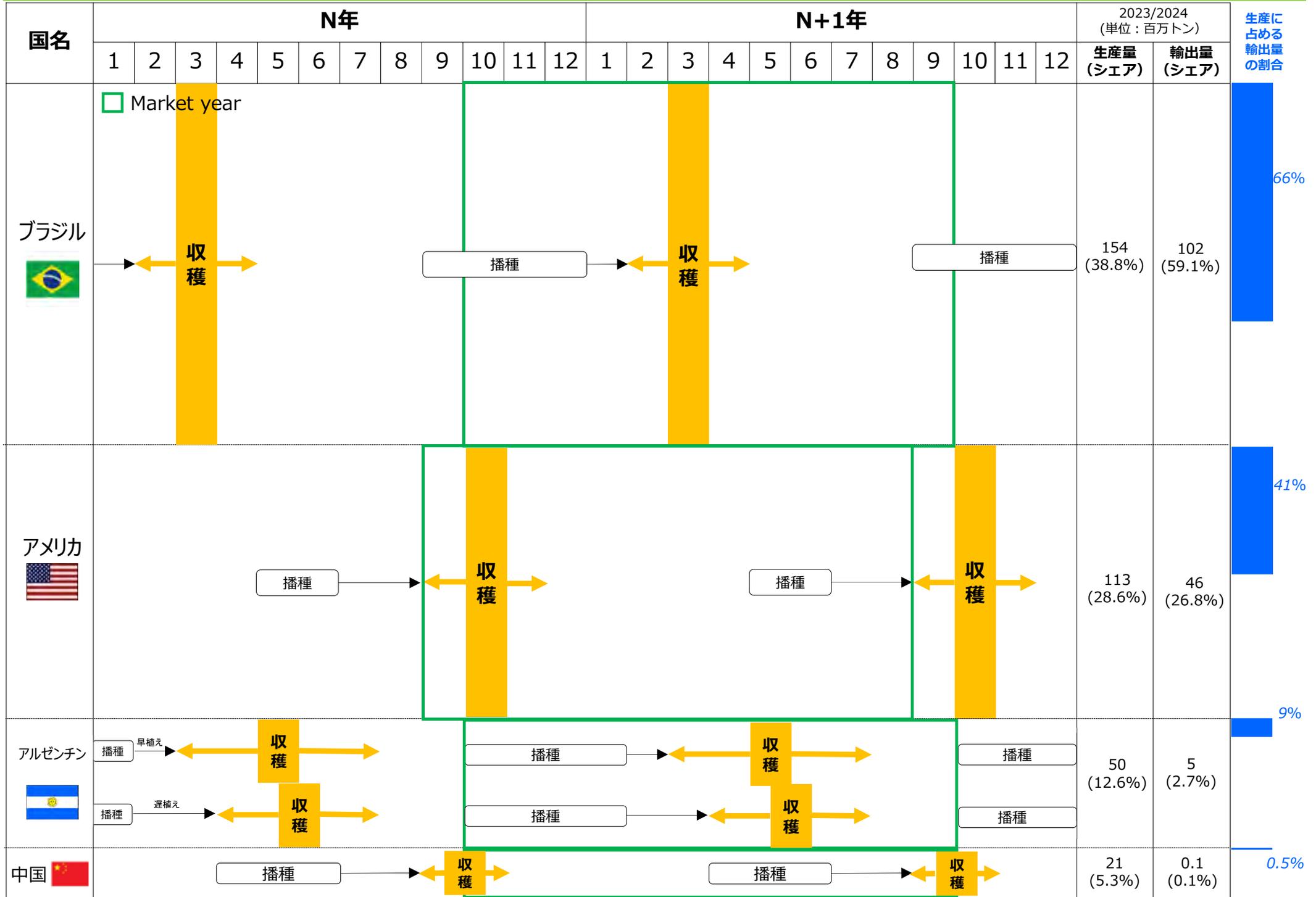
# 主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2023/2024 (単位:百万トン)		生産に占める輸出量の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
アメリカ 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> <span style="border: 1px solid green; display: inline-block; width: 10px; height: 10px; margin-right: 5px;"></span> Market year                 </div> 												390 (31.7%)	55 (27.7%)	14%												
中国 													289 (23.5%)	0 (0.0%)	0%												
ブラジル 													122 (9.9%)	50 (25.3%)	41%												
EU 													61 (5.0%)	4 (2.1%)	7%												
アルゼンチン 													53 (4.3%)	38 (19.3%)	72%												
インド 													38 (3.1%)	0.8 (0.4%)	2%												
資料 : AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「PS&D」 (2024.5) 注 : シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。																							276 (22.5%)	50 (25.2%)	その他 :		

# 主要生産国のクロープカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料 : AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「PS&D」 (2024.5) 注 : シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。 その他 :

59  
(14.8%)      20  
(11.3%)

# 主要生産国のクロープカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2023/2024 (単位：百万トン)		生産に 占める 輸出量 の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
EU 	Market year						収穫	播種					収穫	播種					20 (22.6%)	0.6 (3.3%)	3%						
カナダ 						播種	収穫					播種	収穫					19 (21.3%)	7 (39.3%)	35%							
中国 	収穫						播種	収穫				播種					15 (17.4%)	0 (0%)	0%								
インド 	収穫						播種	収穫				播種					13 (14.1%)	0 (0%)	0%								
オーストラリア 						播種	収穫					播種	収穫					6 (6.4%)	5 (27.6%)	81%							
ウクライナ 	収穫		播種					播種	収穫					播種	収穫	播種					4 (5.0%)	3 (20.5%)	78%				
ロシア 						播種	収穫					播種	収穫					4 (4.8%)	0.8 (4.8%)	19%							

資料：USDA「Crop Calendar」、「PS&D」(2024.5)

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している

その他：7 (8.4%) 0.7 (4.5%)

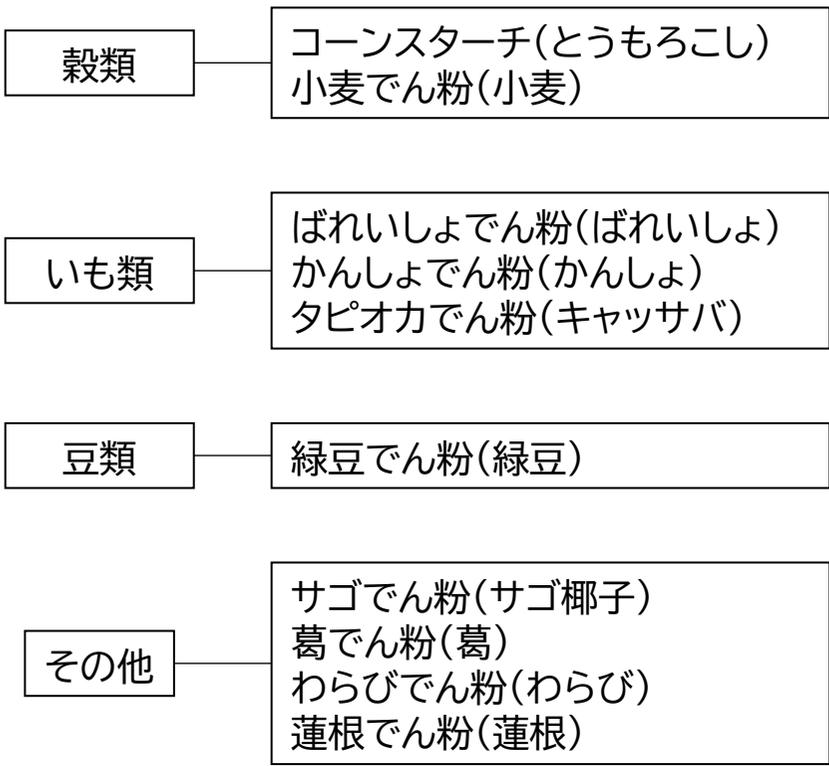
## 第44号特別分析トピック:我が国と世界のでん粉をめぐる動向

## 我が国と世界のでん粉をめぐる動向<基礎編>

## でん粉の種類・特性

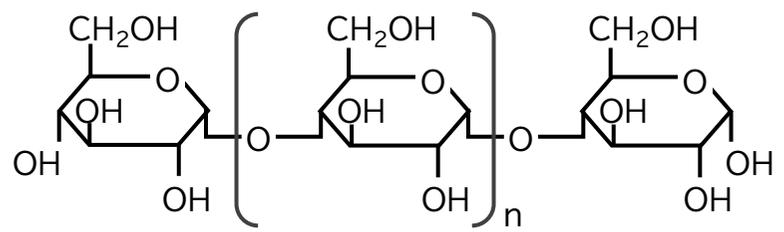
- でん粉は、植物の光合成により作られる炭水化物(多糖類)の一種。
- でん粉は種類によって特性が異なるため、目的に合わせて使い分けられている。

### でん粉の種類



### でん粉の特性

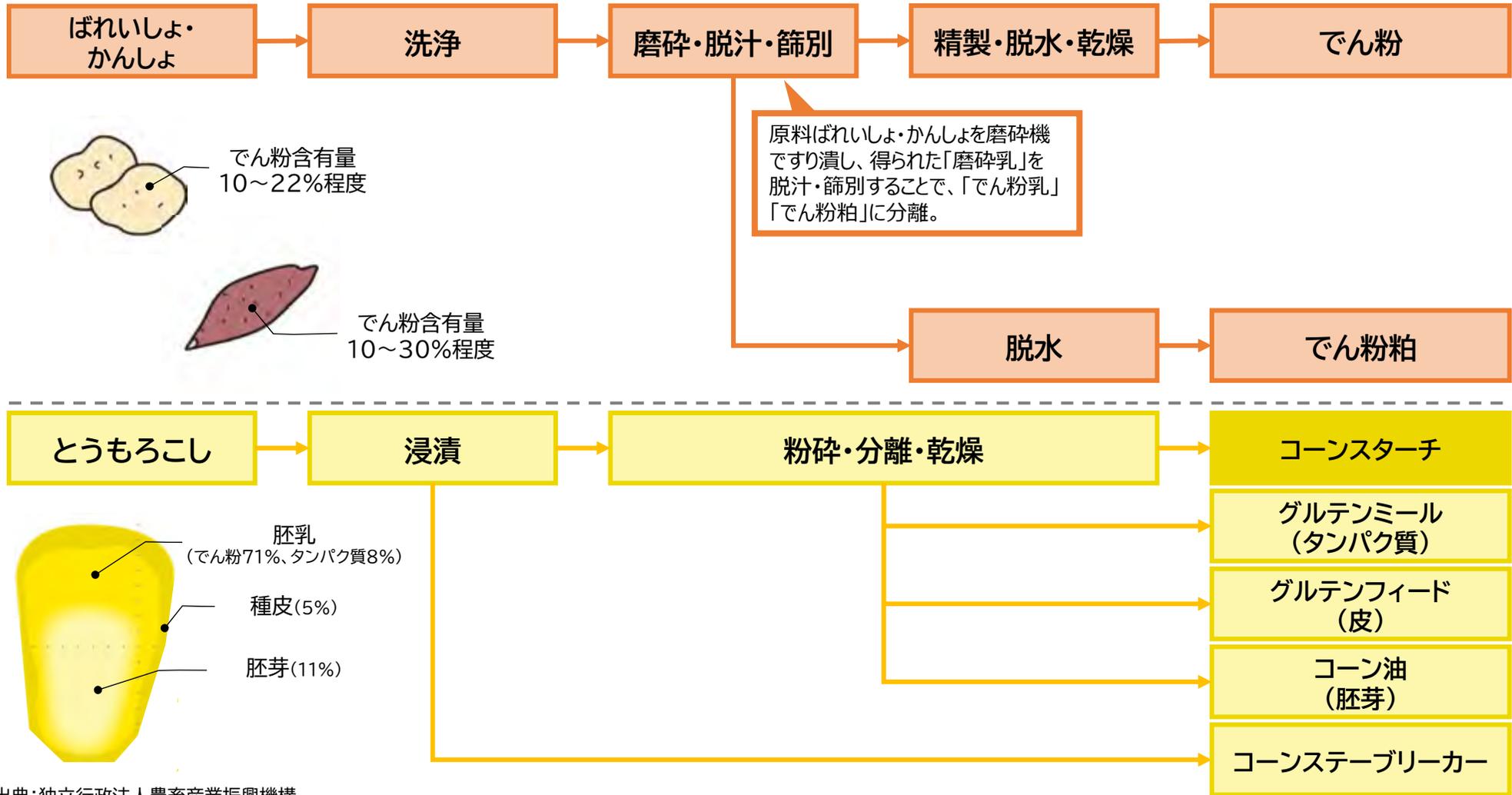
種 類	特 性	主 な 用 途
コーン スターチ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・粒径が小さく、リンを含有していないため、糖化製品の原料として使いやすい。</li> <li>・糊化した際の粘度の安定性が良く、接着力、粘液の浸透性が高い。</li> </ul>	糖化製品、製紙・段ボール、ビール
ばれいしょ でん粉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・糊化温度が最も低く、透明度が高い。</li> <li>・粒が大きく、熱を加えてのりにした場合の粘性が大きいため、水の吸収力が高く、保水性に優れている。</li> </ul>	片栗粉(揚げ物や中華料理のとろみ付け)、練製品(ちくわ、かまぼこ等)、麺類(即席麺)
タピオカ でん粉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リンを含有していないため、糖化製品の原料として使いやすい。</li> <li>・老化性が低い(時間が経過しても製品の弾力感が損なわれにくい)ため、加工食品の原料として使いやすい。</li> </ul>	糖化製品、冷凍食品、接着剤



# でん粉の製造工程

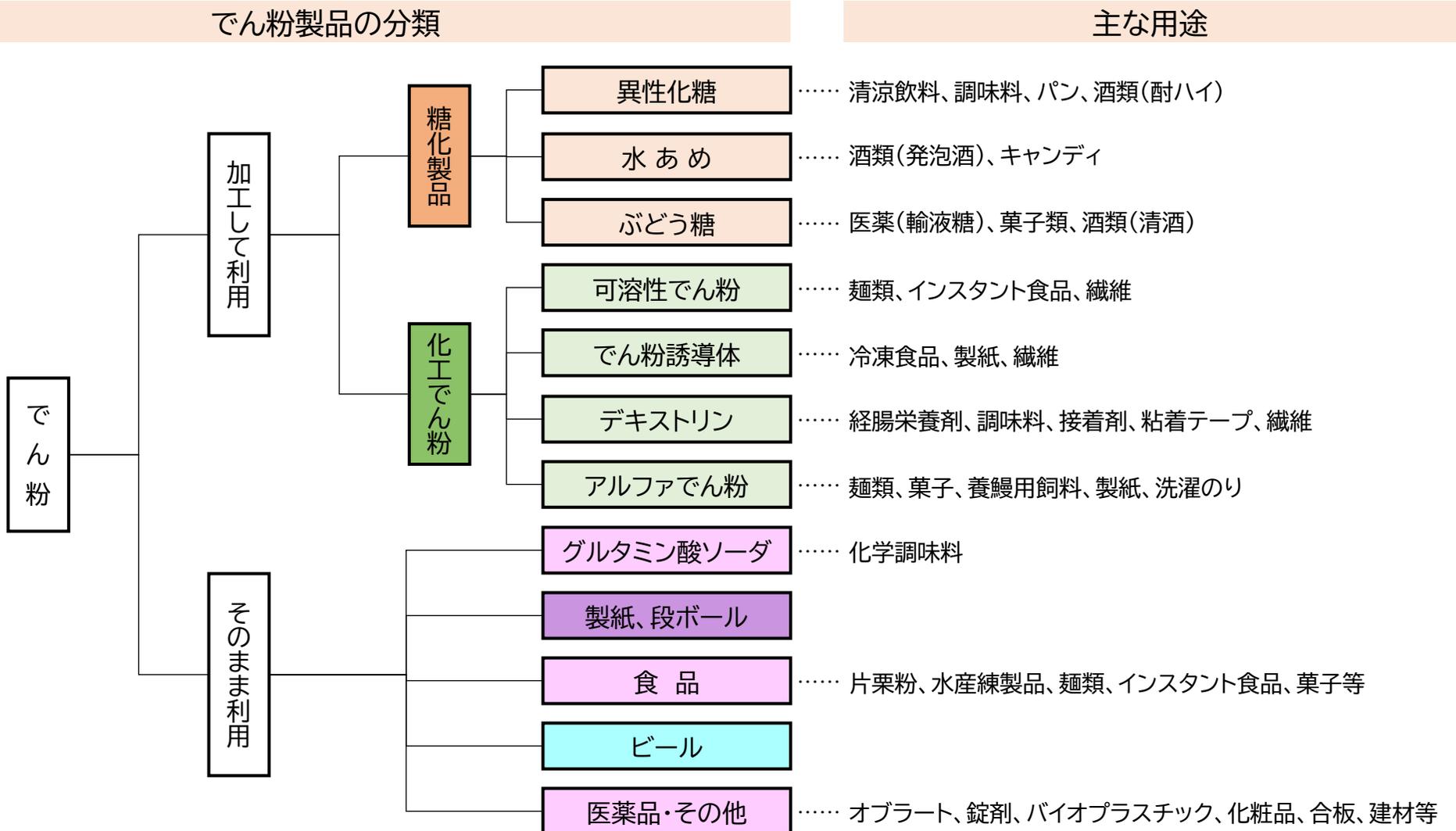
- ばれいしょ・かんしょでん粉の製造工程について、原料の形状、栄養成分等が異なるため、処理工程の操作等には大きな差異が生じるものの、基本工程は共通。
- コーンスターチの製造工程について、約7割がコンスターチとなるほか、副産物としてコーン油や飼料等として活用。

## でん粉の製造工程(概要)



# でん粉の用途

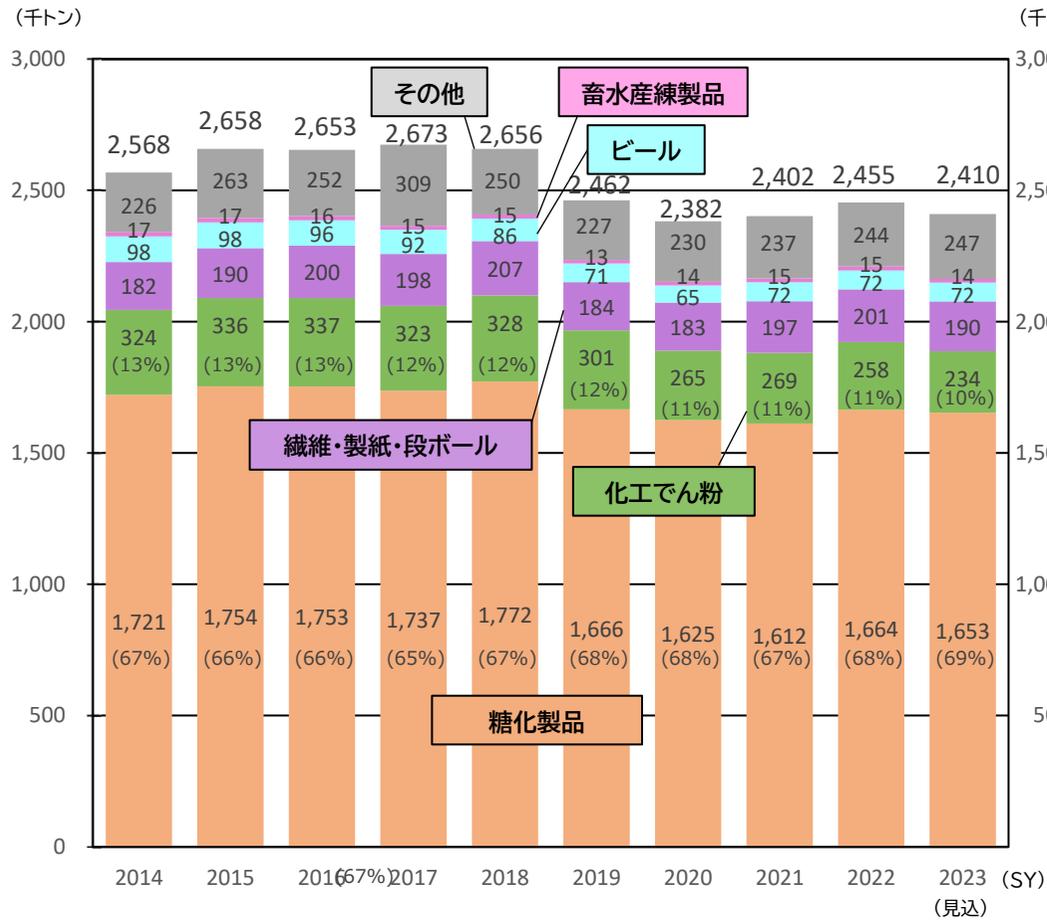
○ でん粉の用途は、糖化製品や化工でん粉の原料として利用されるほか、製紙・段ボール、片栗粉、水産練製品などの食品、ビール、医薬品等多くの用途に使用。



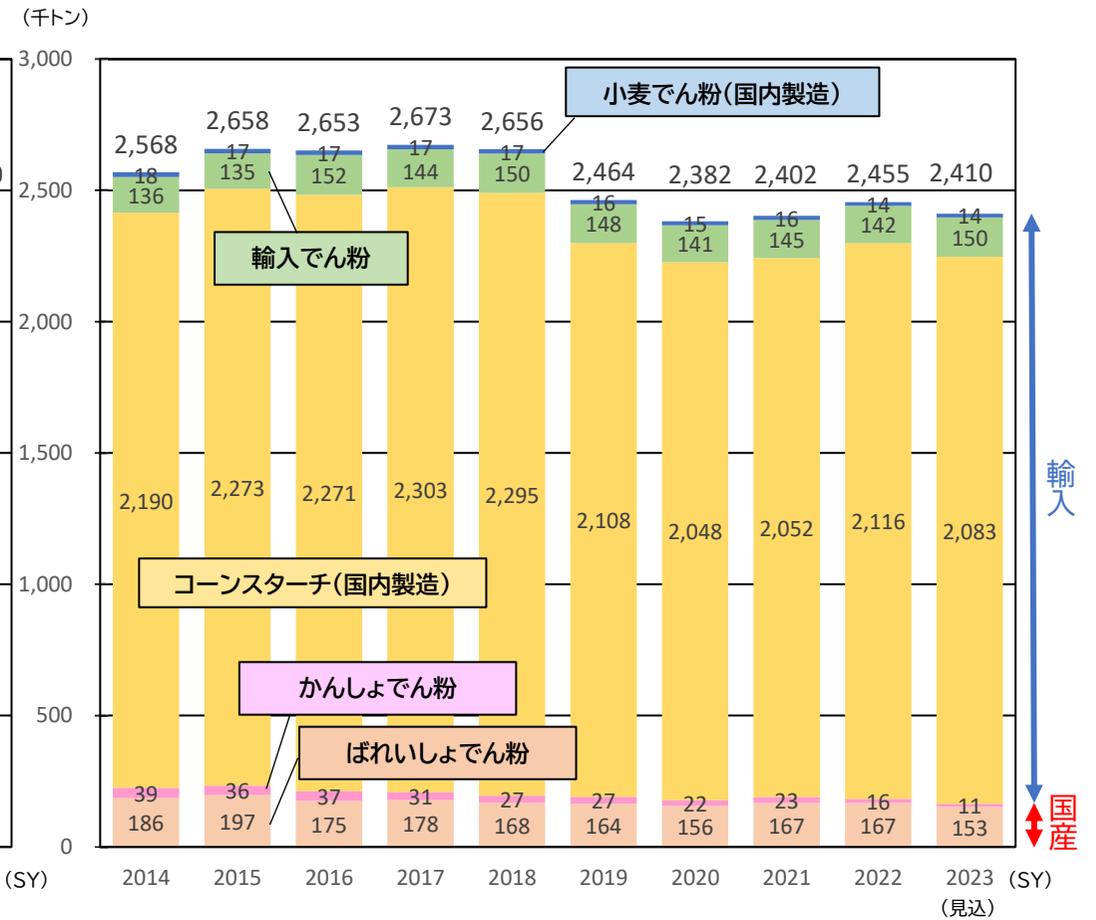
# 我が国におけるでん粉の需給動向

- でん粉の用途別需要量は、糖化製品(異性化糖、水あめ等)が約7割を占める。
- でん粉の供給量は、コーンスターチ(国内で輸入とうもろこしから製造)が約210万トン、国産いもでん粉が約16~17万トン、輸入でん粉が約14~15万トン、小麦でん粉(国内で輸入小麦から製造)が約1万トン。

## でん粉の需要量の推移



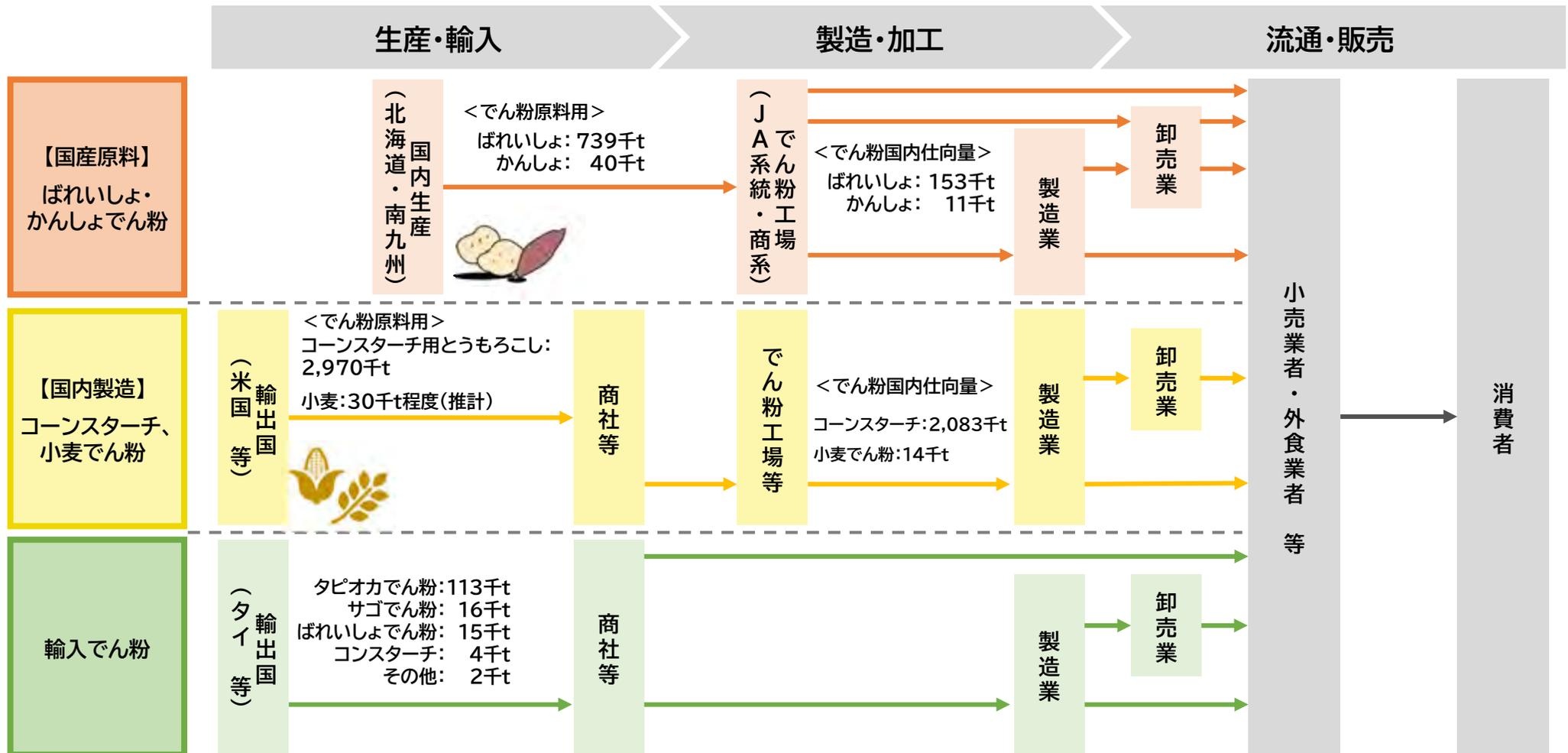
## でん粉の供給量の推移



資料:農林水産省「でん粉の需給見通し」  
注:SYはでん粉年度(10月~翌9月)。

# 主なでん粉の流通構造

- 国産原料により製造されるいもでん粉は、主産地である北海道・南九州で生産された「ばれいしょ」「かんしょ」を、生産地にある工場にて製造。コーンスターチは、米国、ブラジルから原料用とうもろこし(デントコーン)を輸入し、臨海部に立地している国内工場にて製造。
- 「片栗粉」として消費者が直接使用するほか、副原料として約1千種類を超える商品に利用。



出典:農林水産省「令和4年度いも・でん粉に関する資料」、独立行政法人農畜産業振興機構「北海道産でん粉原料用ばれいしょ生産振興の取り組み」、農林水産省「でん粉の需給見通し」、財務省「貿易統計」。ばれいしょ・かんしょ原料の流通量は北海道・南九州の生産量を記載。

## 我が国と世界のでん粉をめぐる動向<国内編(生産・製造・流通)>

# でん粉の原料と産地

- 国内で生産・製造されるでん粉は、「ばれいしょ」、「かんしょ」が原料作物。これらは生産者所得の安定化とともに、地域農業、地域経済上も重要な役割。
- ばれいしょは、冷涼な気候に適しているため、北海道の基幹作物の一つであり、輪作体系を維持する上でも重要。
- かんしょは、台風常襲地域である上に、作付けに不向きな作物の多いシラス(火山灰)土壌に適しており、鹿児島を中心に南九州において他に代替のない基幹作物。

## ばれいしょ

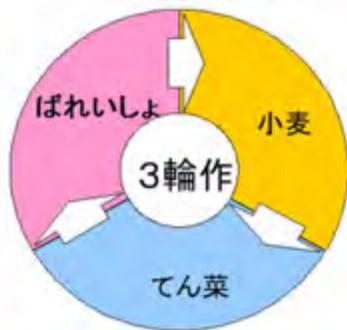
【ばれいしょの位置づけ】(北海道:2023年度)

総農家数に占めるばれいしょ農家戸数の割合(注1)	畑面積に占めるばれいしょ栽培面積の割合(注2)
29%	5%

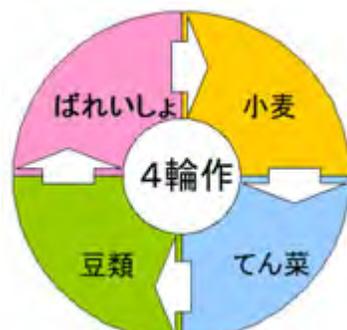
注1:北海道調べ。カッコ内の値は、農林水産省統計部「2020年農林業センサス」の総農家数に占める割合。  
2:農林水産省統計部「作物統計」。カッコ内の値は、普通畑の面積に占める割合。

【北海道畑作物の輪作体系の例】

(オホーツク)



(十勝)



【輪作のメリット】

- ① 病虫害発生の抑制
- ② 収量の低下を防ぐ
- ③ 肥料・農薬の使用量低減
- ④ 複数の作物を作ることにより、作業のピークをずらせる

## かんしょ

【かんしょの栽培概要(青果・加工用含む)】(鹿児島県:2023年産)

総農家数に占めるかんしょ農家戸数の割合(注1)	畑面積に占めるかんしょ栽培面積の割合(注2)
22%	13%

注1:農林水産省「2020年農林業センサス」の総農家数に占める割合。栽培農家数は鹿児島県調べ。  
2:農林水産省「作物統計」。

【かんしょの作物特性】

かんしょは地上部が大きな被害を受けたとしても、地中でいもが生育するため、ある程度の収穫量が見込めるほか、以下の特徴を有する。

- ① 酸性土壌に強い。
- ② 地中でいもが腐敗しやすいため、水はけの良い土壌を好む。
- ③ 土壌養分が多いと茎葉の生育が旺盛になり、いもの肥大が劣る「つる(蔓)ぼけ」が起こりやすいので、やせた土壌を好む。



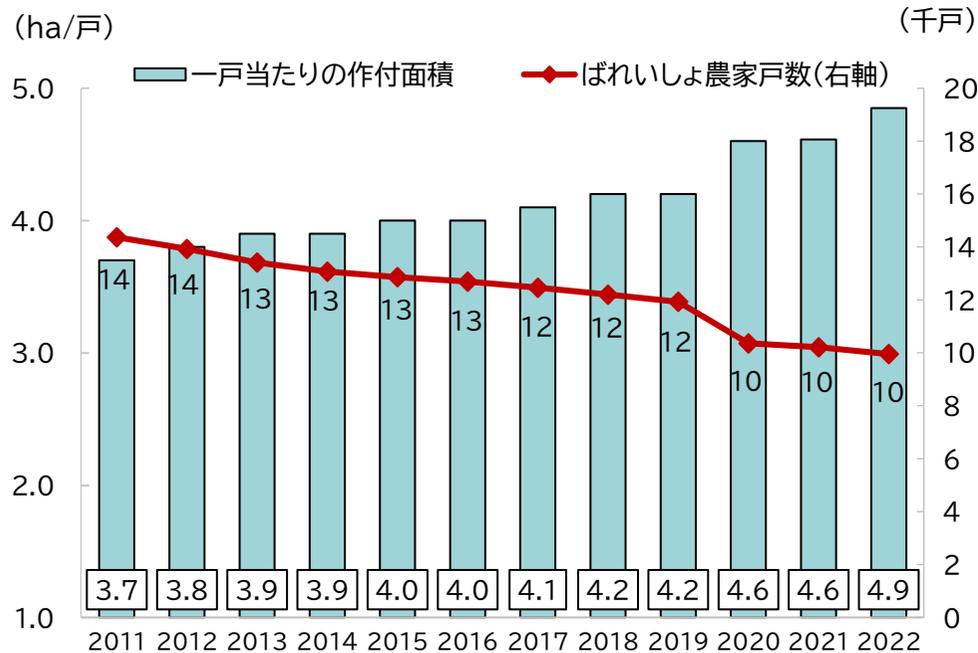
【シラス土壌の特徴】

- ① 酸性が強い。
- ② 軽石や火山灰からできているため、水はけが良すぎて保水性が低い。
- ③ 土壌養分が乏しく、かんしょ以外の作物には極めて不適。

## でん粉原料用ばれいしよの生産動向

- 主産地の北海道では、農家戸数の減少が進んでおり、一戸当たりの作付面積が拡大傾向。
- 一方、ばれいしよは労働負荷が高いことにより作付面積は長期的に減少傾向であり、でん粉原料用ばれいしよの生産量も減少傾向。
- 2023年産の原料用ばれいしよは、8月後半以降、高温が続いたため、でん粉含有率(ライマン価)が直近10年での最低水準。

農家戸数と一戸当たり作付面積の推移(北海道)



資料:北海道調べ

作付面積、単収、生産量の推移(北海道)

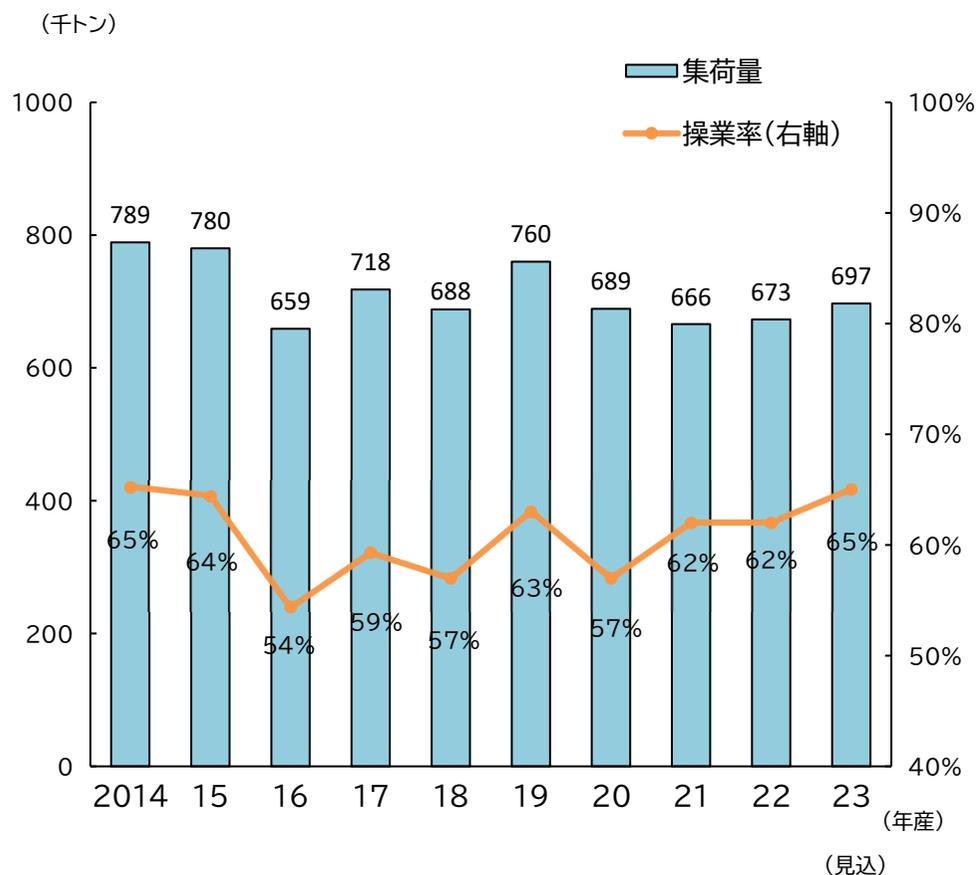
	作付面積 (ha)	単収 (kg/10a)	生産量 (千t)	うちでん粉原料用 (千t)	ライマン価 (%)
2014	51,500	3,720	1,916	849	20.1
2015	51,000	3,740	1,907	836	19.9
2016	51,200	3,350	1,715	701	19.2
2017	51,300	3,670	1,883	783	20.7
2018	50,800	3,430	1,742	745	20.3
2019	49,600	3,810	1,890	821	19.6
2020	48,100	3,600	1,733	740	19.8
2021	47,100	3,580	1,686	706	19.1
2022	48,500	3,750	1,819	727	19.2
2023 (概算)	48,500	3,980	1,930	739	18.1

資料:作付面積、単収及び生産量は統計部「作物統計」。  
でん粉原料用の生産量及びライマン価は地域作物課調べ。ライマン価は商系工場を除く。

## ばれいしょでん粉工場の状況

○ ばれいしょでん粉の生産量減少に対応し、ばれいしょでん粉工場の操業率向上のため、工場再編の取組が進められ、現在、北海道においてでん粉工場は15工場が立地。

ばれいしょでん粉工場の集荷量と操業率の推移



資料：集荷量は北海道庁調べ、操業率は地域作物課調べ

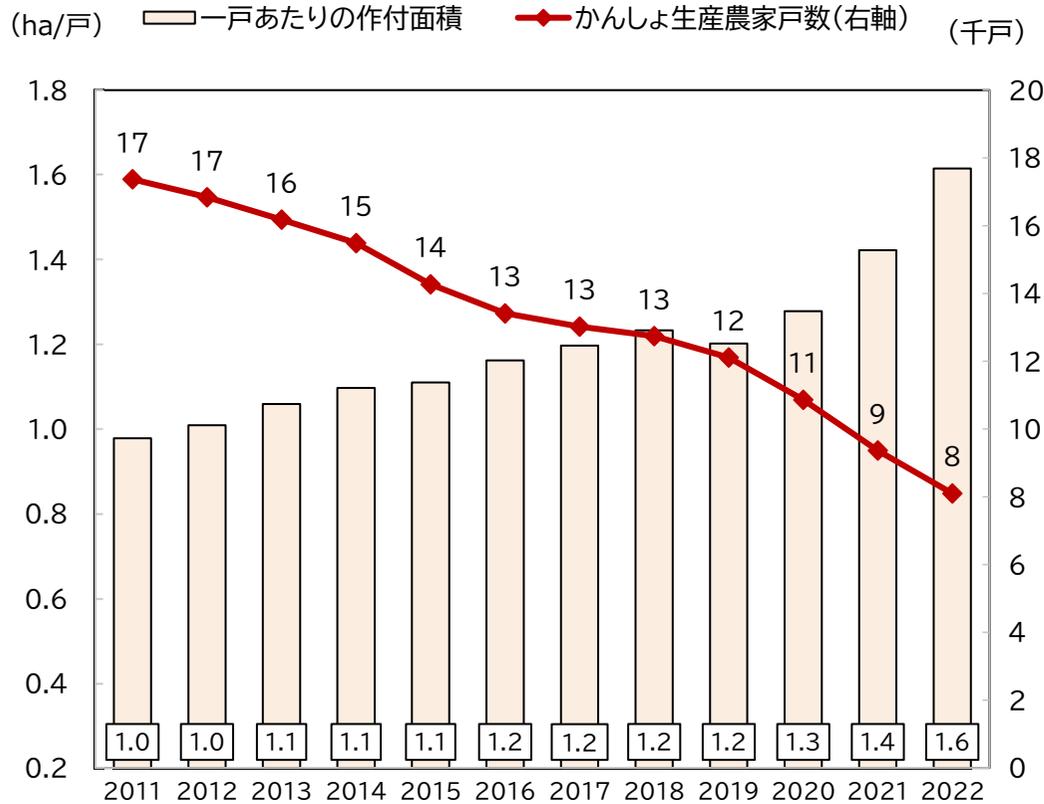
ばれいしょでん粉工場の立地(北海道15工場)



## でん粉原料用かんしょの生産動向

- 南九州においては、高齢化の影響により農家戸数は減少傾向。農家一戸当たり作付面積は微増傾向にあるものの、依然として1ha未満の零細規模の農家も多く存在。
- また、でん粉原料用のかんしょについては、作付面積の減少傾向に加え、単収は、サツマイモ基腐病の影響により、近年、低水準。2023年産の生産量は、作付面積の減少等により過去最低の4.0万トン。

農家戸数と一戸当たり作付面積の推移(南九州)



資料：鹿児島県、宮崎県調べ

でん粉原料用の作付面積、単収、生産量の推移(南九州)

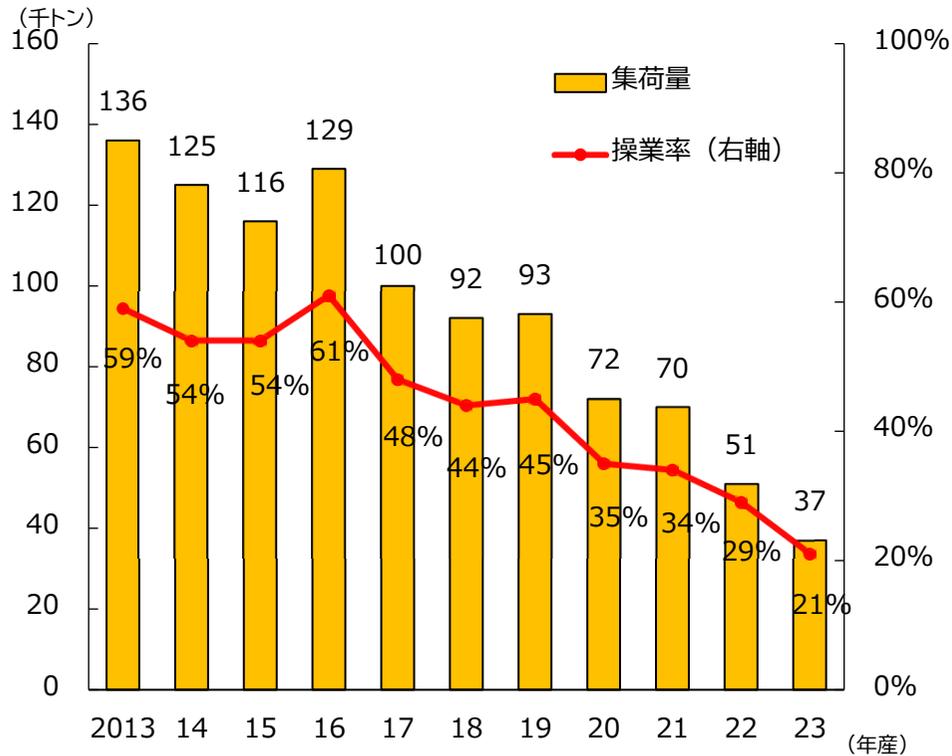
年	作付面積 (ha)	単収 (kg/10a)	生産量 (千t)
2013	5,140	2,810	144.2
2014	4,960	2,660	131.7
2015	4,870	2,490	121.4
2016	4,930	2,740	135.0
2017	4,410	2,360	104.1
2018	4,370	2,190	95.8
2019	4,500	2,180	98.0
2020	4,180	1,830	76.3
2021	4,230	1,790	75.9
2022	2,560	2,150	55.0
2023	1,850	2,170	40.2

資料：農林水産省統計部「作物統計」。

# かんしょでん粉工場の状況

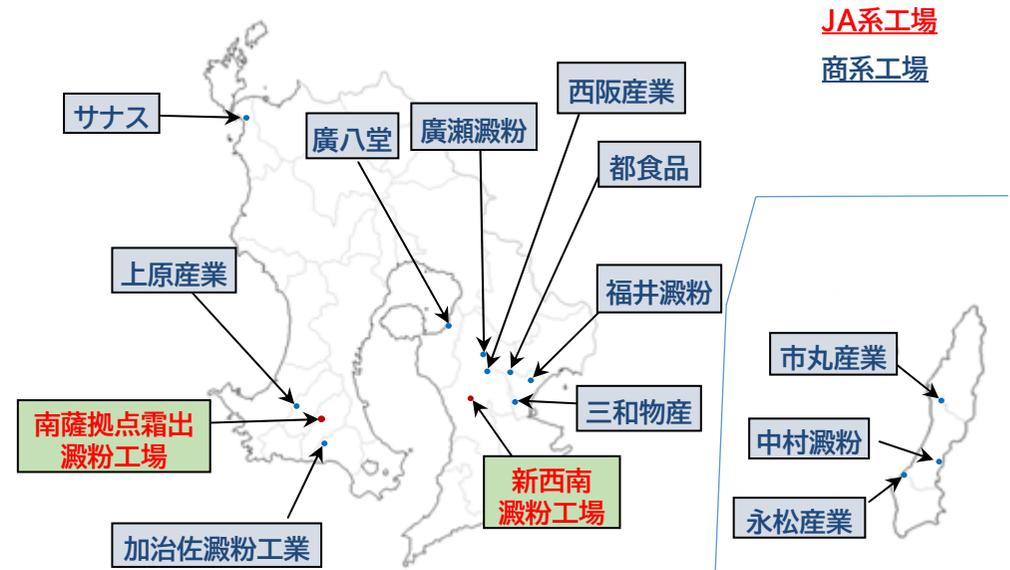
- かんしょでん粉工場の操業率は、原料用かんしょの生産量の減少により大きく低下しており、2023年度は21%と過去最低。
- このため、工場再編の取組が進められ、現在、鹿児島県に14工場が立地。

かんしょでん粉工場の集荷量と操業率の推移



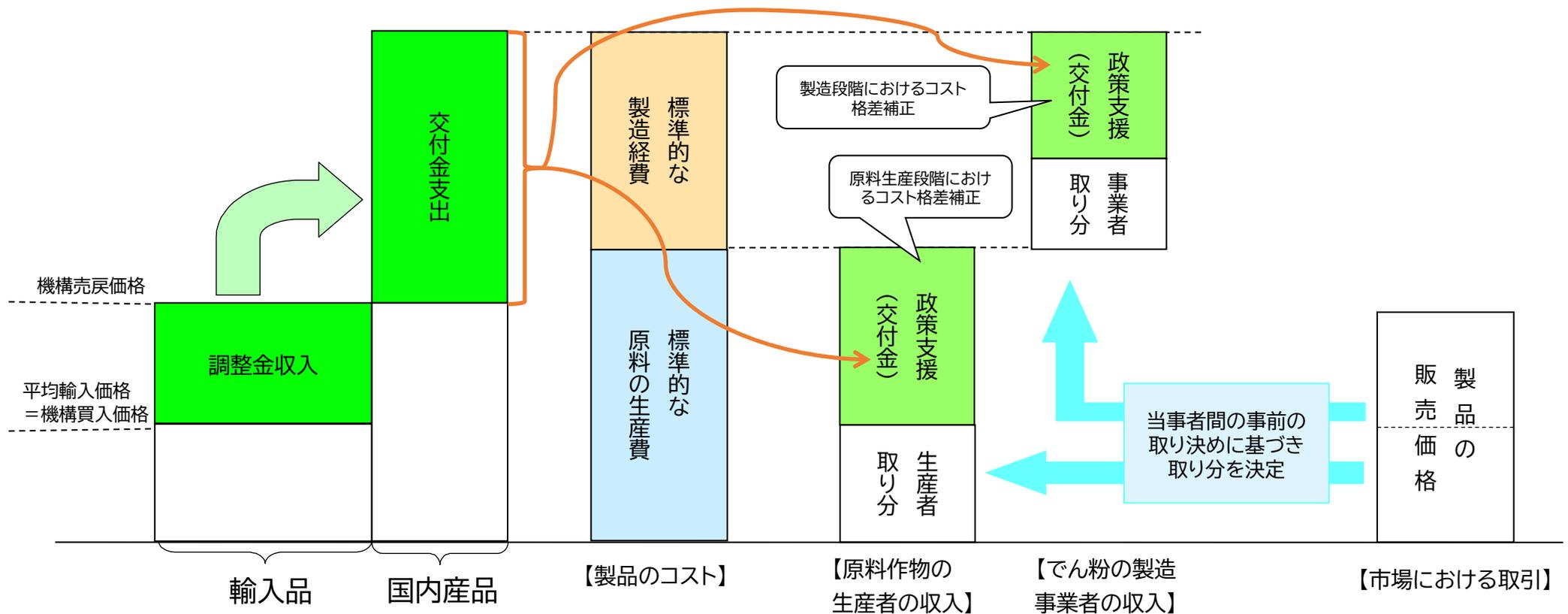
資料：集荷量は鹿児島県庁調べ、操業率は地域作物課調べ

かんしょでん粉工場の立地(鹿児島県14工場)



## (参考)国内におけるでん粉制度

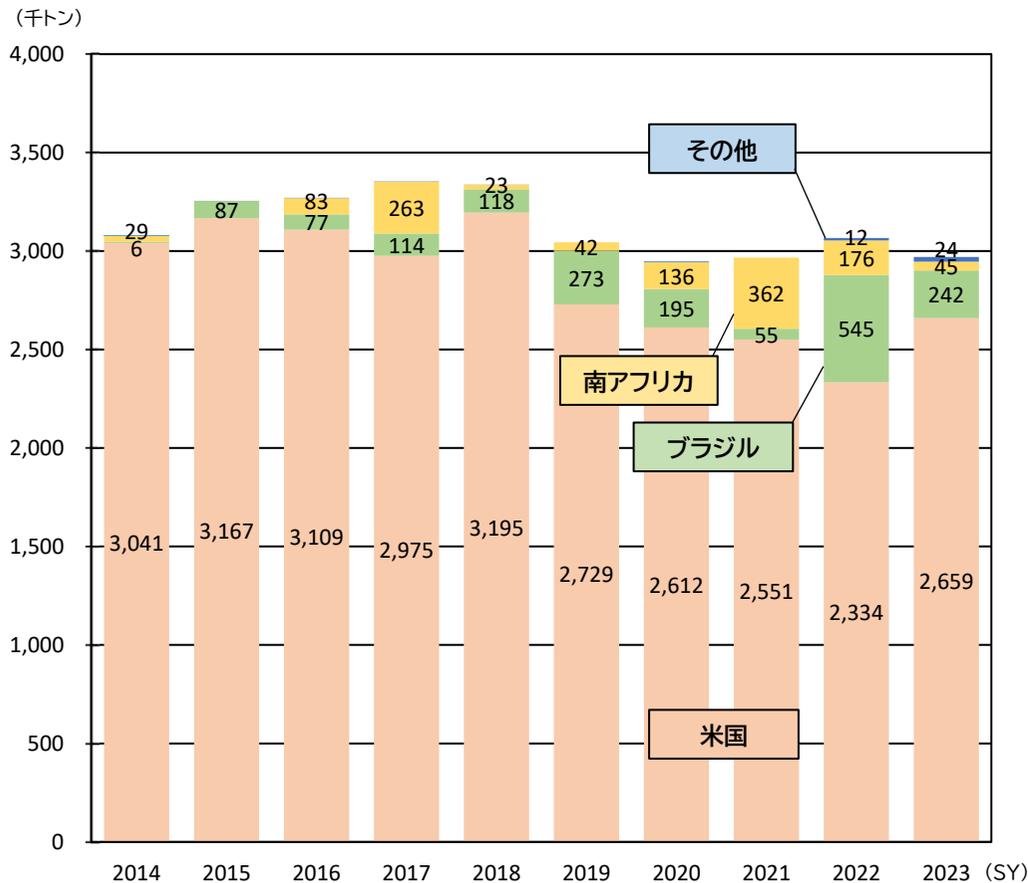
- でん粉については、価格調整制度の下、コーンスターチ用輸入とうもろこしを原料として製造されるコーンスターチ等と国内産いもでん粉との内外コスト格差を是正するため、
  - ① コーンスターチ用輸入とうもろこし等から調整金を徴収するとともに、
  - ② これを主な財源として、生産者及び製造事業者に対し、生産・製造経費と製品の販売価格との差額相当分の交付金を交付する政策支援を実施している。
- 原料作物の取引価格(販売価格のうち、生産者の取り分)は、生産者と製造事業者との事前の取り決めに基づき、当事者間で決めた比率によって、製品の販売価格を分配する方式(収入分配方式)により形成。



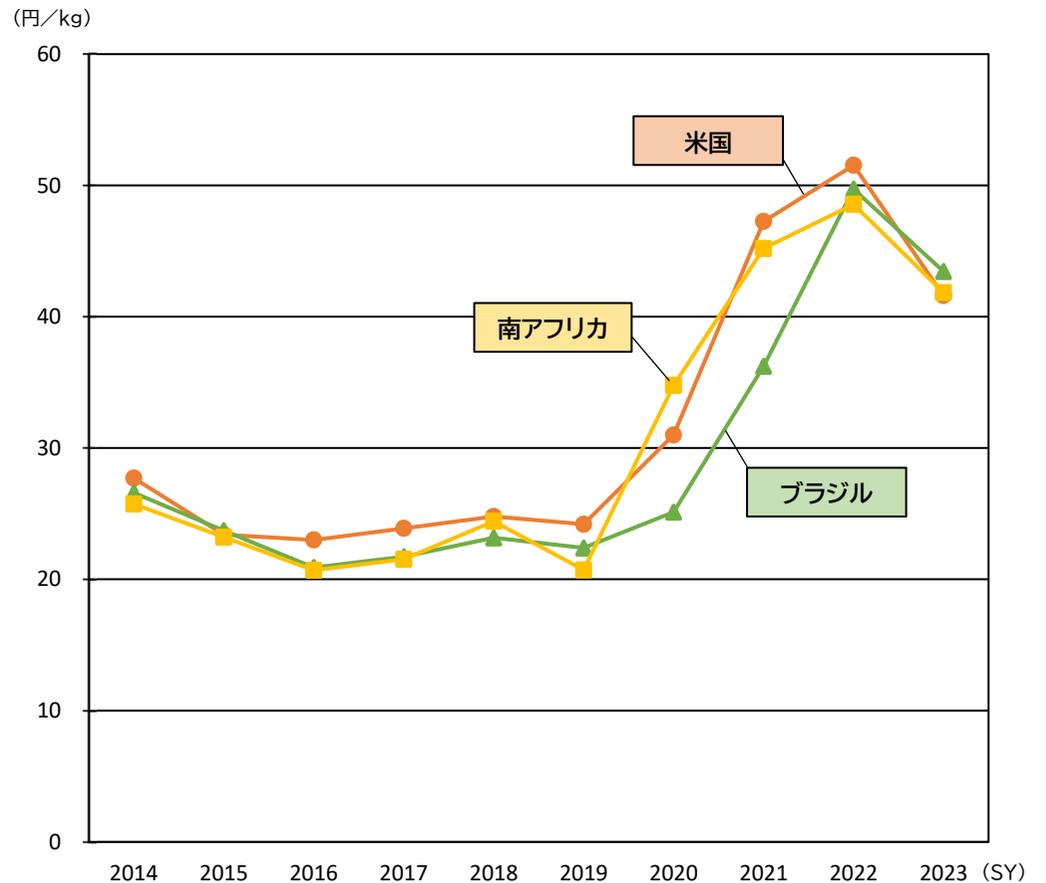
## コーンスターチ用とうもろこしの輸入動向

- コーンスターチ用とうもろこしの輸入量は、新型コロナによる経済活動の停滞等の影響により減少し、影響前の水準には戻っていない状況。
- 国別では、米国产が大半を占めているが、長期的には、ブラジルの生産量増加により、ブラジル産のシェアが拡大傾向。22SYはブラジルでの豊作でブラジル産が増加し、23SYは米国での豊作で米国产が増加。
- 近年の輸入価格は国際相場や記録的な円安を背景に上昇傾向で推移。23SYは米国での豊作等により、4年ぶりに低下。

コーンスターチ用とうもろこしの輸入量の推移



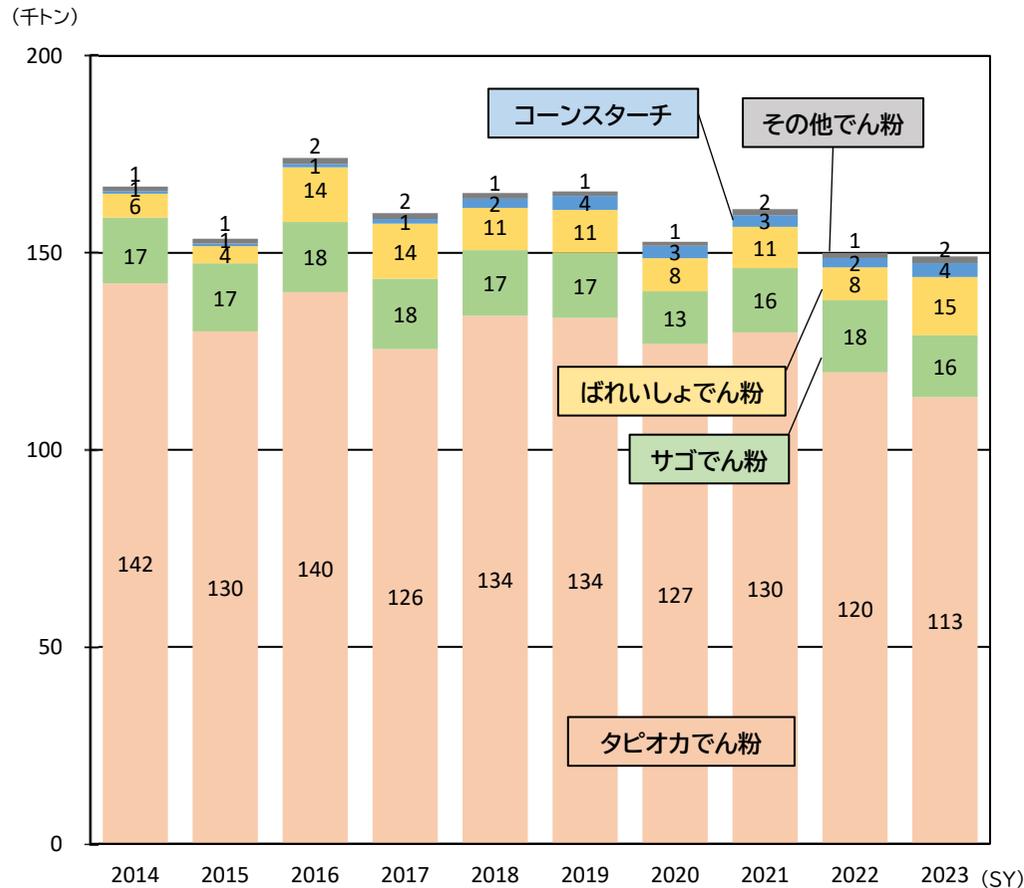
コーンスターチ用とうもろこしの輸入価格(CIF)の推移



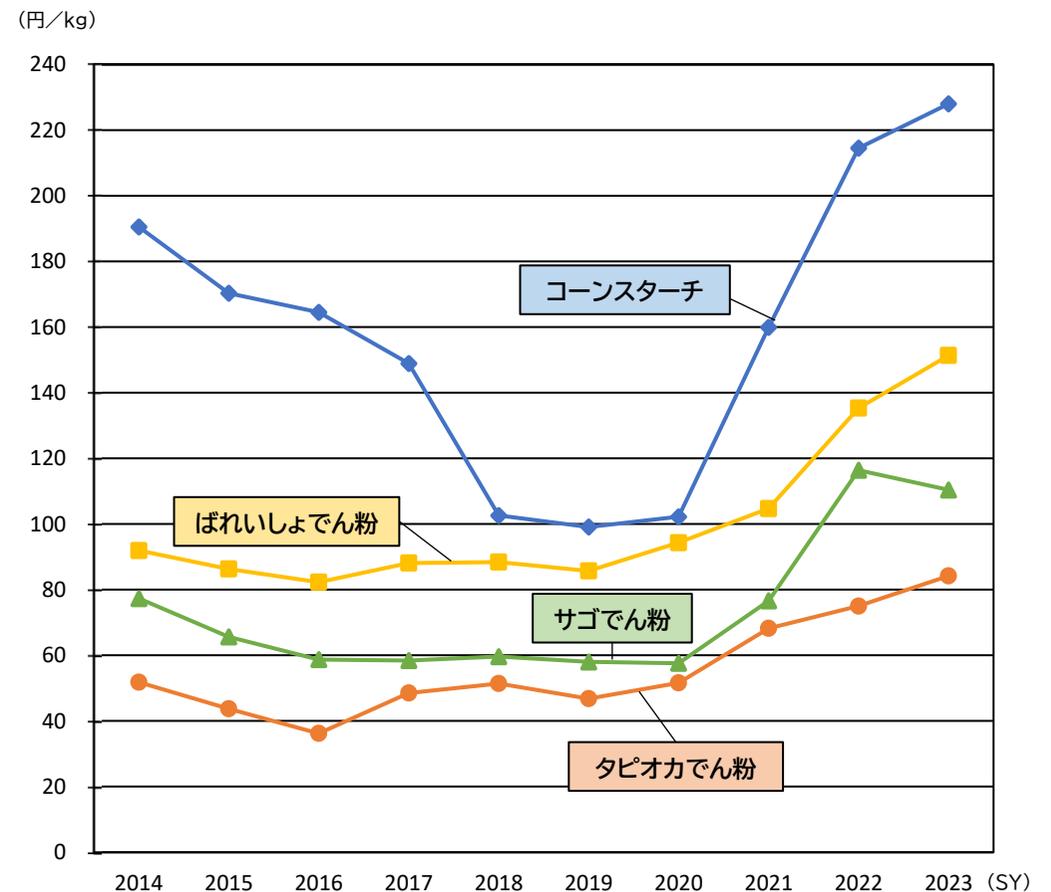
## 輸入でん粉の動向

- でん粉の輸入量は、関税割当により、用途に応じた必要量が輸入されており、概ね安定して推移。23SYは、タイでの不作等によりタピオカでん粉の輸入量が減少。同年産の国産の原料用ばれいしょのでん粉含有率が低かったこと等から、ばれいしょでん粉の輸入量が増加。
- 近年の輸入価格は、記録的な円安等を背景に上昇傾向で推移。

### でん粉の輸入量の推移



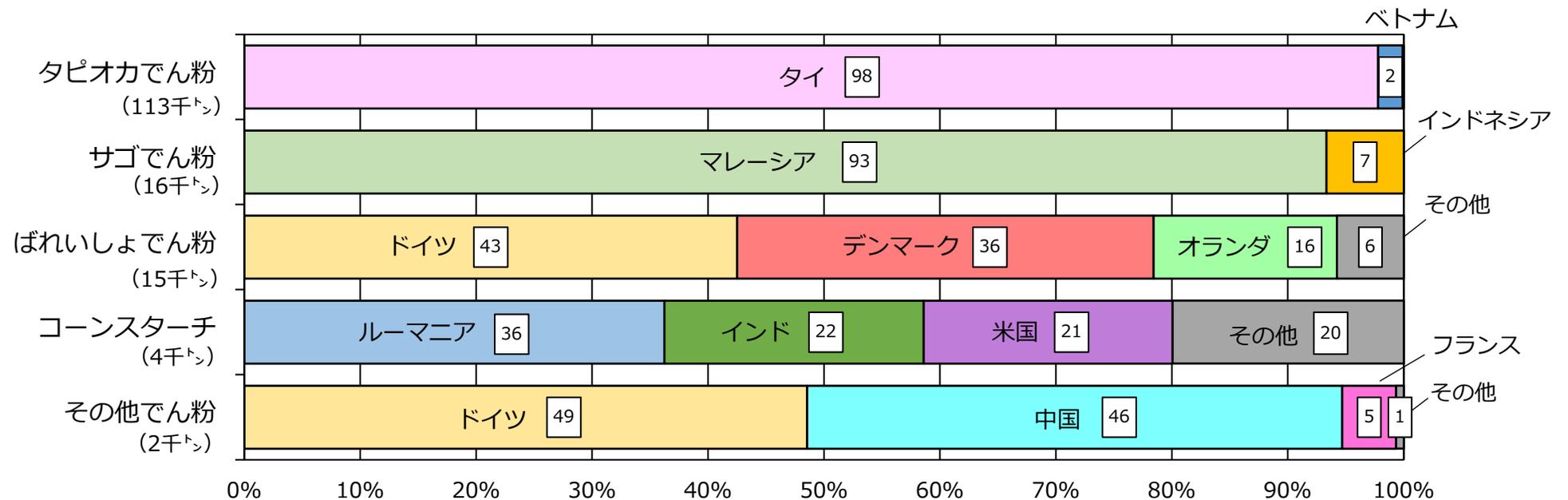
### でん粉の輸入価格(CIF)の推移



## 輸入でん粉の国別シェア

- 輸入でん粉の国別シェアを見ると、最も輸入量が多いタピオカでん粉は、主にキャッサバの主要生産国であるタイから輸入。
- サゴでん粉は、主にサゴヤシの主要生産国であるマレーシア(サゴヤシの大半がボルネオ島サラワク州で生産)から輸入。
- ばれいしょでん粉は、主にばれいしょでん粉の生産が盛んな欧州から輸入。
- コーンスターチは、日本国内での製造量が多いデントコーン、ワキシーコーン以外(ハイアミロースコーン等)のコーンスターチを中心にルーマニア等から輸入。
- その他でん粉は、主にドイツからエンドウ豆でん粉、中国からエンドウ豆でん粉、緑豆でん粉を輸入。

輸入でん粉の国別シェア(2023でん粉年度)

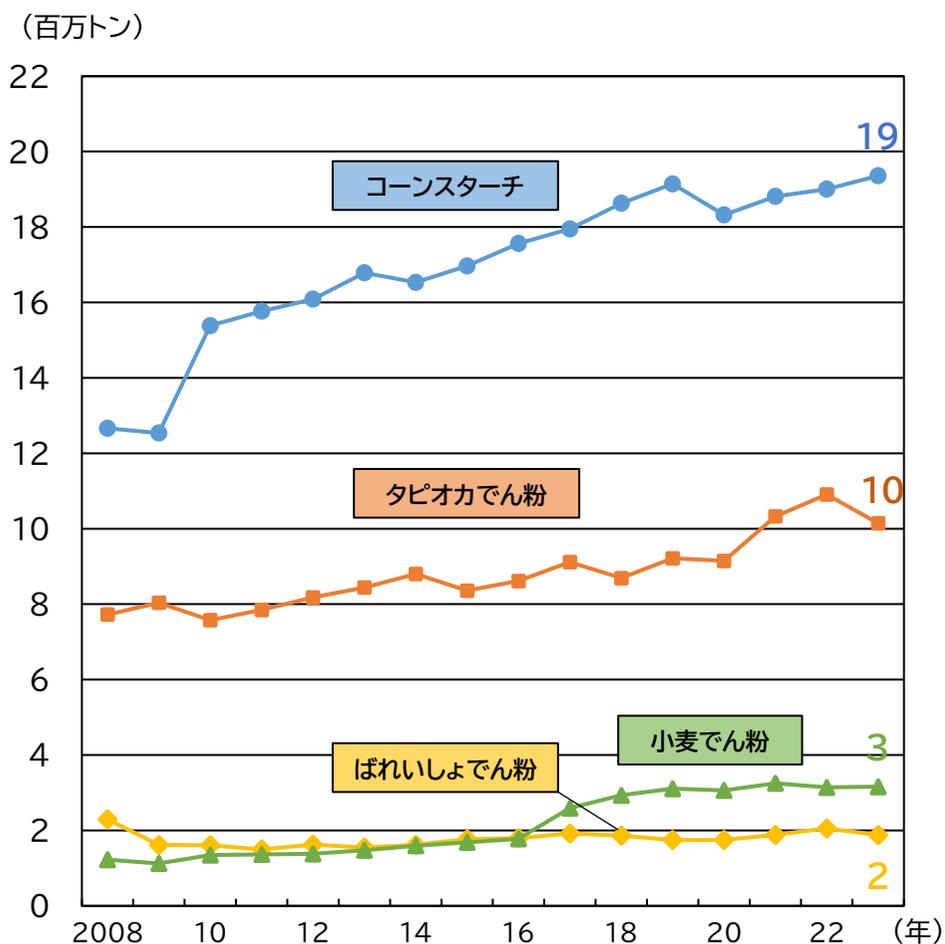


## 我が国と世界のでん粉をめぐる動向<国際編(全体)>

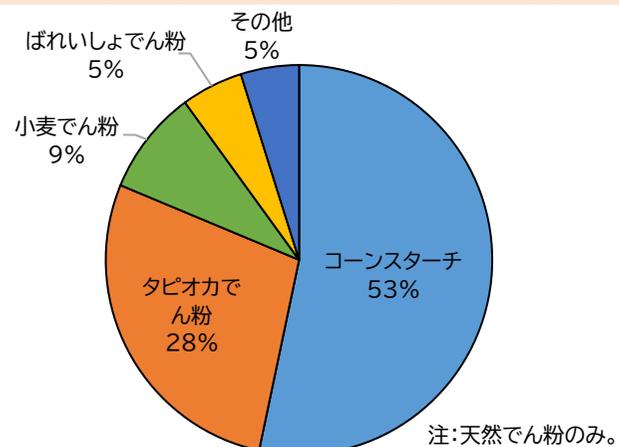
# 世界のでん粉生産

- でん粉の生産量は、人口増や経済発展に伴う需要増に応じて、増加傾向で推移。でん粉の種類別シェアでは、コーンスターチ、タピオカでん粉で生産量の約8割を占めている。
- 地域別で見ると、コーンスターチの7割がアジア(主に中国)で生産。タピオカでん粉の9割がアジア(主にタイ、インドネシア、ベトナム) で生産。小麦でん粉、ばれいしょでん粉は、欧州が最大の生産地域。

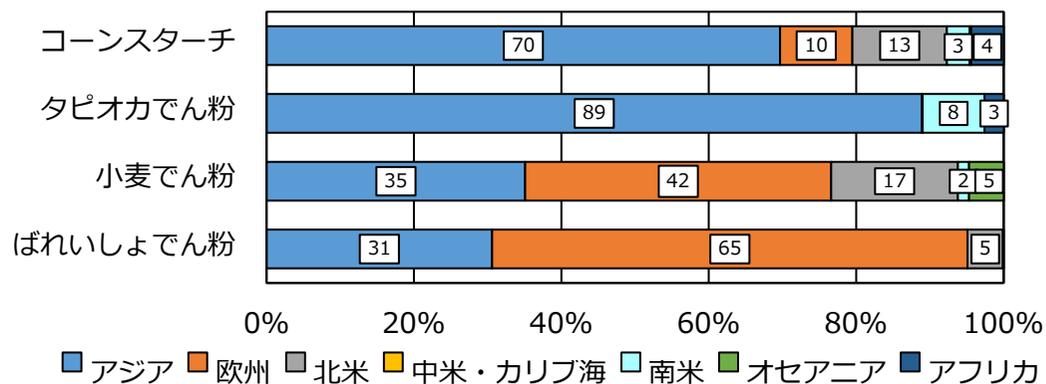
## でん粉生産量の推移



## でん粉の種類別シェア(2023年)



## でん粉生産量の地域別シェア(2023年)

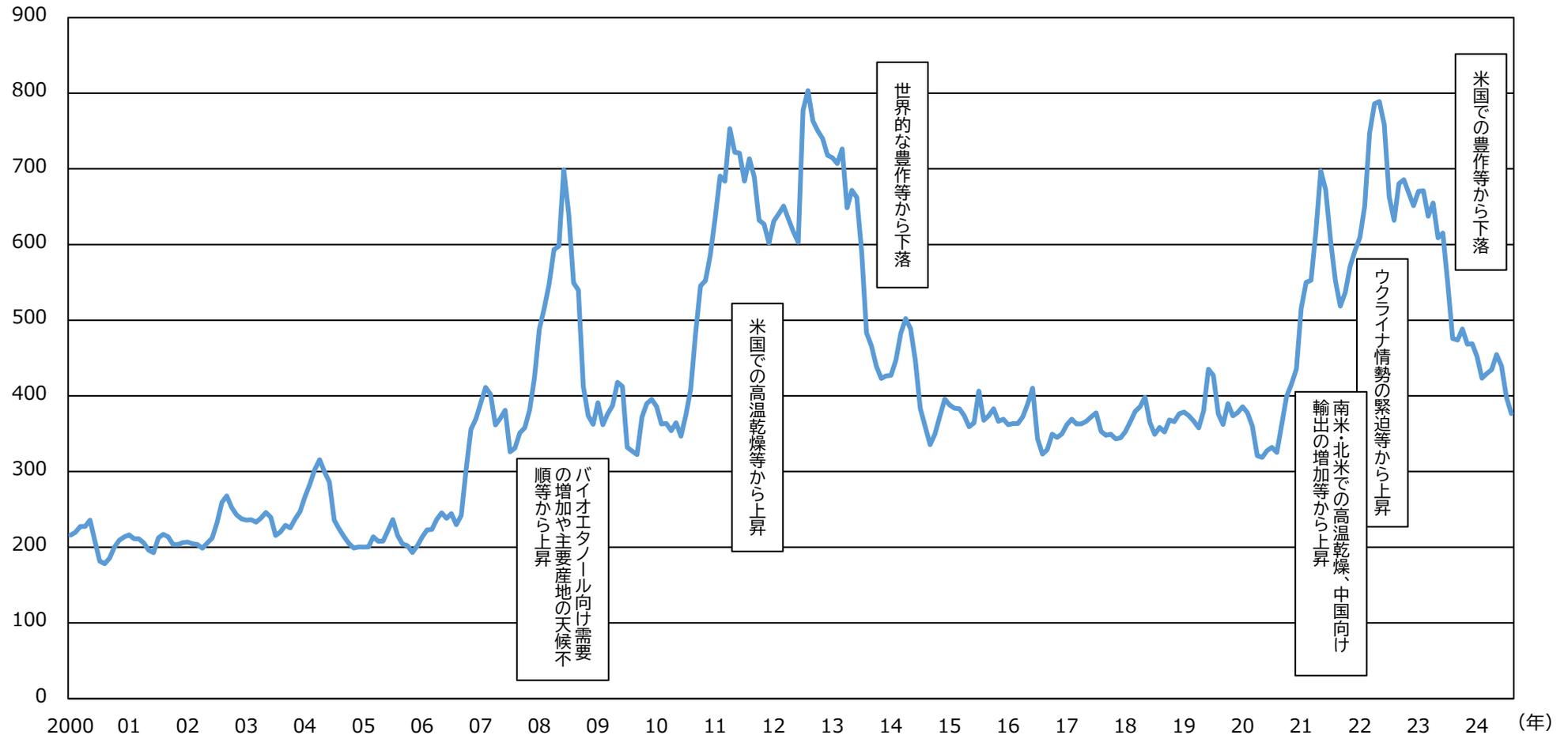


資料:ALIC「世界のでん粉需給動向」のデータをもとに農林水産省作成

## とうもろこしのシカゴ相場の推移

- コーンスターチの原料であるとうもろこしの国際価格は、主要産地である米国や南米の豊凶の見込みなどに伴って変動。
- 直近の動向では、米国での史上最高の豊作等から下落傾向。

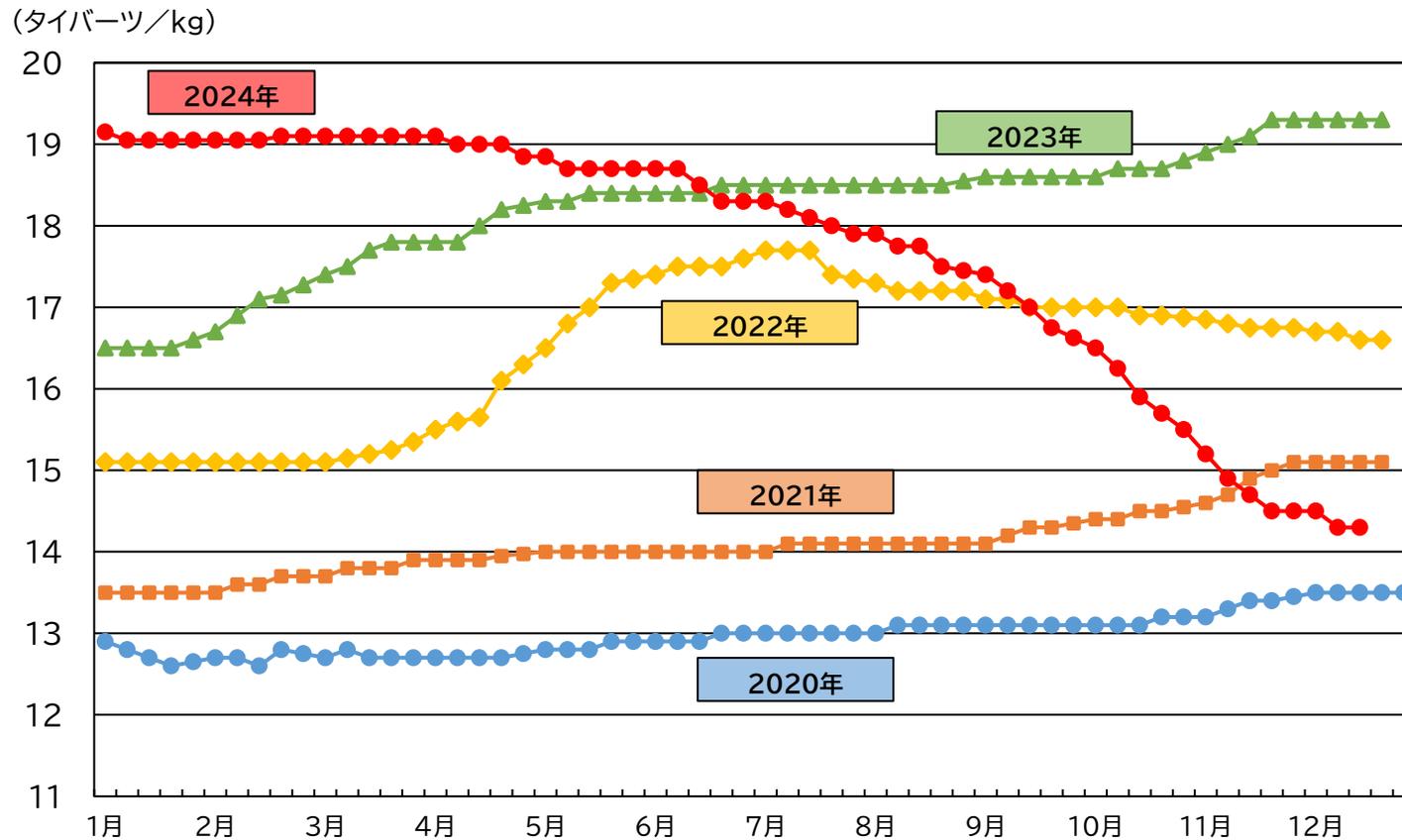
(セント/ブッシェル)



資料:シカゴ商品取引所公表のとうもろこし先物相場の期近ものの月平均

## タイ国内のタピオカでん粉価格の推移

- タピオカでん粉の主要生産国の一つであり、タピオカでん粉の輸出量全体のうち約6割を占める最大の輸出国であるタイ国内のタピオカでん粉価格は、原料作物のキャッサバの生産状況や、最大の輸出先である中国での需要の増減等の影響を受けて変動。
- 近年は、タイ現地の干ばつやキャッサバモザイク病の影響による減産傾向に加え、中国向け輸出が好調であったこと等から、価格は上昇していたが、直近では、とうもろこし生産が好調な中国での需要減等から下落傾向。

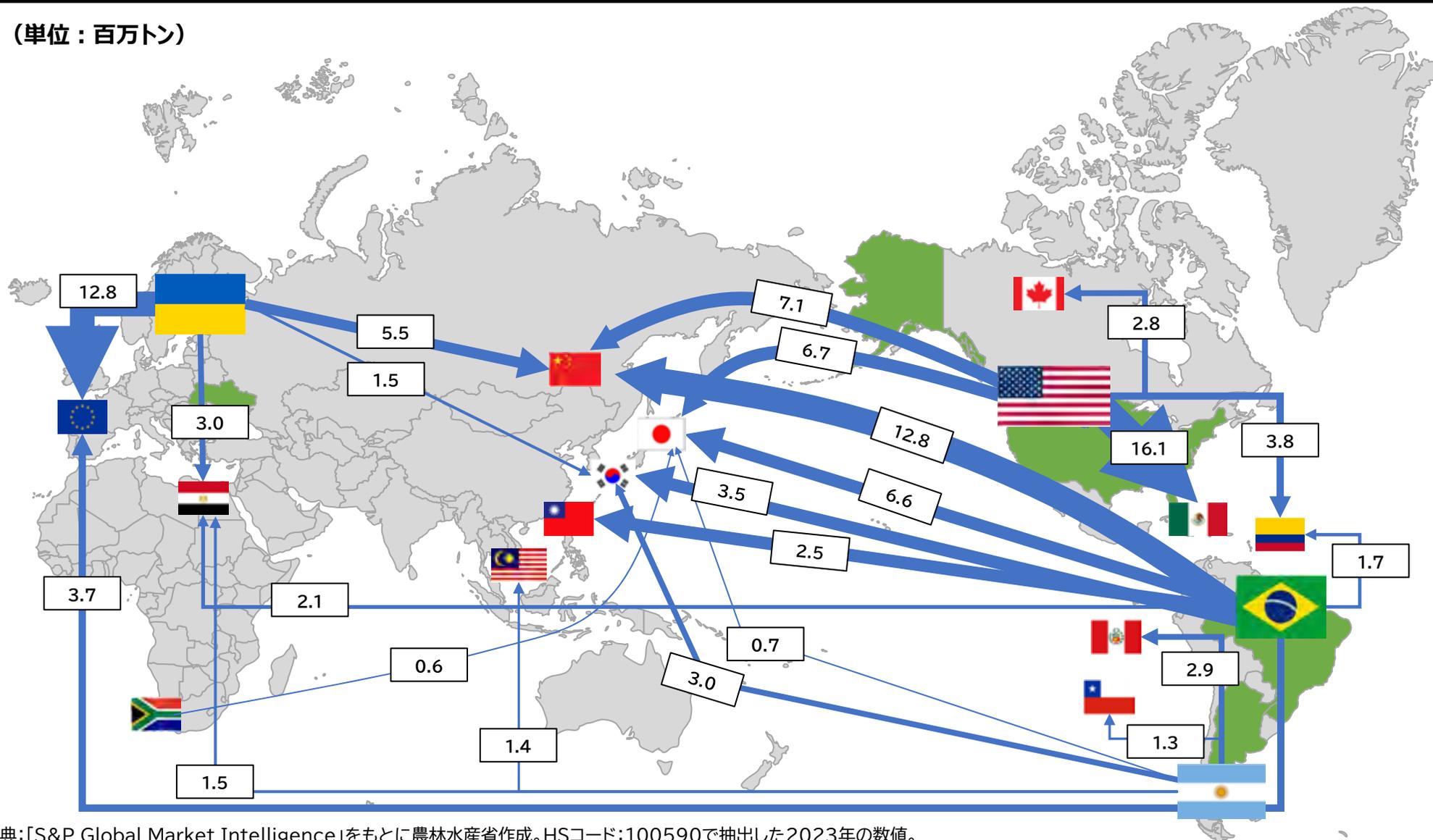


資料:タイタピオカでん粉協会(TTSA)、ALIC「世界のでん粉需給動向(2023年)」、FAOSTAT(2022)  
 注:1タイバーツ=約4.5円(2024年12月現在)

## とうもろこし(播種用除く)の貿易フロー(2023)

○ とうもろこし(播種用除く)の国際貿易について、合計輸出量が10百万トン以上の4か国で輸出量全体の7割強程度を占めており、中国を中心としたアジア地域へ輸出。

(単位：百万トン)

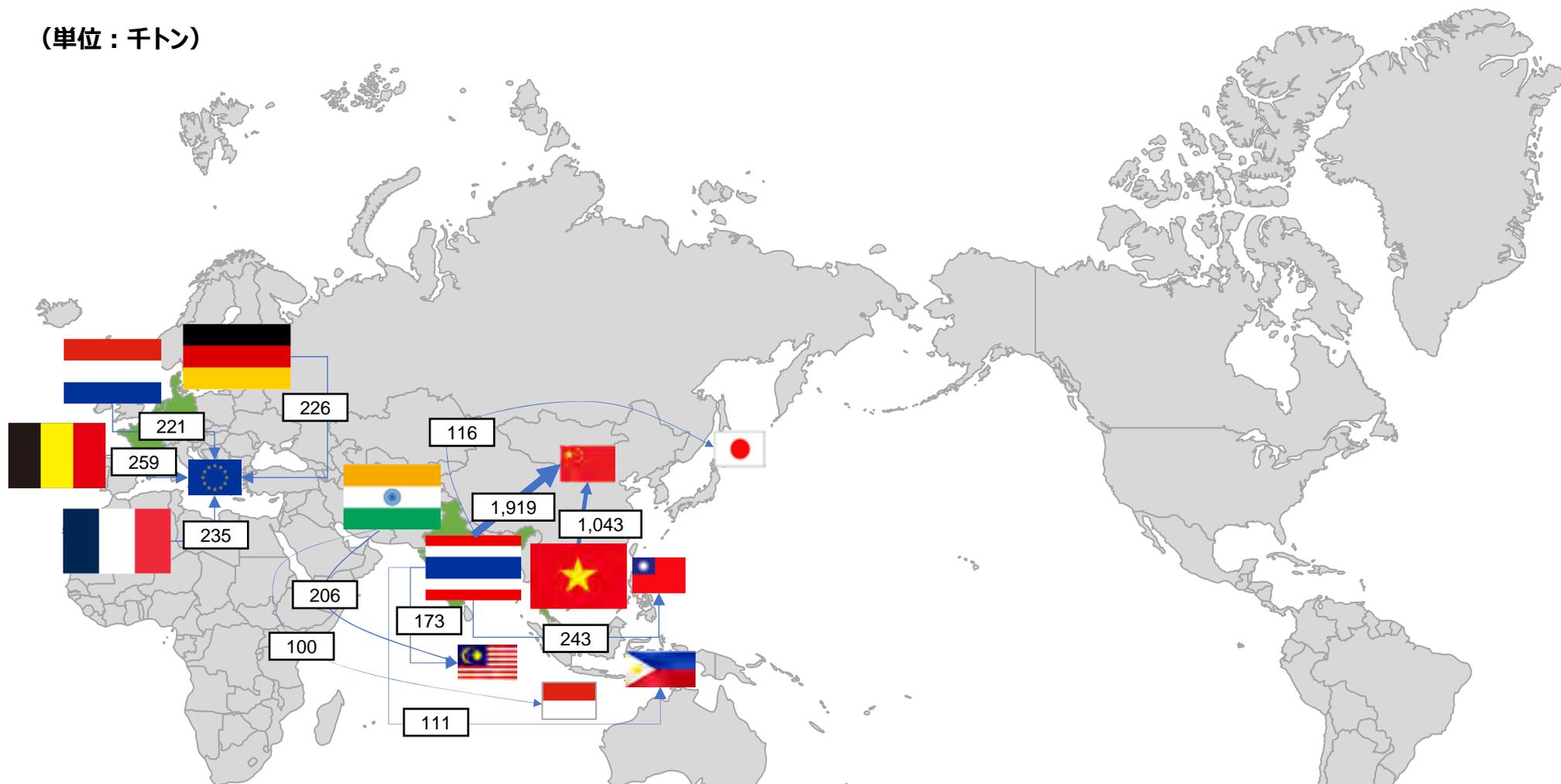


出典:「S&P Global Market Intelligence」をもとに農林水産省作成。HSコード:100590で抽出した2023年の数値。  
 注:合計輸出量が10百万トン以上の輸出国のうち1百万トン以上の輸出先国及び地域を掲載。ただし、日本への輸出量はこの限りではない。  
 レイアウトの関係から実際の国の地理上のルートは異なる場合がある。

## でん粉の貿易フロー(2023)

○ でん粉※1 の国際貿易について、合計輸出量が1百万トン以上の国はタイ、ベトナムの2か国(上位2か国で輸出量全体の5割弱程度)、その他の国は合計輸出量が500千トン未満となっており、主な輸出先は周辺国。

(単位：千トン)



出典:「S&P Global Market Intelligence」をもとに農林水産省作成。HSコード:1108で抽出した2023年の数値。

注:合計輸出量が300千トン以上の輸出国のうち100千トン以上の輸出先国及び地域を掲載。

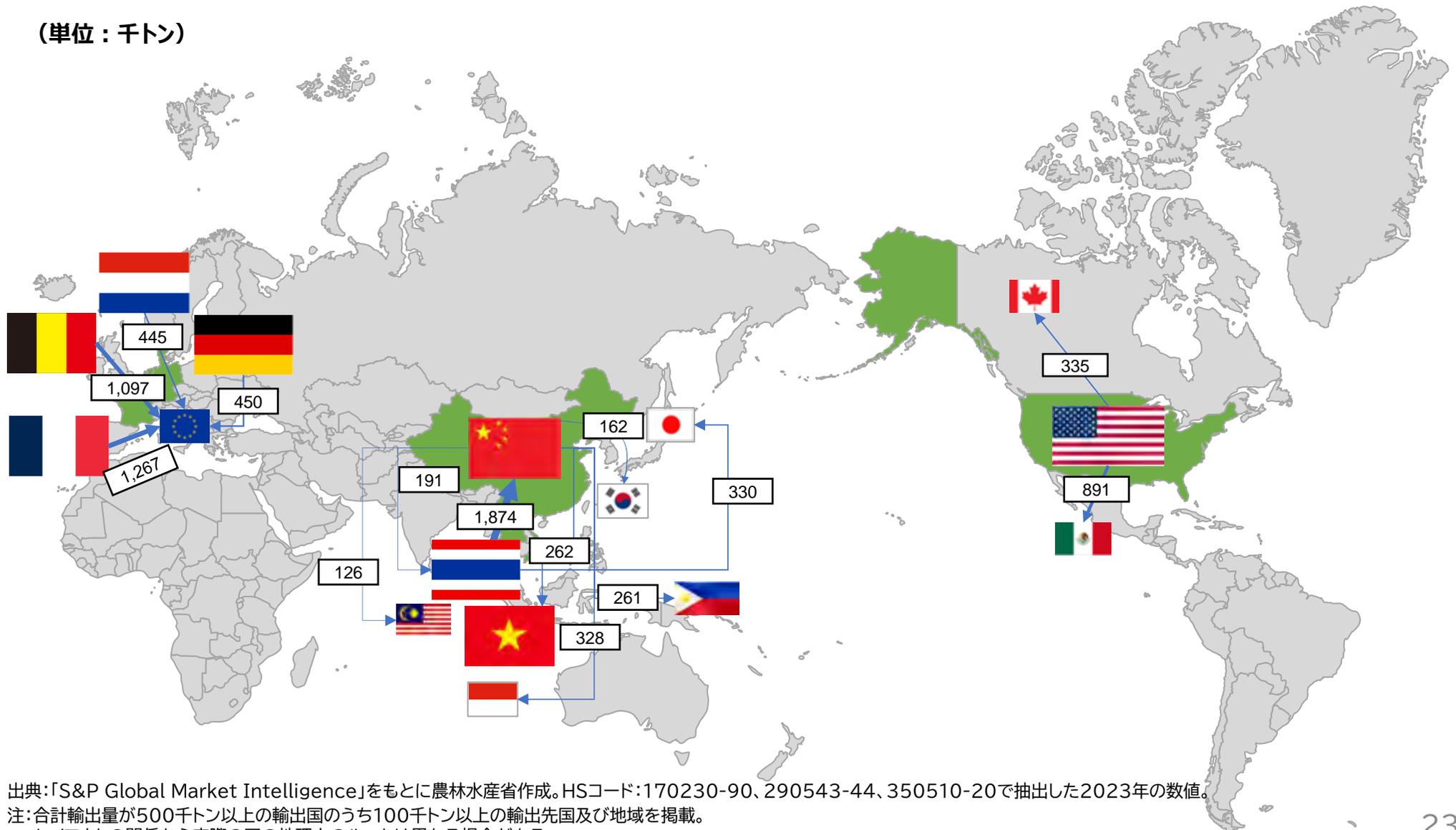
レイアウトの関係から実際の国の地理上のルートは異なる場合がある。

※1 でん粉にはイヌリンも含む。イヌリンとは水溶性食物繊維の一種。

## でん粉加工品(糖化製品、化工でん粉等)の貿易フロー(2023)

- でん粉加工品(糖化製品、化工でん粉等)の国際貿易について、合計輸出量が500千トン以上の7か国で輸出量全体の7割強程度を占めており、主な輸出先は周辺国。

(単位：千トン)



出典:「S&P Global Market Intelligence」をもとに農林水産省作成。HSコード:170230-90、290543-44、350510-20で抽出した2023年の数値。

注:合計輸出量が500千トン以上の輸出国のうち100千トン以上の輸出先国及び地域を掲載。

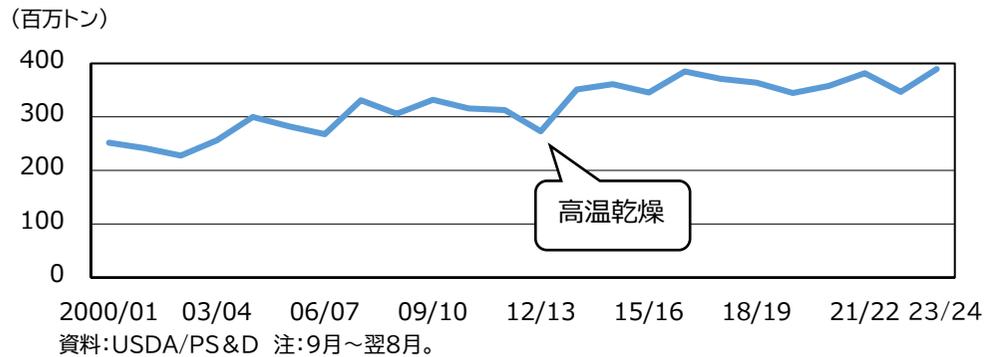
レイアウトの関係から実際の国の地理上のルートは異なる場合がある。

## 我が国と世界のでん粉をめぐる動向<国際編(地域別)>

# 米国

- 米国のとうもろこし生産量は長期的には増加傾向で推移。コーンベルトの上位4州(アイオワ州、イリノイ州、ミネソタ州、ネブラスカ州)で全体の過半を占める。
- とうもろこしは、主に燃料用エタノール、飼料用に仕向けられ、異性化糖、ブドウ糖、コーンスターチ用にも一部仕向けられる。

とうもろこし生産量の推移

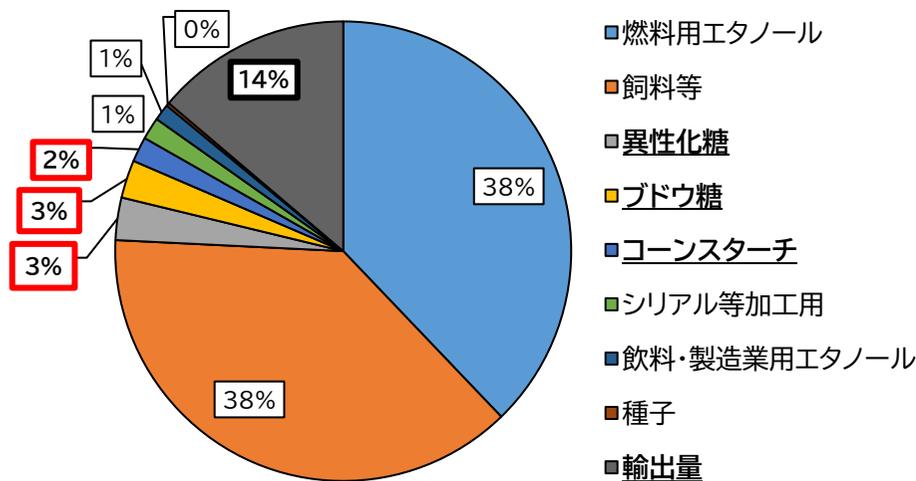


とうもろこし生産州及びとうもろこし加工工場の所在地



資料:ALIC「米国におけるトウモロコシとコーンスターチの動向」(2023)  
 注1:オレンジ色はとうもろこし生産量上位4州、黄色は上位5~10州の6州。  
 注2:とうもろこし加工工場では、コーンスターチのほか、エタノールや甘味料等も生産されている。

米国のとうもろこしの用途別仕向量(2022/23)

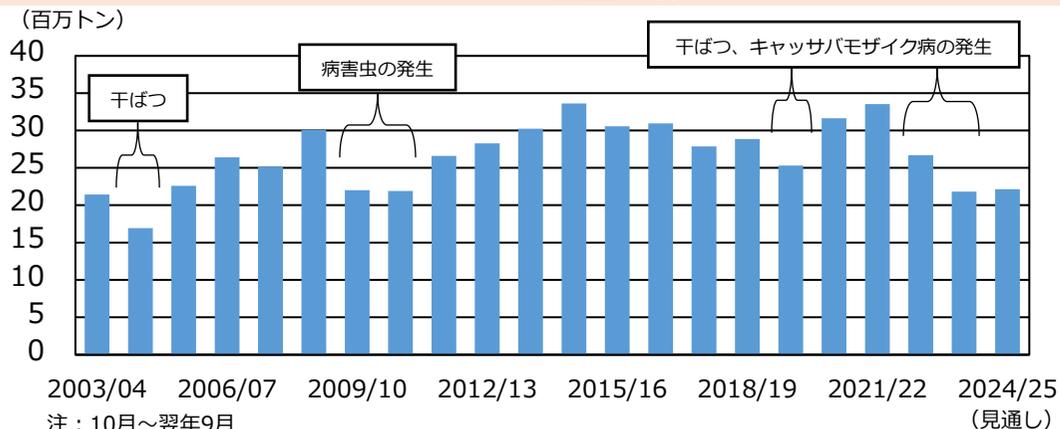


資料:ALIC「米国におけるトウモロコシとコーンスターチの動向」(2023)

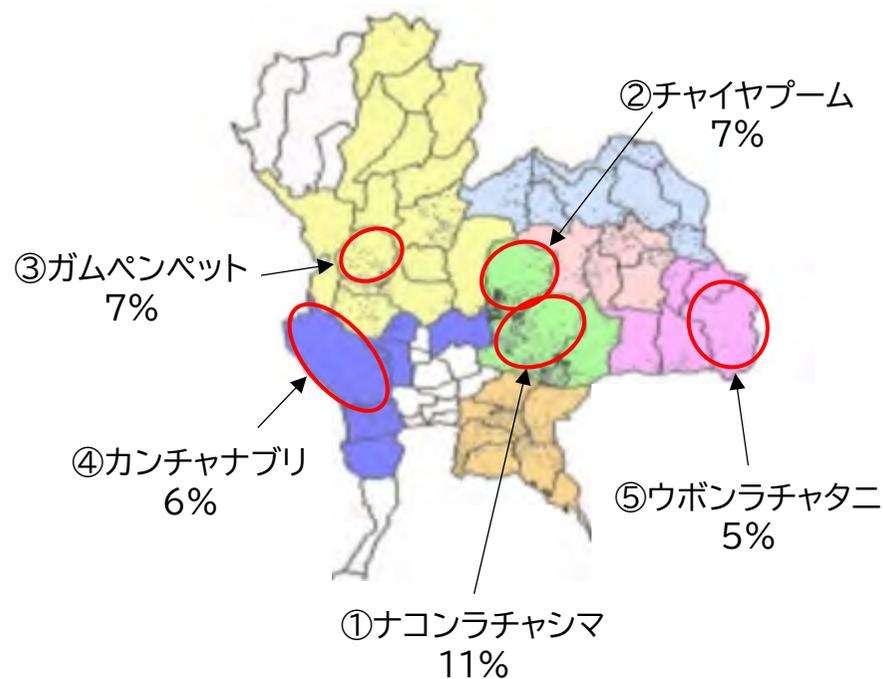
# タイ

- 近年のタイにおけるキャッサバ生産量は、干ばつやキャッサバモザイク病等により低水準。
- キャッサバの65%がでん粉用に仕向けられ、47%がタピオカでん粉・化工でん粉として輸出。世界1位のタピオカでん粉の生産・輸出国となっている。
- ナコンラチャシマが最大のキャッサバ生産県(11%)。次いでチャイヤプーム(7%)、ガムペンペット(7%)。

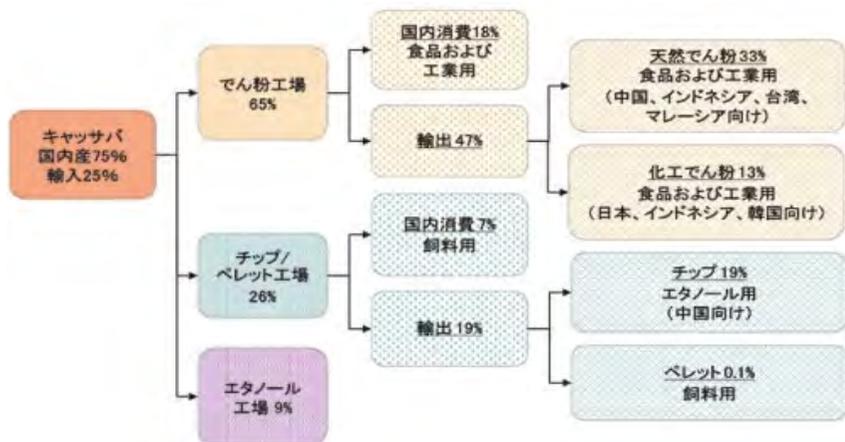
キャッサバ生産量の推移



タイのキャッサバの主要生産県のシェア(2023/24)



キャッサバの仕向け先(2020年)



出典：ALIC「タイのキャッサバをめぐる事情～キャッサバモザイク病の影響を中心に～」(2021)

## 【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC等）の公表資料、Oil World等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

### ○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

#### (1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/ampo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

#### (2) 農林水産関係機関の情報（ALICの情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

#### (3) その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

### ○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が2025年2月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度2024/25年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

[http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY\\_REPORTS](http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS)

## 主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。  
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。  
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>  
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

[http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j\\_rep/index.html](http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html)

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

<p><b>連絡先</b>      <b>農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室</b> <b>TEL : 03-6744-2368 (直通)</b></p>
--------------------------------------------------------------------------------------

## 「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。  
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）  
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）  
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外  
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）  
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、  
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）  
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、  
その他）  
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））  
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）  
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響  
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）  
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響  
中国の需要・輸入動向  
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響  
中長期（10年先）、超長期（30年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

[https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo\\_geppou\\_ankeeto.html](https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html)

